北スラウェシ日本人会

NORTH SULAWESI JAPAN CLUB

日本人会会報

Tarsius

タルシウス

第8号

タルシウス　図柄の記念切手シート

現在マナドの中央郵便局で発売中。
もちろん郵便物送信に使用可能。
他にも種類あり。価格は額面通り。
限定品なのでお早めに。

2000年正月　特大号

北スラウェシ日本人会会報　タルシウス　第8号

目　次

◎ 年頭のご挨拶　前田 良昭 …… 2

◎ ミナハサ観光案内
　タルシウス　川井 雄二 …… 4
　ワルガ遺跡公園　川井 雄二 …… 7
　イマーム・ボンジョール　川井 雄二 …… 10
　ミナハサ観光案内うちあけ話　川井 雄二 …… 13

◎ マナドに赴任して
　ふたつの「インドネシア係数」　玉置 忠嗣 …… 16

◎ クラバット山一登頂始末記　川口 博康 …… 19

◎ 日本軍関係のモニュメントについて　川口博康 編 …… 26
　慰霊の言葉
　落下傘部隊五十周年式典
　メナド慰霊祭関係
　堀内落下傘部隊長

◎ 戦前の北スラウェシ在留邦人　川井 雄二 …… 37

◎ ビトン―アンボン漁業開拓者
　原耕氏のこと　川口博康 編 …… 42

◎ ビトン駐在を振り返って　川口 博康 …… 55

◎ 場所が違えばものも違う　伊藤 澄 …… 61

◎ ビツン市内観光案内　伊藤 澄 …… 63

◎ Minahasa 料理雑感　川口 修 …… 65

◎ スラウェシだより
　動き始めた地方分権化　松井 和久 …… 67
　古着で潤う島：
　東南スラウエシ州ワンギワンギ島　松井 和久 …… 69
　サンギヘ・タウラド諸島にて（1）　松井 和久 …… 71

◎ アンボン在住10年目の事件　吉田 全志 …… 74

◎ 編集後記
　ご協力ありがとうございました　川口博康 …… 83
　新編集部長 募集中！　川井雄二 …… 84

年頭の御挨拶

北スラウェシ日本人会
会長　前田良昭

謹んで新年の御祝辞申し上げます。

どうか２０００年が皆様方にとって良き年で有ります様にお祈り申し上げます。

私もこの南の国インドネシアで４回目お正月を迎える事ができました、これも一重に皆様方の御支援，御鞭撻あっての事と心より感謝いたします。

また心身強健であり力強く皆様方と共に将来に向って躍進できます事を願っております。

日本でのお正月は家族恒例の初詣に出かけましたがインドネシアではその様な習慣も無く家族の居ない家庭にてお正月の真似事をするくらいのものですがやはり年の初めとして心新たに今年こそはと決意を致しております。

どうか皆様旧年に倍してご指導、ご鞭撻の程宜しくお願い申し上げます。

一昨年来騒乱のインドネシアでございましたが昨年は無事に総選挙も終りやっと落ち着きを見せ始めました，また昨年末には日本の外務省よりインドネシアの危険情報もやや緩和されてまいりましたがまだまだ予断の許される状況ではございません、今尚インドネシアの経済危機並びに金融危機が回避された訳ではございません回復するまでには相当な時間が掛かるのではないかと思われます、どうか在留されている邦人の皆様方が安全に生活ができます様願っておおるしだいでございます。

また今後日本からの企業家や観光客が増加するのではないかと期待もしております。

これだけは知っておきたいインドネシアの入国後の必要手続き

1）空港で入国審査官より入国許可を付与されますが、その後３日以内に居住する地域の入国管理事務所にて滞在許可ＫＩＴＡＳ（Kartu Izin Tinggal Sementara）有効期間一年を取得しなければならない、その際インドネシアからの出国または入国が必要な者は滞在許可の範囲内で数次の出入国許可ＥＮＴＯＲＹ　ＰＥＲＭＩＴ有効期間６ヶ月を取得しておかなければならない。

2）インドネシアに９０日以上滞在する必要がある場合は到着日から７日以内に居住する地域の入国管理事務所において外国人登録ＰＭＯＡを行なう事が義務付けられている、また滞在期間を延長し９０日を超える場合も必要となる。

3）上記滞在許可ＫＩＴＡＳを取得した者は入国後７日以内に居住する地域の警察署に届出て

警察登録証明書ＳＴＭＤの発給を受ける事が必要。

4）ホテル以外の場所に滞在または居住する場合は、居住地の警察に届出が必要である。また居住地を移転した場合も７日以内に新たに居住する地域の警察に届出が必要。また当国在住の外国人が自宅に他の外国人を２４時間以上宿泊させる場合は居住地の警察に届出をしなければならない。

5）外国人就労者に付いては入国後就労先の企業が３日以内に労働省に対して入国の報告をしなくてはならない。

7）外国人はインドネシア滞在中は旅券（ＰＡＳＳＰＯＲＴ），滞在許可書（ＳＴＭＤ），自動車運転免許証（当国の免許証でなくては運転は出来ない），所属企業等の発行する身分証明証等を携行する事が義務付けられている。

8）外国人は当インドネシア国に６ヶ月以上滞在した後に出国する場合は出国許可を取得しなければならない。

9）在留外国人は外出の際は、滞在許可ＫＩＴＡＳ，警察登録証明書ＳＴＭＤのオリジナル及び旅券ＰＡＳＳＰＯＲＴのコピーを携帯する事が義務づけられている。

在留邦人の方々に御願い

当インドネシアに在留されている方、また今後在留される方々は総領事館への在留届を提出して頂きますようお願い申し上げます。

また在留届けを既に提出されている方々で居住地の住所や旅券の記載内容等の変更または電話やＦＡＸ番号の変更がある方々は必ず在留届を再提出して下さいます様御願い申し上げます。

なお、新しい書式の在留届が私または副会長辻田様の所にございますので必要な方々には発送または持参致します。

在外選挙人名簿への登録申請

登録の必要性とその時期

海外における投票は，在外選挙人名簿に登録された方のみ出来ます。在外選挙人名簿への登録を希望する方は、ご本人が自ら管轄する総領事館の領事窓口で申請を行なって頂く必要があり、代理人による手続きは認められておりません。在外選挙人名簿への登録申請は、１９９９年５月１日から開始され，同日以降随時管轄の総領事館の窓口で登録申請が出来ます。

但し，土曜、日曜，祝祭日は総領事館はお休みですので申請は出来ません。

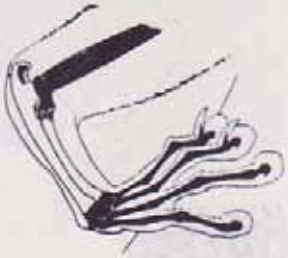
前田良昭

改訂版

タルシウス

川井　雄二

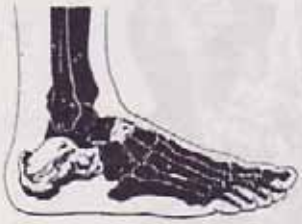
霊長目原猿亜目メガネザル科。世界で最も小さい猿の一つである。
この原猿はタルシアとも呼ばれ、一属三種に分類される。
和名：メガネザル《眼鏡猿》は、巨大な両眼をメガネに見立てたもの。
英名：Tarsier　　仏名：Tarsier
独名：Koboldmaki　蘭名：Spookmaki
露名：ДОЛГОЙЯТ。



タルシウスの足

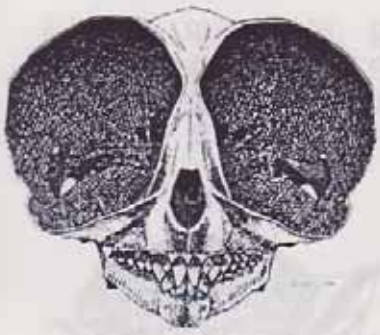
属名タルシウスは、足の裏側を示すギリシア語
タルソス Tarsos に由来する。
後ろ足の跗（ふ）骨部が非常に長いことにちなむ。

このメガネザル科は分類学上特殊な地位を占めている。
この科は新猿類とキツネザル類の中間に位置しており、
始新世の霊長類の生き残りとされる。



人間の足

タルシウスは、下記の３種類に分類される。
① Tarsius Spectrum　（セレベス・メガネザル）
　　スラウェシ島に生息する
② Tarsius Syrichta　（ミンダナオ・メガネザル）
　　フィリピン南部諸島に生息する
③ Tarsius Bancanus　（ボルネオ・メガネザル）
　　カリマンタンとスマトラに生息する
インドネシア語では、『Tangkasi』『Wesing』などと呼ばれる。



タルシウスの頭蓋骨

顔は鼻口部の突出がきわめて弱いため平面的で、眼窩（がんか）は非常に大きい。
顔の中に占める目の大きさの割合は、人間でいうと顔にテニス・ボールほどの目がついていることになる。
前に向いた大きな目は樹上での立体視に都合がよい。
多くの猿は夜は目がよく見えないが、猫の仲間は瞳孔を大きく開くすかな光でも見える。
同じ猿でもこのタルシウスやロリスは、夜かすかな光でも物が見えるが、昼間は眩しくてほとんど眼を開いていられない。
眼の働きのこのような違いは網膜にある神経細胞の違いである。錐のある細胞は、昼間物が見え、色が見える。
桿（かん）状体のある細胞は夜の微かな光で物が見える。
網膜にこのどちらの細胞が主にあるかによって差が生じるのである。

耳介は膜質で大きく、自由に動かすことができる。
眼は前方しか見ることができず、左右を見るためには頭ごと動かさなければならない。
首の関節は融通性に富み、１８０度回転させて後ろを向くことができる。

頭同長10～15cm。尾は途中まで無毛で先端に房毛があり、長さは15～20cm。体重は 100～170g。雄と雌の性差が少ない。体色は灰色のものから茶色のものまである。
歯式は$\frac{2・1・3・3}{1・1・3・3}$で、計３４本。

全ての指の先端にアマガエルに似た吸盤状の柔らかな肉塊があって、木につかまる時に把握力を助ける役割を果たしている。
後肢の第２指と第３指にかぎづめを持つほかは、全て平づめである。

主として低地の二次林に生息する。
体軸を垂直に保って木の幹などにつかまっていることが多い。
夜行性樹上生活者であり、昼間は枝につかまったまま体を縮めて眠る。
主に昆虫や蜘蛛、小型爬虫類を好んで食べ、肉食の傾向が強い。
よく発達した後肢によって、頭同長よりも長い尾でバランスをとって２m余りも跳躍することができる。
木から木へカエルが跳びはねるような方法で飛び渡る。
獲物を捜し、狙いをつけて飛びつき両手でつかまえる。
捕まえた獲物は直ちに口に運び、よく噛んで飲み込む。

単独生活をするか、または雌雄一匹ずつと１～２匹の子供からなるペア型のグループをつくる。
１産１子で、成体の1/2 に近い頭同長を持つ大きな子を産む。
子は目が開いて十分に毛が生えて生まれ、直ちに雌親の腹に抱きつく。

大きな脳、平面的な顔、発達した視覚などの特徴が高等霊長類である反面、左右の大脳半球をつなぐ脳梁の発達が悪いなど、極めて原始的な哺乳類と共通の特徴も残しており、これらのために、メガネザル下目という独立の分類群が設けられ他の原猿類から区別されている。

このように、タルシウスは猿の仲間だといってもかなり特殊な生態をもつ。
『フクロウの頭を持ち、アマガエルの行動をする超小型の猿』とでも説明すればよいだろうか。
かつて、人々はタルシウスは梟（幽霊鳥）が化けたものだと思い、『幽霊猿』と呼んで恐れた。
タルシウスを目にしてしまった者には不幸が訪れるじられ、それを逃れるためには３日間家の中に籠らなければならないとされた。
英語でもタルシウスは、別名『Spector Lemur（幽霊狐猿）』という。

スラウェシメガネザル *Tarsius spectrum*
股のあいだから伸びでた奇妙な尾。
この種を描いた図の決定版として
何度もコピーされた本図は、ド・セーヴによる。
初出はビュフォンだが、ここに掲載した再刻図は
シュレーバーの哺乳類誌より。フィリピン産［15］。

付記：《タンココの森　再探検顛末記》

かつて会報『タルシウス』第３号で、タンココ森林公園の紹介記事を載せた。
これは1998年11月に行った時の体験に基づき書いたものである。
その半年後の1999年４月に再び同公園を訪れたので、前回との違いに触れたいと思う。

(1)　途中の道が前回よりも更に悪くなっており、通りかかった地元の人々の助けを借りてようやく難を逃れることができた。タンココ森林公園に行く場合は、是非四輪駆動車を使用することをお勧めする。また、非常用の食料や飲料水も持参した方がよいだろう。

(2)　翌日から両足のくるぶしがはれ、猛烈に痒くなった。やがて時間がたつにつれ直径５㎜位の赤い斑点となり、痒みが増すと共にだんだん上の方に広まり、膝、太股、更には両肢の付け根周辺まで赤斑点が繁殖した。ボールペンで印をつけながら数えてみると、何と大小438 個もあった。
　この痒みはムヒやキンカンを塗っても如何ともしがたく、約１週間のたうちまわった。同行した人も同様な苦しみを味わったという。
　これは、漆類にかぶれたせいか、あるいは何かの小動物に刺されたのか（日没を待つため長時間しゃがむ格好でいた）定かではないが、前回何ともなかったのに今回だけ被害にあったのは何故だろうか。その理由を推測してみた。
　①前回は厚手のＧパンだったが今回は薄地のスラックスを着用していた。
　②前回は日没間際に着いたため森の中にいる時間が短かったのに対し、今回は時間的余裕を持ってのんびり森の中を散策した。
　③前回は雨期で雨の降った直後であったが、今回は乾期で森は乾燥していた。

(3)　前回感動した蛍の光景は残念ながら今回は見ることができなかった。
ガイドの話によると雨期が蛍のシーズンであるという。

— ミナハサ人の先祖を偲ぶ —

在サワガン　ワルガ遺跡公園

《 Taman Purbakala Waruga　Sawangan 》

川井　左雄二

ワルガ(Waruga)とは、ミナハサ地方の《石棺》のこと。ドマト(Domatu)という立方体の石の内部をくり抜いて空洞にし、座る姿勢にした遺体を収めた墓である。

ワルガ(Waruga)の語源は、『Wale Marogha』で、『朽ち果てる肉体の家』という意味である。

ある者が亡くなると、その遺体は硬直状態になる前に、何人かの男性によって座る姿勢に矯正される。両手は膝を抱くような形にされ、紐で縛られ、椅子に立て掛けられる。遺体が完全に硬直すると、縛っていた紐がほどかれる。

これは、当時のミナハサ人の宗教観に基づいている。つまり、『胎児は母親の子宮から座った状態で産まれて来て、座った状態にて永遠の眠りにつくことができる』というものである。

納棺の様子　【想像図】

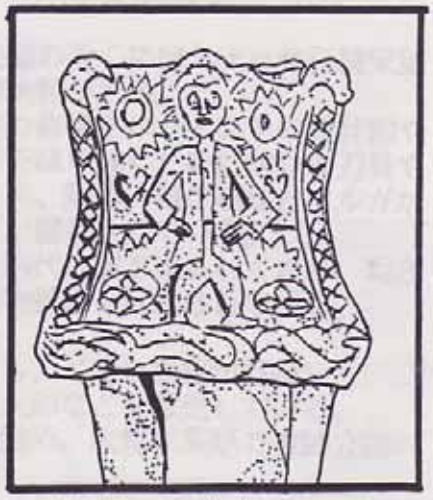
その後、ワリアン(Walian)という古代ミナハサ信仰の司祭が呼ばれ、死者が安らかな眠りにつけるよう儀礼が行なわれる。

遺体は、まず稲を撒いた土製の皿の上に載せられる。死者が最後の息を引き取った部屋にも稲が撒かれる。そして、ワリアンによる祈りの言葉が唱えられる。

祈りが終わると、遺体は４人に担がれ、家の周囲を３回廻る。そして最後に床に稲を撒いたワルガの中に納棺される。遺体は北の方角を向くように置かれる。
また、生前死者が愛用していた物品もワルガの中に一緒に入れられる。

キリスト教が入る以前のミナハサでは、墓地という概念がなく、ワルガは、各々の家の庭の片隅にあり、家族の墓として何回も利用された。
しかし、一度に複数の人間が亡くなった場合、新たに別のワルガが作成された。
ワルガの製作地は、サワガン村からトンダノ川をはさみ、900 m程西方にあるテタアン(Tetaan)という地である。同地では現在もワルガ製作の残骸を見ることができる。

ワルガが、いつ頃から始まったかは定かではない。
それは、古代ミナハサ族が文字を持たなかったことが大きな理由である。
フタである上棺は、無地のものと種々のモチーフを彫刻したものとの２通りに大別できる。
勿論前者の方が歴史が古く、後者は１６世紀以降のものが多いという。
上棺に彫刻されたモチーフの内容の一部：
① 犬を使って狩りをする光景。
② 母親が子供を産む姿を段階的に表したもの。
③ 争う２人を裁く裁判官。
④ 大きな権力を握る部族長。
⑤ 着物を着た日本人。太陽と竜。裏には家紋。【図】
⑥ 犬、鶏、鳥、竜、アノア、バビルサなどの動物。
⑦ 向日葵、果実、葉などの植物類。


104番　日本人のワルガ

前述のように古代ミナハサ族が文字を持たなかったためワルガには記されてはいないが、古くから口伝えで下記の21人のドトゥ(Dotu)／家長の名前のワルガが知られている。

1. Dotu Karamoy
2. Dotu Manampining
3. Dotu Runtuwarow
4. Dotu Runtukahu
5. Dotu Oley
6. Dotu Maramis
7. Dotu Kaseger
8. Dotu Ruruwallah
9. Dotu Crintudus
10. Dotu Mamarimbing
11. Dotu Mangdong
12. Dotu Wongke
13. Dotu Soloy Kaunang
14. Dotu Peterus
15. Dotu Roring Pandey
16. Dotu Mantiri
17. Dotu Saidi Pongoh
18. Dotu Pangemanan
19. Dotu Kalalo
20. Dotu Kalalo-Lumtungan
21. Dotu Tangka Warouw

１９世紀初頭、ミナハサ地方を襲った疫病により多数の死者が出てワルガの製作が追いつかなくなったことや、キリスト教の伝播などもあり、ワルガの伝統は幕を閉じた。
その後、サワガン村のワルガは以下の３段階を経て、現在の位置に集められた。

(1) 1817年、サワガン部落のフクム・トゥア(Hukum Tua／ミナハサにおける村長の称号)カラモイ (Karamoy)の命令により、今まで各人の家の庭にあったワルガが集められ、キリスト教墓地の近隣に移された。（現在のワルガ遺跡公園の地）

(2) 1932年、フクム・トゥア、ワンケ(Wangke)により２個のワルガがトンダノ川の対岸に移された。その中の一つはオランダ総督の Van Limbung Stirum の要望によりジャカルタに移された。同総督は1929年にサワガンを訪問している。
このワルガは、その後オランダのライデン大学の博物館に送られたという。

(3) 1960年代、フクム・トゥア、カラロ(Kalalo)により当時まだ移されていなかった周辺のワルガ１２個を現在の場所に移した。これでワルガは合計１４４個となった。

ワルガの調査のために各国から学者がサワガンを訪れているが、インドネシア政府の文化遺跡復興プロジェクトにより、1976年１月３日～１月16日の２週間、専門家による本格的な調査が行なわれた。
調査団は９名からなり、団長は在ｳｼﾞｭﾝﾝ･ﾊﾟﾝﾀﾞﾝ 教育文化庁Ⅳ支局長 Drs.Hadimulyonoで、副団長はガジャ・マダ大学の Drs.Sumiaty Atmosudino であった。

この調査報告により、サワガン・ワルガ古代遺跡公園修復プロジェクトが、1977/1978 年度予算 Rp.15,500,000.-と決定し、1977年９月から1978年にかけて修復工事が行なわれた。
1978年10月23日、教育文化大臣 DR.Daoed Joesoef によって認証された。

ワルガ遺跡公園の近くにはミナハサ伝統家屋でできた私設博物館がある。
ここには前述の修復プロジェクトの設計図やドマト(Domatu)をほり抜くために用いた刀具や腕輪、ネックレス、陶器、槍の穂などワルガからの出土品などが展示されている。
尚、ワルガの中の遺骨や埋葬品などは全てオランダ植民地時代に取り出されており、現在石棺の中は空である。埋葬品の一部は北スラウェシ国立博物館にも展示されている。

また遺跡公園の入口付近には、土産店『SAWANGAN』がある。（青い屋根が目印）
ワルガの模型やモチーフの木彫り、絵葉書、タルシウスの人形などを販売している。
この店のオルチェ(Ortje Kambon) おばさんはガイドも勤め、流暢な英語で遺跡公園の説明をしてくれる。（チップ：Rp.5,000-10,000-程度）
オルチェおばさんの説明によると、
『ワルガは全て北に向けて建てられている。これはミナハサ人の祖先がモンゴリアから渡来したことに由来する。また、ワルガの形は中国の寺院を模している。』という。

ミナハサ伝統の踊り、チャカレレ（Cakalele）という歓迎のダンスはなかなか見る機会がないが、ここで見ることができる。（約１時間）
大人のグループと子供のグループの２種類ある。それぞれ１２人程のメンバー。いづれも料金15万～20万ルピア。２日前にオルチェおばさんに予約する。TEL:８９２３７３

この遺跡公園のもう一つの見所は、樹齢百年の朽ちた『カンボジヤ』の木である。
妖気を漂よわせ、おどろおどろした雰囲気である。公園の周囲にある一般墓地の色あせた十字架群を背景に、幻想的な情景を醸し出している。
日没後蝙蝠が徘徊し始めると、さながら怪奇映画の舞台の中にいるようである。

◇◇◇◇◇◇◇　◇◇◇◇◇◇◇　◇◇◇◇◇◇◇　◇◇◇◇◇◇◇

作家高見順は、昭和16年１月27日から５月６日までパラオ、メナド、マカッサル、スラバヤ、バリ、バタビヤの旅に出、帰国後その旅行記を『蘭印の印象』という本にした。
【改造社。昭和16年９月27日発行】
以下の文は２月８日のメナド寄港の項を一部抜粋したものである。

『サワンガン部落の有名な土人墓地に寄る。百四五十ほどの家の形をした墓石にはいづれも人間の彫像が飾りのやうにつけてある。そして、その彫像には、男女の生殖器がついてゐて、男の墓、女の墓と一見して分るのである。赤ん坊を生んでゐる格好のもある。難産で死んだ女の墓であらうか。
墓石を拳で叩いてみたが、なかが空洞らしく、或は石の質にもよるのだらう、土を叩いたやうな頼りない音がした。
この墓地には、もと日本人の墓もあつたといふ。日本人の紋が刻んであつたので、それと分るのだつたが、蘭印當局がその墓を撤去して了つたとの事である。
昔、ここに漂流した日本人が、鎖國のために歸れず、住みついたのであらう。土民の姓に、日本人の名から出たらしいゴンタとか、姓を受けついだらしいアンド、ゴトウ（？記憶不明）と言ふやうなのがあるといふ。
墓地の出口に太い竹のやうな、そして節の間の短い木があつた。ビンロー樹である。』

イマーム・ボンジョール

TUANKU IMAM BONJOL

川井　雄二

タルシウス第４号の『マナドに流刑された英雄たち』の項で、西スマトラ出身の国家英雄、イマーム・ボンジョールの墓地を紹介したが、同号で写真を掲載した白い墓碑（右写真）が、後日黒い墓碑（左写真）に替わっているので驚いた。

墓地の管理人
アイヌンおばさんと
孫娘のスリィ

墓地の管理人のアイヌンおばさんに尋ねたところ、ジャカルタからイマーム・ボンジョール《子孫の会》の者が来て、墓碑を取り替えていったということ。
イマーム・ボンジョールの本名が違っているというのがその理由らしい。
代々墓地の管理をして、長年親しんだ墓碑を替えられるのはアイヌンおばさんとしては不本意だっただろうが、従者の子孫として主人の子孫の命令に従わざるを得ないのだ。

以前の墓碑（白）（右写真）	本名	:	PETO SYARIF Ibnu PANDITO BAYANUDDIN
	生年月日	:	1774年　Tanjung Bungo/ Bonjol にて
	死亡月日	:	1854年11月６日　Lota Minahasa にて
新しい墓碑（黒）（左写真）	本名	:	MUHAMMAD SHAHAB
	生年月日	:	1774年　Tanjung Bungo　Bonjol にて
	死亡月日	:	1854年11月６日　Lotta Minahasa　にて

第４号の『北スラウェシ出身の国家英雄』執筆に際しては、『ALBUM97 PAHLAWAN NASIONAL』を主要文献としたが、これは、教育文化省から学校用教材として認可を受けたものである。その中で、イマーム・ボンジョールの本名は『 PETO SYARIF』とされている。
そのため別の資料をあたったみることにした。
Drs.Mardjani Martamin 著『TUANKU IMAM BONJOL』（1985年　教育文化省発行）がかなり詳しい内容である。また、教育文化省発行であるので信頼度が高い。

これによると、イマーム・ボンジョールの本名は『MUHAMMAD SYAHAB 』である。1772年、Tanjung Bunga で、母 Hamatan、父 Khatib Rajamuddin の間に生まれた。父は、イスラーム教師で、通称 Buya Nuddin と呼ばれていた。 Sinik 、Santun、Halimatun という３人の姉妹がいたが、Halimatun 以外は異父であった。
『 PETO SYARIF』というのは、後日イスラーム教師となった時、教え子たちから与えられた称号である。PETOというのは『ウラマー／法学者』の意味である。

《子孫の会》のメンバーの主張する通り、従来の墓碑に刻まれていたのは確かに本名ではなく『通称名』であった。これはイマーム・ボンジョールのみならず父親の名前においても同じである。
しかし、長年親しんだ墓碑を突然取り替えられたアイヌンおばさんのショックは大きい。

1837年、イマーム・ボンジョールはオランダ軍によって捕らえられるが、その後の彼の足跡を辿ってみる。
最初はブキット・テインギーの監獄に収容されていたが、民衆の動きが激しくなったため、パダンの監獄に移された。しかし、パダンでも彼の釈放を要求する運動が強いため、ミナンカバウの地に置いておくのは治安上非常に危険であると判断したオランダ側は、1838年１月23日、彼を西ジャワのチアンジュールに移すことを決定した。
チアンジュールでは、彼は教師としてイスラーム学を教えることを許可された。生徒の数はみるみる増え、他の地方からも彼の教えを請いに来る者も少なくなかった。彼の影響力を恐れたオランダ側は、同年彼をアンボンに移した。アンボンでは、オランダは僅かな生活費だけを支給し、一切の活動を禁止した。しかし、それでもオランダ側の不安は消えず、1839年１月19日、67歳の彼はマナドに移された。

マナドでも数回居住地を移されたが、現在墓地があるロト村が終焉の土地となった。マナドではイマーム・ボンジョールを知る人間はおらず、彼は一人の農民として余生を送った。しかし、25年間の滞在において、彼の人徳により宗教、人種の枠を超え、マナド人のみならずオランダ軍人の中にも彼を敬愛する人々も多かったという。
1864年11月８日、イマーム・ボンジョールは流刑のまま死去。92歳の高齢であった。

以上が、『TUANKU IMAM BONJOL』からの抜粋であるが、一つ疑問点がある。同書だけでなく他の一般の文献でも、イマーム・ボンジョールは、生年1772年、没年1864年（92歳）となっているが、墓碑には生年1774年、没年1854年（80歳）と記されている。これはどういう理由であろうか。機会があれば《子孫の会》に尋ねてみたい。

APOLOS MINGGU	ｱﾎﾟﾛｽ・ﾐﾝｸﾞｰ
UMUR 80 THN	80歳
MENINGGAL PADA	死亡日
28-3-189X	189X年3月28日

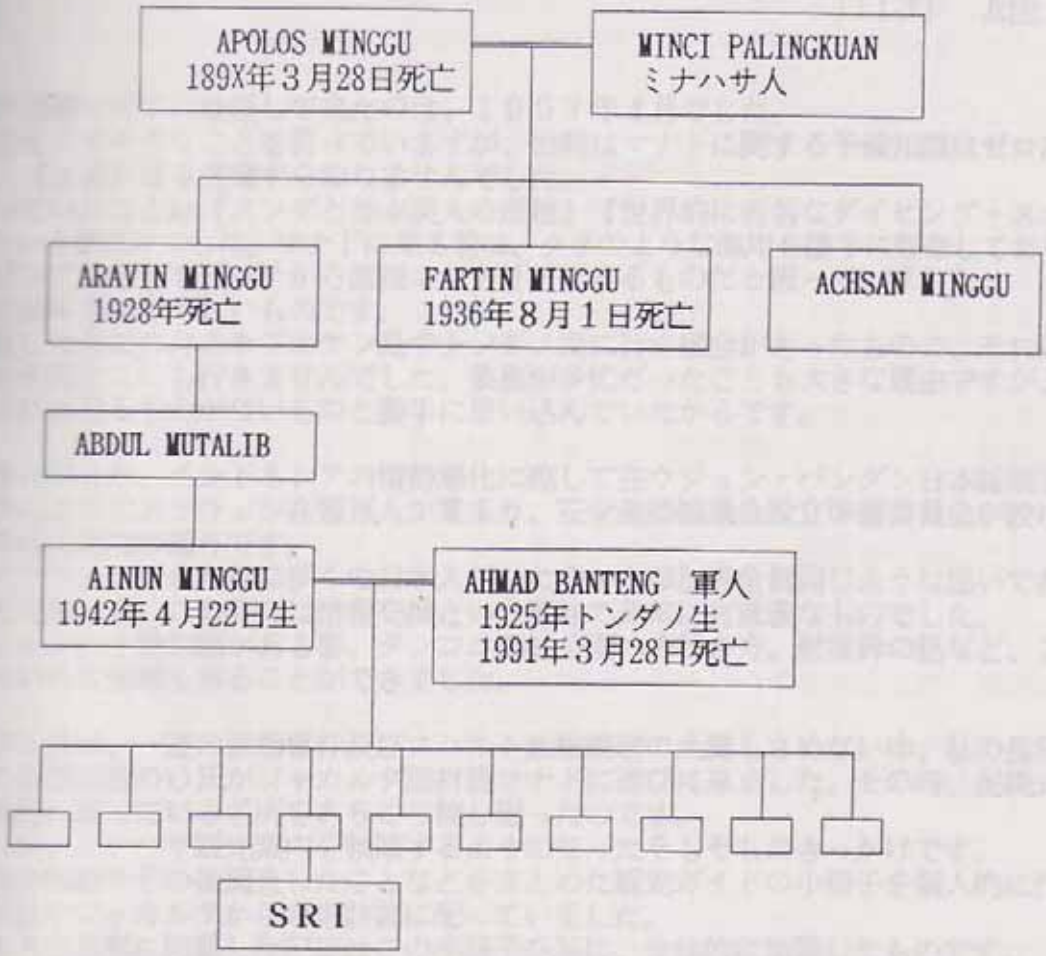
従者 アポロス

西スマトラからマナドまで、イマーム・ボンジョールについてきた唯一人の従者、それがアポロス・ミングーである。
史書には一切出てこない陰の人物である。
彼こそが此処ロト村で、イマーム・ボンジョールの臨終を見届け、その墓を守り続けた忠実な男である。

死後も主人に寄り添うかのように、従者アポロスの墓もイマーム・ボンジョール記念公園敷地内にある。

死亡月日の最後の数字がかすれて判読できないが、逆算すると生年月日は1810～19年、つまり20～29歳の時主人に従ってマナドに来て、50年以上を異郷で過ごしたことになる。
彼の心境を思うと胸が痛む。

従者 アポロスの家系図



アポロスとその子孫は、１３５年間にも渡ってイマーム・ボンジョールの墓地を守り続けてきた。アイヌンおばさんは、曾祖父アポロスの意志に従い、現在まで墓地の管理を行なっている。

しかし、その経済状態は非常に苦しい。アイヌンおばさんの収入源は、僅かな年金と観光客から入るチップ、及び《子孫の会》からの不定期な寄付だけである。昨年の経済危機以降、観光客の数が激減し、今や中学生の孫娘スリィの学費を捻出することも容易ではない。

更に、アイヌンおばさんが元気な内はよいが、十年後、スリィが成人した後の墓地の管理は果たしてどうなるのだろうか。

ミナハサ観光案内　うちあけ話

川井　友雄二

私が当地マナドに赴任して来たのは、１９９７年４月でした。
今でこそエラそうなことを言っていますが、当時はマナドに関する予備知識はゼロに等しく、《３Ｂ》なる言葉すら知りませんでした。
知っていたことは『スンダと並ぶ美人の産地』『世界的に有名なダイビング・スポット』という事だけでした。マナドに来る前は、クタのような海岸を勝手に想像しており、ダイビングにしてもビーチから直接エントリーできるものだと思っていました。
無知とは本当に恐ろしいものです。
赴任した最初の月こそブナケン島やトンダノ湖に行く機会があったものの、それ以降は約１年間どこにも行きませんでした。業務が多忙だったことも大きな理由ですが、ミナハサには見るものがないものと勝手に思い込んでいたからです。

翌９８年３月、インドネシアの情勢悪化に際して在ウジュン・パンダン日本総領事館の仲介により北スラウェシ在留邦人が集まり、安全連絡協議会設立準備委員会が設けられたのはご周知の通りです。
北スラウェシにこんなに多くの日本人がいたのかと参加者全員同じような思いであったことでしょう。この会合は情報交換という意味で非常に有意義なものでした。
ビトゥンに小動物園がある事、タンココ森林公園への行き方、慰霊碑の話など、この時いろいろな情報を得ることができました。

同年５月末、一連の暴動事件及びスハルト政権崩壊の余震もさめない中、私の長年の友人の新聞記者のＯ氏がジャカルタ取材後マナドに遊びに来ました。その時、泥縄式で観光地図に載っている名所をあちこち捜し廻ったのです。
これが、ミナハサ観光案内を執筆するようになったそもそものきっかけです。
その時の体験やその後調査したことなどをまとめた観光ガイドの小冊子を個人的に作成し、本社やジャカルタからの来訪客に配っていました。
日本人会会報に掲載した記事はこの小冊子を基に、全体的に加筆したものです。
以下、各項目毎に会報に書かなかった、執筆の裏話などを述べたいと思います。

(1)　タルシウス

第３号で掲載した内容は、主にインドネシア語の文献を参考にしたものです。
日本語の文献ではタルシウスのことがどう記されているのか非常に気になり、ジャカルタのジャパン・クラブの図書館に行きました。しかし、種類毎５０冊程に分かれているアサヒグラフの動物百科の中、何故か猿類の分だけ欠冊となっているのです。他の書籍では猿類の一般的なことしか書かれていません。
昨９８年の一時帰国の折に調査しようと思いましたが、あいにく近くの新宿図書館が改装のため３日間休館となっており、残念ながら目的を達することができませんでした。
今回の一時帰国において、ようやく図書館でタルシウスの文献を手にすることができ、２年越しの気がかりがようやく解消されました。

(2)　ワルガ

関係資料がほとんどないので困りました。
第３号で掲載した内容は、オルチェおばさんと州立博物館のスタッフから聞いた話を纏めたものです。何人かの会社のスタッフ（ミナハサ人）にもワルガの事を聞いたのですがいずれも詳しいことは判らないようです。サワガンの遺跡公園へ行ったこともない者も半数近くおり、中にはワルガとは何かも知らない者さえおりました。
その後、州立博物館付属図書館で、教育文化省北スラウェシ地方局発行の『 Taman Purbakala Waruga Sawangan 』という小冊子を入手することができ、これを基に今回の改訂版を作成しました。

㉓ 北スラウェシ州立博物館

この博物館は、マナド市内にありながら滅多に行くことができません。何故ならば、開館時間が限られており、日曜祭日は休館だからです。ジャカルタの博物館は全て月曜が休館日なのに、この北スラウェシ州立博物館は全く『お役所』と同じです。

最近、数日前に依頼すれば特別に日曜日も入館できることを知り、何度か通いました。そして親しくなった館員が、「もう絶版になっており、これは私個人のものだけど... 」と言いながら机の引き出しの奥から出してきたのが１９８９年発行の北スラウェシ州立博物館ガイド・ブック『Buku Petunjuk Museum Negeri Sulawesi Utara』です。これにより博物館設立の由来や、建物の見取図などを知ることができました。

同博物館には視聴覚ホールがあるのですが、一体いつ何に使用するのでしょうか。

㉔ 日本軍政期

インドネシアに興味を持ち始めた２０年前から戦前戦後のインドネシアに関する書籍を収集しています。昨９８年の一時帰国の折、実家に保管してある朝日新聞の昭和１７年から１８年までの分でマナド／ミナハサに関するものをピックアップしました。

２年分といっても戦時下の折であり、朝刊夕刊合わせても１０枚前後なので検索自体はさほど難しくなかったのですが、縮小版であるため判読困難な文字も多く、解読の方に時間がかかりました。

書物が破損するため、原則としてコピーはとらない方針をとっているのですが、この会報に掲載するため、やむを得ずコピーをとることにしました。掟破りの報いとして、赤錆びた金具が折れ、装丁がバラバラとなってしまうなど大被害を被りました。

今年の一時帰国にも数冊戦前の本を仕入れることができたので今回紹介しました。

余談ですが、私は小学生の頃から神保町や早稲田の古書店巡りを趣味としていますが、毎年帰国する度に街の様子が変わっていくのをとても寂しく感じます。
インターネットの普及や『ＢＯＯＫ　ＯＦＦ』の躍進などによって今後ますます古書業は追い詰められていくことでしょうが、神保町の古書店街と『いもや』の天丼はいつまでも変わらずにいてもらいたいものです。

㉕ ゴロンタロ

ゴロンタロには以前から興味を持っていました。
マヤ・エクスプレス旅行社のフォニー嬢が同地出身でいろいろ情報を貰ったり、彼女の家で《ミル・シラム》をごちそうになったりしました。しかし如何せんゴロンタロへの道は余りにも遠すぎます。なかなか行く機会がありませんでした。

実際にゴロンタロに行ったのは１９９９年４月１７日～１８日の２日間だけです。朝４時にマナドを出発。途中で道を間違え、いつのまにか南の裏道を走っていました。ゴロンタロには午後２時着。予め予定していた《巨人の足跡》《オタナハ要塞》《ナニ・ワルタボネ記念公園》などを駆け足で廻りました。

ナニ・ワルタボネに関しては『Pesona Nyiur Melambai Sebelum Refleksi』とマナド・ポストの記事を主に参考文献としました。オタナハ要塞に関しては、現地にある案内書を基にしました。

何年間も同地に駐在されている方々をさしおいて、わずか２日間しか滞在していない者がゴロンタロ案内を書くなど誠に厚かましい話ですが、これを叩き台として更に詳しいものができれば幸いです。

《Masjid Baiturrahim》の修復工事が完了したこともあり、帰任前に是非もう一度、ゴロンタロの街を訪れてみたいと思います。

㉖ 北スラウェシ出身有名人列伝

これは、『Biografi, Visi & Pandangan Hidup Orang-orang Sulawesi Utara 』という本を入手したことがきっかけです。マンギンダアン州知事を始めとする、１３２人の北スラウェシ出身の著名人の紹介文が載っています。

政治家、学者、軍人が中心で、芸能人は一人もいないので、リディヤ・カンドウの項は女性週刊誌の記事などを基に執筆しました。

私の会社にフェミィ・カンドウという社員がおり赴任当初その名を聞いて、ミナハサに来たのだという思いがしたことを覚えています。

リディヤ・カンドウ以外にも歌手、パンチェ/ Pance F. Pondaag（マリアン・ベリーナ の持歌を始め多数作詞作曲もしている）や女優シンティア・マラミス/ Cynthia Maramis など北スラウェシ出身の芸能人は他にもたくさんいるのですが、前6号で『インガ・インガおばさん』を掲載したところ結構知らない方が多かったのでリディヤ・カンドウのみにとどめました。

⑦ 今後の掲載予定

資料は集めているものの、時間的に余裕がなく未だ手をつけていないものもいくつかあります。今回はその概略だけをご紹介したいと思います。

①トアール＝ルミントゥット伝説

ルミントゥットは一隻の小舟に乗って大海の中を漂っていた。小舟が珊瑚礁に座礁すると、彼女は片手に握っていた土を神に祈りながら海に投げ込んだ。
するとたちまち土が盛り上がり、島となり、ミナハサの土地となった。
島の中央にあった石は大爆発を起こし、中から１人の老女が出現した。これが女性のワリアン（宗教指導者）のカレマである。ルミントゥットはカレマに出会い、２人は一緒に住むようになった。
ある日、カレマはルミントゥットを南に向かわせ、祈った。しかし何の変化も起こらなかった。同じように東に向かわせ、祈った。やはり何の変化もなかった。次に北に向かわせ、祈ったが同じだった。最後に西に向かわせ、祈ったところ、ルミントゥットは妊娠の兆候を示した。そして彼女は一人の男児を産んだ。この男児はトアールと名づけられた。
トアールが成人すると、カレマは長さが同じ杖を２本用意し、ルミントゥットとトアールに１本ずつ渡し、二人に旅をするよう命じた。もし途中で誰かに出会ったら杖の長さを比べ、長さが同じだったらそのまま旅を続けるように。もし長さが違うようであれば二人でここに戻って来るように命じた。
そしてルミントゥットを右方に行かせ、トアールを左方に行かせた。
二人は山の中を彷徨していたが、やがて再会した。二人は黙って杖の長さを比べるとルミントゥットの杖の方が長かった。そして二人はカレマのもとに戻った。カレマは喜び、二人を夫婦にする儀式を行なった。
トアールとルミントゥットの子孫はその後ミナハサの各地に分かれた。

これが、『トアール＝ルミントゥット伝説』の大筋です。この他にもいろいろなバリエーションがあり、地方によって少しずつ内容が異なります。
この伝説を題材にした、韻を踏んだ詩もあり、古くから詠い続けられています。

②2月１４日事件 (Peristiwa Merah Putih 14 Februari 1946 di Manado)
１９４６年2月１４日。B. W. ラピアンとCH.CH.タウル。

③トンダノ戦争 (1807-1809)
オランダに抗戦したサラプンとコレンケン。

④プブール・マナドの作り方

⑤マナドの七不思議
§異常に長いサム・ラトゥランギ通り。その終点は何処か。
§北スラウェシ出身の国家英雄の中、A. F. ラスットだけ市内に銅像がないのは何故か。（モンギンシディは市内に３つの銅像がある）
§トタン屋根の家が多いのは何故か。 §その他

⑥初歩のマナド語 （マナド語⇨インドネシア語）

Kita ⇨Saya	Ngana ⇨Kamu	Torang⇨Kita	Dorang⇨Mereka
Nyanda⇨Tidak	Iyo ⇨Ya	So ⇨Sudah	Klar ⇨Selesai
De Pe ⇨Punya	Oto ⇨Mobil	Kukis ⇨Kue	Maitua⇨Isteri

(No / Ne/ Jo) ⇨ Dong / Nih / Sih / Saja などに相当。（翻訳困難）
例： Iyo No ! / Biar Jo ! / Boleh Ne ?

マナドに赴任して　－　ふたつの「インドネシア係数」

鹿島　マナド空港拡張工事事務所
玉置忠嗣

1999年12月7日からマナド空港の工事に従事しています。早速，北スラウェシ日本人会に入会させていただきましたので，どうぞよろしくお願い致します。とても精力的な寄稿文が並ぶ本会報に，僭越ながら今回，日本人会の方々へのご挨拶・自己紹介を兼ねて寄稿させていただきました。

このマナド赴任は言渡されてから１週間後に現地入りという唐突なもので，来てからの１，２週間はほとんど仕事一色でした。仕事での海外は初めてで不慣れな面もありましたが，すぐ身につけた仕事上の習慣があります。「インドネシア係数」というものです。

我々の仕事（＝建設工事のマネジメント）は「段取八分（準備作業で仕事の80%が決る）」と俗にいわれるように，工事の先を予測して材料・機械・作業員などの計画及び手配，関係者（空港管理者など）との連絡調整をするのが中心になります。材料の品質・納期，機械の能力，作業員の効率，天候の確率などを掛け合せれば概ね工事の予測が可能です。例えば，「滑走路工事は，１時間何トンのアスファルトが生産可能であるので，１日当り作業時間が何時間だから今月はこれこれまで工事が進む」というようなことをいろいろと計画して仕事をしているわけです。しかしながら，メガワティさんが来るとか，故障軍用機が駐機するとかで工事が止められることもあるので，すべて計算通りにはうまくいかないのは当然です。そこで，経験から余裕代とかあそびを計画に持たせておくのが常で，場合にもよりますが日本の感覚で８割から９割の数字を係数あるいは安全率として考えておくと現実的な計画になるというのはなんとなく理解していただけるかと思います。

まあ，ここは日本ではないのでこれまでの感覚より以上に「余裕」を考えて，仕事に臨んだわけですが，どうやってもうまく計画が立ちません。あれこれ原因を挙げればきりがなくグチになってしまうので詳しく述べませんが，上述した工学的な考えが全く通用しないほど予測不可能なことがよくもまあ次から次へと起ります。それでも，計画や目標もなく行き当りばったりでマネジメントができるはずもなく，「インドネシア係

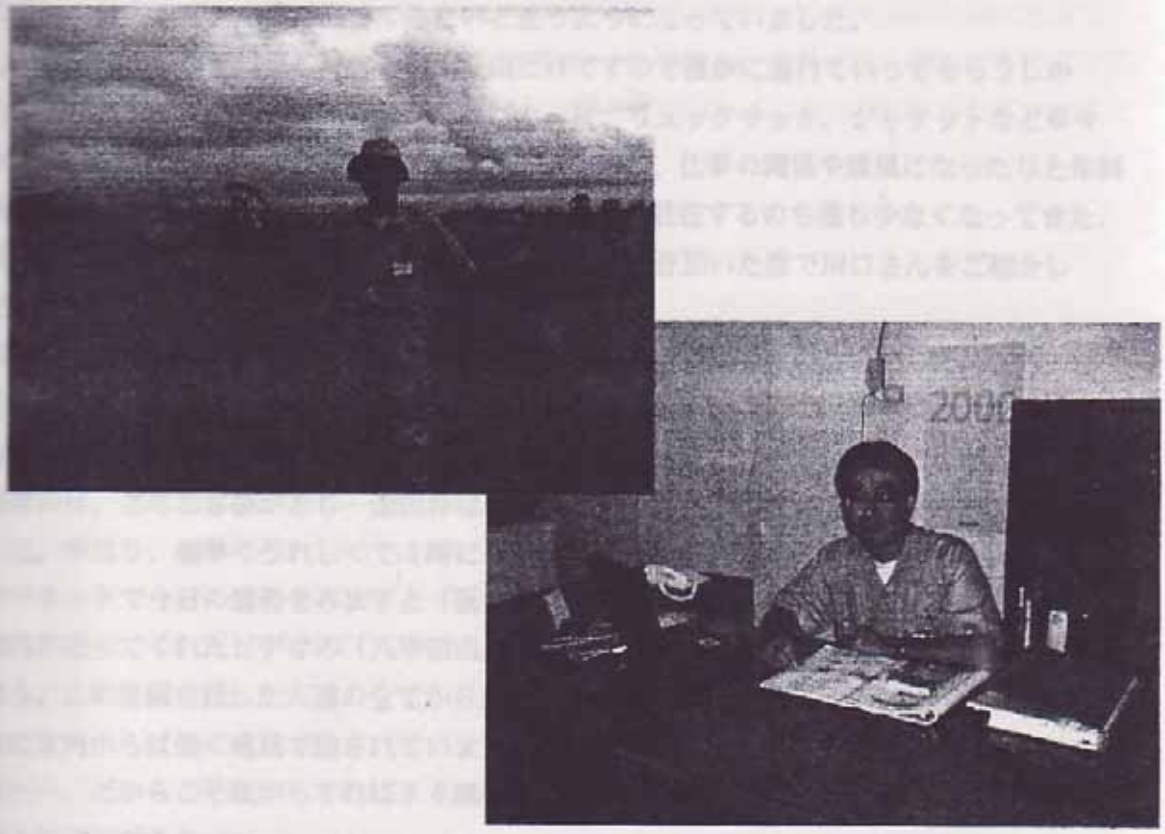
数になるものを編み出すにいたりました。その実態は通常の感覚から「インドネシア的な要素（みなさんのご想像におまかせします）」による不確実性を１つの係数として抽出し，工学的（あるいは日本的）計画数量の上にさらに掛け合せるというものです。理屈っぽく述べましたが，要は通常の感覚からさらに５割とか６割引きした数字を頭に置いて仕事を進めているということで，この５割などの値を勝手に「インドネシア係数」と呼んでいるだけのことです。ある意味では，みなさんが感覚的に日常経験で身につけられている「インドネシア時間」や「インドネシア品質」などと似た類のものかも知れません。この単純な係数の発明の意義は，大学でせっかく習った通常の工学的な考えを捨てながら，「インドネシア的要素」の影響の大小に応じて係数を変化させ，最終的には「インドネシアだから」ということで割切ることが可能なことです。そして，その効用は驚かない（それでも日々驚かせてもらってますが）・怒らない（限度はありますが）・お手上げにならない（結局はお手上げにはなるのですが）ことで，精神健康上有益であることでしょうか。こうした割切り方は，特に来て日の浅いインドネシア・ビギナーの私などには特に効果的なのではと考えています。

ここまで読まれて，多分にインドネシア・フリークである会員の方々は少々不快に思われるかもしれませんが，これとは違ったもうひとつの「インドネシア係数」があることにも最近気がつき出しています。先ほどの係数が仕事に関するものであるとすれば，それとは別に「インドネシア係数生活編」というものがあるように思えてきました。そして，それは割引きの係数ではなく，確実に割増しの係数であるようです。

日本と比較したアジアの生活の「豊かさ」というのは良く言われることですが，ここマナドには特に当てはまる感があります。まだまだ来たばかりでマナド及びその周辺を十分知り尽くしているわけではないのですが，日々の生活から，また休日を積極的に利用して体験したマナド生活から快適さや豊かさといったものを感じ始めています。贅沢なものがあまりあるところではありませんが，必要なものはほぼ何でも揃い生活に不便間はありません。また，気候は海洋性のため緯度の割には過しやすい気がしますし，トモホンやトンダノなどの高原地域はむしろ快適な環境のようです。美しい街並も手伝って，トモホンなどは仕事があれば居を構えて見たくなる町のひとつに思えました。食事に関しても，あの値段でいろいろなものを食することができ，新しいメニューにチャレンジするのが毎回楽しみに感じています。さらに，宗教についてもその生活規範として重要な役割を果している意味において，どちらかというと宗教感の希薄な日本人（あくまで私見）から見るとむしろ充足した生活を送っているような気がします。また，何といっても人々が人懐っこく，気さくであることが積極的な交流を促していると思います。こうした点を総合的に考えると，日本での生活に比べての「豊かさ」や「充足感」は１を上回っているような気がしています。

以上の考えは，長年住んでいる方はもう当り前の感覚であり，エンジニア特有の屁理屈のように思われるかもしれません。ただ，慣れない地での仕事の中で心と身体のバランスを保つのに役立つひとつの雑感として紹介させていただきました。マナドに来てから3週間の慌しい日々が経ちましたが，仕事のインドネシア係数も自分が馴れるにしたがって当初の値よりも改善されてきたようなきがします。また，もう一方のインドネシア係数も長く滞在すればするほど増していくのは確実であり，現地の方々に敬意を払いながらマナド生活を満喫して行きたいと考えています。

（1999年12月28日）



自己紹介：

1965年千葉県旭市生まれ。1991年鹿島建設入社。東京，広島，バンコク（タイ），ボストン（アメリカ）などに在住経験あり。専門は土木工学で，ダム工事やコンクリートの研究などがこれまでの主な職歴。妻1人子1.5人（妊娠中）で単身赴任。深酒以外の趣味は特になし。マナドでは旅行・テニス・ダイビング（ライセンス取得済）を積極的にしていきたい。

クラパット山ー登頂始末記

1999／10／13

川口 博康

今私はトモホンの家で１０ｃｍの段差を降りるにも悲鳴を上げる状態です。
足は勿論体中が痛んでいます。この痛みが消えないうちにこの顛末を残しておかなければと思いパソコンに向かう決心をしました。

北スラウエシ州ーミナハサ地方随一の名山にクラパット山があります。
別名「メナード富士」。私は静岡県出身ですので毎日、富士山を見て暮らしていたものですからその姿ーかたちは勿論のこと、異国にあって故郷を思う気持ちをこのメナード富士に托し、時々胸に熱いものを感じる日々がありました。
この地に駐在以来、一度は登ってみたいと思うようになっていました。
しかし私は山の経験は高校時代の富士登山だけですので誰かに連れていってもらうしか方法はありません。いつでも機会があればと、靴、リュックサック、ジャケットなど早々と買い込み、気持だけはうわずっていました。しかし、仕事の関係や痛風になったりと体調もすっきりしなくてその機会も無く、いよいよここに駐在するのも残り少なくなってきた、九月プリマカシンドの内田所長にバーベキューにお招き頂いた席で川口さんをご紹介してもらいました。
川口さんは山のベテランと言う事で既にヒマラヤにも登頂済みとのことでした。
私の夢を話したところ、「一緒に行きましょう」と思わぬ快諾のご返事を頂き、うれしくなってしまい、ついその日は遠慮もなく飲みすぎてご機嫌になってしまいました。
約束の日、急なお客様があり一週間伸ばして頂き、いよいよ１０月９日の決行となりました。やはり、朝早くうれしくて４時に目が覚めてしまいました。何時ものようにインターネットで今日の運勢をみますと「新しい事は中止すべし」とのご神託。同時に数日前、家内が送ってくれたビデオの「八甲田山」のシーンがダブり、完全に出鼻をくじかれてしまう。この計画を話した人達の全てから止めた方が良いとのアドバイスを頂いていました。特に家内からは強く電話で諭されていました。年だから、体力が無くなっているのですからーー。だからこそ私からすれば６０歳ー定年記念に挑戦したいのです。
何とかなるだろうーー。
この身の程知らずの甘さが後から事故一歩手前の苦痛を味あうことになってしまいました。

１０月９日、早朝の予定時間丁度６時に川口さん、内田さんが迎えに来てくれ荷物の点検。
着替え ―― ６枚　飲料水６００ｍｌ×４　ビスケット チョコレート ハチミツ 飴玉
虫除け　カメラ 携帯電話　メモ　持病の薬 正露丸 ちり紙
他にテント カッパ 食料などは川口さんと内田さんにお願いする。

何も知らない私は半ズボンにポロシャツ。すぐに「ゴルフにでも行くの」とやられてしまいました。
西村さんとの集合場所であるアイルマデデの登山道入り口に7時到着、すでに西村さんいつものすがすがしいお顔で待っていてくれていました。
入り口の警察に登山の記帳をすませ、いよいよ 07：30スタート
メンバーはリーダーの川口さん（34），コーデネイターの内田さん（35），西村さん（51），私（59）の4名　予定していた荷物運びの人夫は止めたと。
その分川口さんと内田さんの荷物が多くなっていました。

昨夜の大雨のせいか清々しい朝、すそ野に広がる椰子のプランテーションのなかの小道を一時間ほど歩き、一服。途中川口さんから登山の常識の初歩を教えて頂く。
「道が分からなくなったら上に登りなさい」と、自分一人になった時は実行できそうも無い。
普通の椰子からサゴ椰子に変わった所にこの地方独特の地酒ーヤシ酒の密造小屋に出会う。
名前はチャプテックスーサゴ椰子からでる樹液ーサグエルーをまったく原始的な方法で蒸留したお酒。私は洋酒や日本酒がこの国では結構なお値段とこの田舎では入手しにくいことからこれで我慢して飲む事が多い。

徐々に道は険しくなり、周りの風景も変わってくるのが分かる。
30分に一度の休憩を取りながら進む。途中尾根に出て左側の谷を覗いたらぞっとした。
この深さ、もし足でも踏み外したら一巻の終わり、緊張した一瞬でした。
汗は異常に噴き出てくる。しかしまだ皆さんの冗談の話にも入る事ができる状態でした。
「マッサージのおねえさん達を呼んでみましょうか」半ばそれを信じながら、そんな事できれば天国だろうなと本気で期待したり。所々で大木が道を遮っている。
先程まで数匹の猿が頭上の木々を喧しくサル語で連絡を取り合っていたのがうるさく感じられていたのですが、いつのまにか居なくなっていました。
いよいよ気の根っこにつかまりながらの前進ーよじ登りです。やはり相当疲れてきました。
何か気のせいか頂上が見えたような気がしたものですから、ついうっかりと頂上です。と叫んでしまい、皆さんに笑われてしまいました。私の予定の行動ではもうとっくに頂上に到達して良いはずなのですが。こんなはずではない。キャディは二時間で登ると工場長は5－6時間と。もう冗談なんて言っていられない。先の人に着いていくのがやっと。

とてもカメラを取り出し写す元気は無い。
蚊も少なくなってきた。枯れ葉か何かゴミが腕についているとばかりに思っていたら内田さんがそれはヒル（百取り虫）です。と言う。山にはどこにもいるとのこと。
しかし、周りの樹海の風景は一変してしまっている。真っ直ぐに伸びた熱帯ジャングルの何十メートルの巨木から長さ10－20メートルの幹や枝がくねくねと曲がりそこには

苔や蘚の一種だろうかびっしりと付着している樹海にかわってきている。異様な雰囲気を作り上げている。私は今まで見た事も無い森の世界である。御伽噺の国に迷い込んだかと一瞬妙な気分になる。
これだけの苔を育んでいるということは年中湿度が高いということでしょう。赤道直下でこんな光景に出くわすとは。十分に水分を含んだ苔のなかで水滴が光ったのが印象的であった。また、苔の中から見えた真っ赤な３mm位のきのこ？は何だったでしょうか。
このすそ野に生活している我々はこの山からの水によって計り知れない恩恵を受けています。地下７０Mからは無菌状態の水が得られる。我々の関係している水産の工場もこの水があればこそである。
ここは水に関した自慢が多い。コカコーラやアクアの工場。イカンマスはどこよりも美味い。

私が勝手に思い込んでいた予定の時間を遥かに超えてしまってもまだ頂上は見えない。
水は既に二本半飲んでしまっている。あのリポビタンの広告の場面「ファイト一発」と同じような場面に何回挑戦したことか。
そろそろ声も出なくなってしまった頃、先頭の川口さんから「もうすぐ頂上ですよ」の声。
前方が木が切れて明るくなっている。ものすごく蒼い空が見えた。一面、すすきに変わり、スロープもなだらかになり、いよいよ頂上に到着。
私はリュックを投げ出し、しばらく横になる。正直言って周りなど見回す元気はありませんでした。
うれしさより何とかやっとたどり着いたといった安堵感。３０分位休みました。
しばらくすると、頂上はもっと先だと川口さんが言い出す。
なるほど、よく見ると２００メートル先のほうが少しばかりの木で覆われていて少し高い。
横になったお陰で元気が出る。改めて頂上めざして立ち上がる。

１６：００　クラパット山ー（メナード富士）ー１９９５m 山頂に立つ。
ここで記念撮影。やっと笑顔がでる。日本の国旗でも持ってガッツポーズでもしたい心境。
「そこに山があるから」私もこの言葉のおすそ分けを頂きました。

改めて下界を見渡す。
レンペ島からケマーアイルマデデーメナードーリクパンープナケンとすばらしい。
ロコン山が遥か下に小さくみえる。トンダノ湖も意外に小さい。改めてここが如何に高いか。地元の人たちの言い伝えに、ここに登って見える所は行った事と同じことになると言っていた事を思い出す。お陰で天気に恵まれその夜景をも堪能することができました。

「タルシウス」にも幾度か寄稿して頂いている庵原氏はメナードを「箱庭」のようだと形容されていました。川勝氏はその著書「文明の海洋史観」のなかで地球を「小さな美しい

水の惑星」と言い日本をそこに浮かぶ「庭園の島」と形容しています。
富士の「富」とは、物の豊かさを「士」は心の豊かさを表していると言う。
我が故郷の富士のいわれも、ここメナード富士もどちらも何となく共通点があるようでいっそう身近さを感じます。
ダーウィンはその弱肉強食の世界観の中で「世界は万物の生存闘争の場であり、強者が弱者を駆逐し収奪して支配を広げる」と言っているのに対して京大の今西教授は「自然とはそのような生存闘争の場ではない」と異議をとなえている。

川勝氏は「自然から「棲分け」の摂理を学びこの小さい美しい地球において人間同士そして人間と自然とが平和共存しうる世界を目指さねばならない。また
グローバル化とはすべての人間と自然が一つの強いシステムの支配のもとにおかれる事ではない。それでは近代世界システムの延長線上に過ぎない。自然とは本来多様なものの共生である」といっている。
この山頂にあって、美しい下界をながめていた時、その言葉が一瞬脳裏をかすめる。
川勝先生の「文明の海洋史観」はこちらにきて最も感動して読んだ本だ。近代の世界のシステムが如何にして誕生し、今このシステムが行きずまってしまっている現実、これからどうすればよいか。アジア人として自信が沸いてくる歴史の解釈である。同時に未来に夢を託したくなるような筋書きであった。
インドネシアのパンチャシラにある「多様性の中の統一」も改めて新しく響く。
素晴らしい思想ではないだろうか。
今この国も欧米が主張する近代世界システムの餌食になろうとしている。
この国で起きた昨年から今年にかけての出来事、今も国連の平和維持軍が介入しているしかし、山頂から見るこのミナハサは信じがたいくらい平和であることを実感する。
ミナハサはまさに日本と同じく庭園の島にぴったりではないか。
いつまでもこの平和が続いてほしい。

テントを設営し終わり、下界のそれぞれの町の明かりを確認しながら、内田さんが大切に担いできたウイスキーをあける。兎も角、無事登頂成功を祝って乾杯。
登って良かった。生きていて良かったと思う。ウイスキーをこんな雰囲気のなかで飲むのも何年ぶりか。何か忘れてしまっていたものを思い出したような一杯であった。

テントの中では色々な話に花が咲いた。
西村さんの土木工事、特にトンネルについてのお話は面白かった。
川口さんの素晴らしい生き方にバンザイと拍手を送りたい。
自分のしたいこと一登山一を達成させるために仕事をする。その目的のために仕事も変える。
良いですね。　ここにこそ本当の自分の人生が作れると思う。

人生にはこういう出会いがあるから楽しい。

身に纏えるもの全てを付けて横になる。疲れと先程のウイスキーで直ぐに寝入る。
２－３時ころ、雨の音と寒さで目が覚めてしまう。皆さんも同じ、又、話を始める。
この頃から下から登ってきた人たちの声がにぎやかくなる。ここの人たちは夕方出発の朝方到着のスケジュールらしい。殆どが学生と同年輩の若者、年配者は見当たらない。
若い女性もいる。中にはゴムぞうりや裸足で平気な顔をしている。夜間行動は危険ではないのか。何と言っても若さでカバーしてしまうんだろうと思う。うらやましく思う。

０５：３０ 山頂からの日の出を見る事が出来た。レンベ島からゆっくり立ち昇ってくる太陽は美しく眩しい。反対のメナード湾にはクラパット山の影がくっきりと映っている。
下界の山々や町が朝日を浴びてゆっくり目覚めていくのがわかる。これは山頂に登った者しか見る事が出来ない「小さな美しい水の惑星」の「庭園の島」で毎日繰り返されている光景なのだ。バンザイを叫んでしまう。

朝食は内田さんが作って持ってきてくれたおむすびと暖かいお湯、うめぼしの入った奴は特に美味かった。

０７：００下山開始
数歩踏み出したとたんに足が「がくがく」してよろけてしまう。何か調子がおかしい。
膝小僧が笑ってしまい踏ん張りがきかない。どうしてしまったのだろう。
川口さんは筋肉が退化してしまったからだと言う。えらいことになってしまった。
一番しんがりを必死でついていくも、ずんずん遅れてしまう。
下山は楽勝とばかりたかをくくっていたのですが、予想外のハプニング（私にとっては考えても見なかった事）についに半分くらい下山したところで川口さんの言葉に甘えリュックを持ってもらう。情けない。飲み水も心配だ。後少しとなる。
川口さんはあれだけの荷物をしょってひょいひょいといった感じで降りていく。
下山は上りの１／５位と言っていた。いくら遅くても１１時には到着と思っていました。

途中、川口さんが小さな木の実を採ってくれたがとても味わうような余裕はない。
ある種の木や蔦などの切り口からでる水も飲めると言う。川口さんが試している。
私が必要以上に水を飲んでしまうので最悪の場合を想定しての行動であったと思う。

「まだ顔色がいいから大丈夫です。」「遅くてもいいですから元気だけは落とさないように」などと励まされ、杖にすがり、時には後ろ向きに這いずり、また落差の大きいところは滑り落ちるように転げ落ちてともかく一メートルでも先に進まなければとの思いだけで必死で

した。皆さんが「下山したら生ビールを飲みに行こう、又マッサージに行こう」と声を掛けてくれるのですが、とても受け応えできる気力はありませんでした。
一服のときもすぐに眠気におそわれ、もうどうでもいいな、ここで止めても良いじゃないかとの誘いとの戦いでした。
まさかとは思いながらも何処かに馬か牛が居ないか探したり全く情けない格好です。

先発の川口さんが「椰子がある」と知らせてくれました。嬉しかったですね。
既に自分の水は飲み干してしまい他の人の分まで頂いていました。
木陰に倒れていましたら皆さんが椰子を採ってきてくれ３個も飲み干しました。
生き返った思いでした。ゆっくり休ませてもらい最後の道程にびっこを引きながら出発、
杖にすがり川口さんが一緒に見守ってついてきてもらううなか、やっとのことで１４：００ふもとにたどり着きました。ほんとうに情けない姿でした。映画でみた戦場で敗残兵が杖がわりに鉄砲にすがって落ちていく姿と何も変わっていませんでした。

警察で無事帰還の記帳を済ませ家路に就いたわけです。途中、皆さんのご厚意でサグエルを飲み、喉を潤おわせました。この時、ほんとうに無事に着いたんだなと実感しました。

家に入り靴を脱ぎ靴下をとったところ、両方の親指の爪が赤く一紫色に変わっており少しさわっただけで痛み、改めて下山の凄さを知らされました。

確かに「そこに山があるから」上りたくなったのですが、皆さんのご忠告を無視した天罰はてき面でした。おそらく川口さんという立派なリーダーと内田さん、西村さんの暖かい心が無かったら今ごろ、あのアイルマデデの警察の手にかかり牛かなんかで担ぎ降ろされていた事でしょう。気力一精神力がどこまで通用しますか。今回は体力の退化をまざまざと見せ付けられやっとのことでたどり着いたというのが事実です。
正直恐かったですね。もう少し何かあったら自力での下山は出来なかったと思います。
山に見合った体力測定なんかのソフトを誰か開発してもらえないでしょうか。
これで私もあまり大きい事は言えなくなってしまいました。

しかし、こうして無事に到着し生きているのですから一緒にパートナーを組んでいただいた、川口さん、内田さん、西村さんに心から感謝いたします。
ほんとうにお世話になりました。ありがとうございました。

下山三日目になってもまだ体中が痛んでいます。
川口さんによれば「登山はその昔、貴族が始めたスポーツ」とのこと。当時の貴族が何を考えて山を登ったかは知りませんが私の場合、この二日間で山から色々な事教えてもらい

また。
最近では中高年の登山の事故が多いとニュースで言っている。私の今回の無謀ともいえる
登山で思い知らされた事は自分の体力が今どの辺にあるか分からなかった事です。
自分の体力に見合った山を選ぶのが最善と思いますがどうしてこれが分かるのか。
自分の体力がどこにあるかを見極めるのはなかなか難しい。気持ちと体力は一致しない。
安全な登山については沢山の方によって言われていると思います。私の年一体力では、
山にあなどれないなと言うのが実感です。
還暦記念の登山は私に教訓を残してくれました。「身のほど知らず」ということと
「周りの人の意見を聞きなさい」それと体力は気力以上に劣化しているということです。
これから年をとっていく私には何故かびったしの「天の声」のようです。

今度も改めて感じた事なんですが、「視点を変えてみるということは必ず新しい何かを発見
できる」ということです。今回もいつも下からのみ眺めていたクラバット山ー同じ目線でー
山の頂上から見下ろした事により新しい感動がありました。
時々海から陸を見ると同じようにーーー。

何時かこの痛みも癒え、もう一度この山になんてことは有り得ないでしょうが感動の無い
人生なんてつまらないでしょうから何かに挑戦するしかないと考えています。
しかし、口ではいくら大きな事を言っても体力はそれについていけない事、大きな教訓を
もらいました。これを忘れないようにしようと思う。
私の次のターゲットはヨットですね。いつの日にかと夢見ながら０からのスタートです。
川口さんの次のターゲットは マッキンレーとのことでした。
ご成功をお祈り致します。ありがとうございました。

１９９９／１０／１３

トモホンにて

マネボネンボにある日本軍関係のモニュメントについて

川口　博康

こちらに駐在中、上記のモニュメントの建立の経緯を調べておりましたところ大之木様のお名前を知る事ができ連絡を取ったところ快く当時の資料を送ってもらいました。その資料の中から特にここに関係の深いものを抜粋し本号に掲載させて頂きました。紙面の都合で全部掲載できないのは残念ですが何時の日かお願いしたいと思います。

長崎さんが７号に寄稿してくれたなかの海軍体操のことも載っていました。

歴史が繋がっていく事はおもしろいですね。

当時の関係者は毎年４月に慰霊に見えられているそうです。

これも何かの縁ですので私たちのクラブも交流されては如何かと思います。

（１５／ＤＥＣ．９９）

平成１１年１１月２６日

川　口　博　康　　様

マネンボネンボ慰霊碑責任者

第１４期海軍予備学生

元山戦闘機隊　当直　大之木 英雄

拝啓　年末も近づいて参りましたが、ご清祥の趣、お慶び申し上げます。

このたびは御手紙嬉しく拝見しました。御手紙によれば、BITUNG にも北スラウエシ州日本人会が結成された由、誠に心強いニュースです。

同慰霊碑は１９８７年１０月１５日建立を致しました。毎年４月の下旬、現地で慰霊祭を執行して居ります。同碑は当時のインドネシア国軍司令官ムルダニ大将、並びに北スラウエシ州知事の承認の下に建立したものです。

建立の経過、慰霊対象等については同封で資料をお送り致します。今後貴日本人会にはいろいろお世話になると存じますが、何分宜敷お願い申し上げます。

尚、来年は４月に御地へ参る筈ですが、沖縄の慰霊祭が４月になりましたので、場合によれば御地訪問は１０月になるかもしれません。

近い内お目にかかれることをたのしみにして居ります。

敬具

慰霊の言葉

一九九八年四月二十二日

当直将校として慰霊の言葉を申し述べます。当慰霊碑は過ぐる大東亜戦争に於て、昭和十七年(一九四二年)一月十一日、当地カカス高原、カラウイラン飛行場に落下傘降下せし、横須賀鎮守府第一特別陸戦隊、堀内部隊、同日このマネンボネンボのすぐ南ケマの地に敵前上陸せし佐世保鎮守府第二特別陸戦隊、又、ミナハサ一帯に展開せし陸軍第百八飛行場大隊陸軍第三七五独立歩兵大隊の戦死者――――並びに無実であるにも不拘、一言の辯明もせず、B級戦犯として従容、銃殺刑に服した落下傘部隊長堀内豊秋海軍大佐、及びラバウル、ブィーン、ブーゲンビル、ガダルカナル、その他南太平洋戦域に於て勇奮敢闘、護国の英霊と化した陸海軍将兵を弔はんとして、志を同じくし共に戦った第十四期飛行専修予備学生、元山海軍戦闘機隊の隊員一同の心を集め、一九八七年十月十五日、この地に建立されたものであります。

戦、終わって既に五十有余年、アジア永遠の平和と祖国日本の栄光を願って、南太平洋に散った英霊の偉業は今や茫々たる歴史の彼方に埋没せんとして居りますが、我等生あ

る限り、毎年この地――マルク海を見はるかすマネンボネンボの丘に集り、英霊を安んじ、その雄図を後世に語りつがんとするものであります。以上、以て慰霊の言葉と致します。

尚この機会を借りまして当慰霊碑建立計画以来、深甚なご理解とご支援を賜りました北スラウエシ州州知事、ビトン市サルンダヤン市長、マネンボネンボ村レンコン村長、同じく小学校の先生方及生徒のみなさん、又このすばらしい土地を提供して戴いた地主のカウナンさん、更には当慰霊碑建立のご承認を戴いた元インドネシヤ国軍司令官ムルダニ陸軍大将のご厚志に対し、心よりお礼申し上げるものであります。有難うございました。

インドネシア日記（メナドにて）

落下傘部隊降下五十一周年式典

三宅崎 隆治郎（兵五十期）

同期の堀内豊秋君率いる落下傘部隊がセレベス島（現スラウエシ島）メナドに降下して平成四年一月十一日で満五十年になる。現地育刀者から、一空の神兵一降下が、インドネシア独立の引き金になった事及び降下後短期間ながら、住民を対等に遇し、善政を敷いた事を徳として、式典の共催を申し入れて来た。それに応えて落下傘会、堀内君の教え子の七十八期会、現地に慰霊碑を建てた元山空会、メナドに駐留した陸軍航空隊及び堀内君の遺族等約百二十名が式典に参加。これに私も五十期代表として参加させて貰った。

一月九日十一時成田発。ジャカルタに一泊。翌朝二時半起床。五時空港発。十一時にメナド空港着。テレビ局、新聞社のカメラの放列の中を軍楽隊を先頭にタラップを降りる。

少憩後、バトカーの先導で、バス四台を連ねて、一時間余。東海岸ビートン市郊のマネンボネンボ村の丘の上に建つ慰霊碑前に着く。既に前日メナド入りして、祭壇、花、幟等を整備していた元山空会二十名と現元民三名余が、我々を拍手で迎える。

早速長男一誠君が持参した堀内君の大きな遺影を安置して、碑前に全員整列し、慰霊祭開始。呉水交会会長大之木氏の開式の辞。各代表花輪献呈。全員黙祷。海ゆかば。斉唱。詩吟献詠。来賓献花（郡長、村長）。同期の桜。斉唱。全員の歌声は、南国の紺碧の空にこだまして、感動の涙を誘った。

次に一路西海岸のメナド市に向かい、郊外のテーリン墓地で、簡単な慰霊祭を行う。ここは堀内君がオランダ軍の報復的裁判で、昭和二十三年に四十七歳で刑死後、昭和四十年内地に帰還まで遺骨の眠って居た処である。

終わって、景勝のタシク・リア海岸に新築された立派なメナド・ビーチホテルに入る。夜は、副知事を迎えての盛大な晩餐会。美女達の、白鷺の舞。等観賞しながら、豪華なインドネシア料理に舌鼓を打った。

一月十一日。記念すべき式典の日。バトカーに先導されてホテルを出発。山道を上って、海抜六百米のトンダノ市に入り、当地の英雄サム・ラトランギ将軍の碑に参拝。長野県の諏訪湖に似たトンダノ湖畔を南下して、カカス水上墓地跡に立ち寄り、近くの落下傘降下地のカラビラン飛行場跡に着く。すっかり農地に変わって居たが、その一角の広場に、思いがけず大きな天幕の式典会場が設営され、大勢の村民が待ち受けて居た。楽団も呼んであり、一人づつに軽食も配られた。七十八期富田君、同行の金木氏の読経で、慰霊祭を施行。続いて楽団の演奏で、昔の日本の歌が次々と歌われ、我々も唱和した。

終わって、記念式典の行われるランゴワン町に向かう。町に入ると道の両側は、こんな山奥の町の何処からと驚くほど大勢の人が、我々に手を振って歓迎して呉れる。元司令部のあった郡長のシガラキ邸の百五十米手前で、バスを降り、音楽隊を先頭に街頭行進をする。シガラキ邸でも、立派な飾り付けがしてあり、邸内に大きなパーティ会場が準備され、二頭の子豚の丸焼き等のミナハサ料理が並ぶ。にぎやかな楽器の演奏に合わせて、年寄りの住民たちが、昔覚えた日本の歌を次々と歌うのに驚かされる。

落下傘会阿部会長の感謝の挨拶。続いて遺児の一誠君は、今日の日のために、一年間勉強したインドネシア語で一日イ親善の為、三には遺くとも、心は近くにありたい・・・と挨拶を引用して語りかけた。

堀内君の短期間の徳政が、半世紀を経ても尚現地の人々の心の中に輝いて居るのを目の当たりに見て、大きな感動に打たれた。

又昭和十七年五月から十月まで居たバリ島でも善政を敷いて住民に慕われ、君に協力した民間人の三浦襄氏は、バリの父、と敬われて、デンパサールのバドン墓地にある氏の墓は、今も毎日住民が、清掃し、香華が絶えないのを見て感銘を受けた。

在天の堀内君〃 君の仁徳を改めて褒め讃えると共に、君の愛したインドネシアの人達は、明るく、豊かに暮らして居るから、安心して眠りたまえ。（終）

（メナド慰霊祭関係）

残香の武人朝内幸秋君

寺崎　隆治
（昭三十四）

君は明治三十三年（一九〇〇年）九月二十七日愛媛県新居郡三上村に生まれ、郷里なる三上村立三上尋常小学校を卒業して、県立今治中学校を経て、同校の生活を通じて、同級の生徒を目的とする同志者の結合の中心人物、一面手の早さと、スポーツ、ことに野球に抜群の技倆を発揮した。大正八年八月、天下の難関を突破し、海軍兵学校（第四十期生）（後期兵学校）に入校した同期の秀である。大正十一年六月卒業、直ちに巡洋戦艦、若葉、ベルナップ、河内、摂津、金剛、榛名、ベルナップ、摂津の主要一隻の大砲術を及ぼす実践の心身を修養により健全にしてやりたいと熱心に指導中のところ、たまたま、四月三日、丁度社会の同志者ミーティングの実行されるや、これを見学して心を動かし、右翼的、国粋的、実践的、思想的、ことに国粋的、これを指導した実践主義者の実践者中、最も熱心に教えを乞い、一切捨て去り、教育を受け、国粋実行、実行者の指導者としてリーダーとなる者、そして、この思想の共鳴は実践であるとの信念は、

昭和八年、海軍大学校の大砲術研究生となるや、これを同志者の集合に開放、お互の研究の成果を公開の上、昭和十年、海軍大学校を卒業し、十二年、海軍兵学校教官となるや、十三年、海軍兵学校教官（ドイツ、ベルリン駐在武官、第二次世界大戦前夕、ヒトラーの研究者）の任務、・・・

の無電放送は見事に成功した。陸軍当局はこの作戦に対し、二月十四日、マレー半島西部のタルアン飛行場より、スマトラのパレンバン油田地帯に対する落下傘部隊の作戦を、陸海軍同時に発表したいと提案、海軍当局もこれを了承したのであるが、二月十五日の各新聞は陸軍のパレンバン作戦を大々的に報道し、海軍の作戦は極めて小さく取扱報道、しかもメナド落下傘隊の写真が陸軍の作戦のように掲載されていた。海軍当局は大いに憤慨したが、君は何ら意に介しなかった。

昭和十七年内地帰還後、君は特に天皇陛下に拝謁を仰せ付けられ、その情況を奏上する光栄に感激した。

第三　語学の天才

君は語学の学生時代から英語が得意で、海兵に入るや正規の英語教育を受くるほか休日には、英国オックスフォード大学出身のリー及びランダル教授あるいは外国仕込みの関谷孝一（海兵四十六期関谷英大佐の兄）、三島和介教授の教授を受け、英会話や外国文化を勉強した。

遠洋航海出発前、東京でスペイン語の辞書を求め艦内で勉強し、ブラジルの独立百年祭や、アルゼンチン、ウルグアイ訪問時これを活用、ブラジル軍隊行進曲などはたという責任を自ら進んで負い刑に服したのであるが、後輩育るそのりっぱな態度に感銘し、判決は二回にわたり延期され昭和二十三年九月二十五日従容として散華されたのである。オランダ当局はいたく君の態度に感動し当刑後自国の殉職を立て自国の指揮官に対する礼をもって遺骨を送ったという。なお、君の崇高な態度に井深士井手輝一郎氏の証言によっても明らかである。

君は文学を好み、和歌をよくし、死を前にして遺みきった心境で次のように書き遺している。

自彊の誓りを残し死出の旅
つわものの役目は過ぎなり
（注　白刃は大空に開いた落下傘部隊の意）

月に雲花に風と語り得て
金に秋晴の空を待つのみ

国よりももろき命に惜しからず
やまと男の子の名惜し導し

神前に恥もなし恥もなし
見せる罪もなしと思へば

わが命宇宙の大に投ぶれば
取るに足らぬものとこそ知れ

時なれば何惜しからんわが命
春風に散る山桜花

なお、君の一族は教育者である。君自身をはじめ、長兄、義父福村省三氏（海兵数学教授、夫人の父）、長男一郎君等皆然り、夫人可寿枝は、戦後、君の郷里の小学校教師として四人の子供を立派に育てあげた。

君が妻子に書き遺した訓えは次の通りである。

・父は人に恥ずるようなことは少しもしていない。神さまがよくこれを知っている。

・勉強してりっぱな人間になれ、学費をとれ、依頼心をおこすな、世間の悪風にそまるな、強く正しく生き母に孝行せよ。

・物はすべて売り払って子供の学資とせよ。

第五　殉職

君の戦犯は昭和二十八年四月解除され、その墓（みたま）に昭和三十四年四月六日靖国神社に祀られ護国の神となっている。海兵（針尾）にて僅か四ケ月君から体操の教育を受けた海兵七十八期生が戦後君の郷里の墓を整備された。昭和六十三年九月二十四日（命日の前日）七十八期をはじめ海軍各クラスその他の縁故者が発起人・世話人となり、東京九段下のホテル・グランドパレスにて君を偲ぶ大会を開催、七十八期の作家高橋文雄氏の小説潮内登秋、遺型殉職等が発行されることになったことにまことにうれしい。

なお、君のご遺族（名古屋市在住）は熊本の旧住居をその町に寄贈され、町ではこれを改装して記念館として君の遺品を展示し、その来歴を後世に伝えている。

君の魂よ安らかにお眠り下さい。そして永遠にわが日本をお守り下さい。

第五落下傘部隊長

三田孝記
（連隊副官）

[illegible]

[illegible]

[illegible]

この歓迎の中を縫うように歩き廻る司令を、男も女も老人も子供も笑顔で迎え、挙手の礼をしたり、親指を立ててジョート一番の合図をしたり、走り寄って、体を二つに折って深々と最敬礼をしたりして、尊敬と親愛の情を表している。司令も笑顔で応接に忙しい。こうして数百人の住民が珍客を迎えて喜び、司令は民衆から敬愛される王者の喜びを味わっているような光景を、しげしげ眺めながら、王道楽土の民衆と善政を施す王侯との触れ合う光景を思像しつつ、今日は良い所を見せて貰ったと私は喜んだ。

降下戦闘中の心境

その夜は、本部に御馳走になった。司令が白布の箱に納められている部下達と一緒に食事をしているような晩餐であった。

ミルクパッサールでの村人の喜びようは只事ではないと感じましたが、どういう訳でしょうかと司令に聞いてみた。「或日南洋、神武天より此地に下り来たって、三百五十年の植民地支配からインドネシヤ人を、解放してくれた如き日本軍。その軍人が眼前に降下一兵に至るまで、正に神兵の名に背かず住民に恐怖や不安を全く感じさせない善良な軍隊であることが、良く解ったからでしょう」との説明であった。「畑のキュウリ一本でも取ってはならぬ、婦女子を怖がらせることをするなと厳命し、兵隊全員がそれを守っている」とも言われたが、成程と肯けた。異民族の宣撫統治の模範的実例を見せて貰ったような感動を受けた。

未曾有の降下作戦の状況を隊長自身の口から聞くことが出来たのは、誠に幸いであった。『その日、昭和十七年一月十一日はクリスピンの基地から飛び立ってメナドへ近づいた時、雲が一面に覆っていて、目指す高地の飛行場が見えないかも知れないと心配になった。雲の中を飛行し、目的地の近くと思われる位置まで来たが雲のため全く見えない。旋回して探してみたが見つからない。作戦を中止して引き返そうかとおもったが、その直後に、雲の切れ目が出来て飛行場が見えたので、超低空で突っ込んで降下を敢行することが出来た。全く天祐と思った。　司令は第一番機に搭乗していた。飛行場の端に近づいた瞬間に第一番に飛び降りた。「続け」と副官等が次々と降下した。着陸までの数分間、目の下の椰子の茂みの端のトーチカから狙い撃ちされたが、不思議に無傷で通過できた。左前方五、六十メートルのトーチカからはどんどん撃ってくる。着陸した場所に雨水の流れ跡の、体の厚みくらいの窪みがあったのでそこへ伏して、鉄兜で少し掘って深くし頭を低めて左右の降下状態を見上げていた。次々と降下している波状、「第一番に降下し着陸している司令がトーチカから集中射撃を受けているのを見下ろしながら、「司令が危ない」と自分の身を忘れて気が気でなかった」、と言う。そのうちに着陸した者が、集中射撃に身を曝しながらピストルと手榴弾でトーチカに突撃し沈黙させてくれたので、自分も其所へ走り寄り指揮をとった。よくも此の最初のトーチカを早く取ってくれたと感謝にたえない。もう一度あのような危機を脱して攻略を成功して見ろと言われてもして出来るかどうか解らない。後続の副官達が沢山やってきたのに第一番の自分が無傷だったのには、天祐というか奇跡というか、それ以外の何物でもない。』

この降下中から集中攻撃を受けている間の自分の心境は必ず勝たねばならぬという重い任務だけが頭にあって、怖いとか死ぬとかいうことは全く意識しなかった。ビュンビュンと来る弾の中で恐怖も死も感ぜず空の気持ちで、指揮する事だけを考えていた。

重い任務を持つ時何物も怖くない。任務を持たぬとき人間は弱い。

死を恐れぬひとときの心境に部下全体を導くために隊長として苦労した。そうして訓練していると戦闘の時の困難な状況が死の恐怖と忘れさせてくれるものだ。』

重い任務は、落下傘隊長に命ぜられてから毎日が死との直面であった。危険な降下訓練と事故の続発であった。降下の一回一回毎に命懸けの極度の緊張であった。敵の居ない所での安全な降下をするには、大きな体でゆっくり降りれば良いが、敵前降下となれば滞空時間が長くなり、良い射撃目標になるのでかえって危険である。従って、滞空時間を出来る限り縮めるために機関銃から然も小さい落下傘で早く且つ無事に降下する方法を探求した。一定の武装をしての急速降下であるから着地時の衝撃が問題に大きい。このむつかしい危険な短時間の降下の「技術と着地衝撃」に耐える運動神経と体力つくりが基本訓練となった。海軍体操の創案者であり万能スポーツマンである自分が隊長に選ばれたのは、この為であったと思う。』

『体力つくりは主として海軍体操によって行った。それも自分の声で号令をかけてやってきた。副官などにやらせてはダメである。部隊全体との人格の接触を自分の声がする。録音の声でもダメである。顔を見合い声をかけて人格は反映される。こうして、部隊全員と一体となって猛訓練をやって、体力、精神ともに立派な部隊を育成してきた。』

感動

このような司令の話を一々感銘かかく聞いた、『司令の貴重な御体験に基く尊いお言葉を承り、また伺はパッサールでのインドネシア民衆の歓喜の姿を見て、非常に感動させられました。今後はこの地をインドネシアの住民を、司令がおきいましたように立派に指導し統治してゆくのは自分達民政担当者の任務です。司令殿が、落下傘部隊の全員が、死を賭して占領された如く、僕も身命を捧げてこの重任を果たす覚悟であります。』と胸を叩かんばかりに申し上げた処、堀内司令も目を指で拭い乍ら聞いて下さった。「司令は世界一の落下傘隊長ですね」と申し上げると、『世界一の隊長はどうかと思うが、世界一年配の落下傘隊長である事は確かですよ。ドイツでは二十五才以上の者は乗せていない。自分は今四十三才である。まだ何でもやれる。昨年も陸上自米競争と水泳の競技会で優勝した。百米を十二秒フラットでまだ走れる。今度の降下でも一番先に降りた。』と申された。

この「萬能スポーツ者年」の司令には驚き入りました。「勇将の下に弱卒なし」とは堀内部隊のことか。

宣伝隊の日

昭和十七三四　晴　小雨

今朝は六時から七十分間、指令の号令で隊員全部が、体操している様子を見学したが、リズミカルに流れるような、力強い躍動美に見とれてしまった。兵士の殆どが二十五、六才の体格の良い粒よりの選手のようであり、堀内司令が手塩にかけて鍛え上げた日本一、世界一の落下傘部隊のように見えた。

朝食後、部隊を率いて自動車で宣撫に出発した。ソンデル村の広場に、近隣から集まった千人程の群衆を前にして、通訳を介して凡そ次のような演説をされた。

一、日本は、英米蘭の支配からアジア民族を解放し、アジア人のための大東亜共栄圏建設を目指して、戦っており着々と戦果をあげている。フイリツピン、ボルネオ、シンガポール、セレベス、ジャバを占領した。

一、インドネシア人は三百五十年間オランダ植民地として支配されてきたが、今後は日本の指導援助の下に自らの繁栄を築き上げなければならない。

一、まだ戦争は続いている。英米を屈服させるまで勝ち抜かねばならない。インドネシアの諸君は日本に協力して、勤勉に働かねばならない。食糧等に不自由するかも知れないが、食糧の自給コプラや綿の増産に励まなければならない。

小雨のぱらつく中で、インドネシアの人々は喰い入るように壇上の司令に注目し、解り易く話しながら途中で「解ったか」と冬を押す度に、群衆から何度も大声で応答があった。

大群の人出で悪くなった道を　頬の濡れるにまかせ狂喜して近寄る長い人垣。

その中をゆるゆると進む自動車の列。

サヨナラ！

日本バンザイ！

バンザイの絶叫

指揮を立て、「日本ジョートー」と絶叫する者、目を皿のようにして車上の人の目を追う者。

濡れる椰子の木の下の草葺の家の前に

白い上衣をきちんとつけて最敬礼する老人。

椰子を高々と上げて見送る母親達の笑顔。

ニッポンインドネシヤ、ナカヨシと大声をあげる者ベランダに並んで恭しく頭を下げる一家族

部落男女狂喜する椰子の林の中の村。

翌日、メナドに立ち寄られたウラベ参謀（セレベス全島の攻略作戦を計画実行された落下傘隊の権威）に、この日の模様を話しかけ乍ら、「マカツサル方面でも熱狂的な歓迎を受けている。この日本への期待に果して我々は添い得るかと思うと恐ろしくなるようである。」との言葉に、改めて胸を打たれた。

ラングアン出発

昭和十七・四・二六　晴

いよいよラングアン出発の朝、別離の時である。村の真中の通りに長い列をなした約三十台のトラックには既に兵隊も乗り終わり出発を待っている。両側の数千人のインドネシア人の人垣に取り囲まれた車の列。手を上げて挨拶する者、泣いている「村長、娘達、おばあさん達、一天より降り来たった神兵の如き珍客を迎えて百日余、その敬愛する兵士たちとの別離の間際の僅かの時間を、車上の兵士の手を一人でも多く握ろうと狂人の如く走り廻る娘達の眼・手・体の動き、両側から差し伸べられる無数の手と兵士の手で釘づけされたようなトラックの列。司令が先頭車に立って、いよいよ出発である。のろのろと動きだした。バンザイ、バンザイの嵐、どの顔も泣きながら、バンザイ、サヨナラ、バンザイの絶叫。正に感激のクライマックスの数刻。

司令も兵士も後ろ髪を引かれる思いで手を振り振り離れていく。あゝ何と美しい別離の光景か。一緒にこの光景を眺めていた軍医長の言葉

『天下逸品の兵隊なればこそである。これもまた堀内司令の人格の現れである。』と、

その夜、メナドの橋本部隊本部でのささやかな送別の会食の席での、二人の司令のやりとりが面白かった。

堀内司令が、『今夜はゆっくり眠れるな。ゆうべは、でっかいのと一緒だったので、ベットからおっこちそうになった』と笑う。

それは、『昨夜は、堀内司令を迎えにメナドからラングアンまで行った橋本司令が堀内部隊本部に泊まったが、メナドの本部の大きな建物とちがって小さな民家なので、部屋もベットも足りない。そうは言っても司令の一言で、橋本司令のための一室は確保できるのに、それには誰かを動かさねばならなくなるので、「お前、オレと一緒に寝ろ」「よいとも」という調子で、堀内司令のシングルベットに、一七五糎の大男の橋本司令と筋骨逞しい一六九糎の堀内司令と一緒に寝た』というのである。

橋本司令も笑いながら、『手を伸ばすと何か気持ちが悪いと思ったら堀内の髭だった』とやり返す。（堀内司令は十五糎程のゆたかな髭をたくわえている。）生死を共にして来た二人の司令、片や音に聞こえる帝国海軍落下傘隊長、片や金鵄勲章を二つも貰っている海軍陸戦隊の猛者で、共に油の乗り切った海軍中佐の、この美しい友情に、聞く者一同、笑いの中にも静かに感銘を覚えたひとときであった。

メナド出港

昭和十七・四・二七

今日は堀内部隊が、何処かへ転戦のためメナドから出港する。いよいよ最後の別れである。午后、港に出てみると少し波が高い。兵隊はもう沖の船に乗船し終わって、隊長の乗船と出港を待っているという。岸から四、五十メートル離れたあたりを二隻のボートがゆっくりと移動しているのを、大勢の人が見守っている。

何たろうと思って尋ねると、小一時間前誤って水に落ちた一人の兵隊を錨を曳き廻しながら探しているという。波が高いといっても一メートルくらいのもので大したことはないのに、海軍の水兵さんがこんな岸辺で水没するなんて、そんなバカな事がどうして起きたのか、不思議でたまらない。沖がかりの船に乗るための艀が、ぴたっと接岸できるが、今日は岸との間が一メートル余りあって、歩み板を渡して艀に乗り移っていた。波の度に艀が上下に動くので少し注意を要するが、子供でもない限り危ないという程ではない。それなのに何の弾みか歩み板から落ちてしまい、岸と艀の何十人もの兵士の助けの手も僅かに届かぬ所で、あっという間に濁り水の中に見えなくなってしまったと言う。鰹のような突発事故であった。完全武装の重みが災いして、大事な銃を捧げたまゝ、（その銃の先にでも誰かの手がもう五十センチでも伸びて掴んでくれられ、見殺かったのに）沈んでしまったという。何人かの戦友達がすぐに裸になって潜り、更にその他の村人達が、最後のお別れに泳ぎ渡って棒で探したが、これ又不思議に見つからない。水深は三、四メートルで僅かな流速のある約六十米幅の河口港のために流されたらしく、どうしても探せなかった。そして、少し下流の方まで錨を曳き廻して探し続けているところである。

危険な特殊技術を要する落下傘降下にも、激しい弾丸の雨の中にも、無事に生き抜いてきた逞しい兵士が、岸から二メトルと離れていない海に乗り損なって水死するとは、何ともにくたらしい不運な気の毒な事故であることか。

やがて堀内司令も港に姿を現した。出港間際のこの悲しい突発事故に心を痛めている司令は、探し続けているボートの作業を見ながら、「せめて遺体を見届けてから行きたいと思って待っていたのだが……何とかして探して下さい」と、見送りの中隊長に重ねて依頼している。

そこへ、昨朝のラングアンでの送別だけで満足できずにトラック山を下ってきた郡長、村長その他の村人達が、最後のお別れに近寄ってきた。司令の白手袋の手を握る六尺男のモゴット郡長は、やがて堪えられなくなって司令に抱きついて男泣きをしている。抱きつかれたまゝの司令は、胸に顔を埋めた群長の頭を見下しながら、ハンケチを持っていく眼も濡れてきた。泣きはらして眼を赤くした少女が狂ったようにこみ上げながら、司令の前で腰を二つに折って挨拶している。三十名ほどの若者がかたまって、「堀内司令を称える歌」を涙を流しながら歌い出した。司令の眼も赤く濡れている。側に立っている僕等に「別れるということは実に辛いものですね」「五十の親爺に泣かれるのには実際まいる。本当にウソがないですからね」と言われた。美しい別離の光景である。

いよいよ司令も乗船する。「いろいろ貴重な御教訓を頂いて有難うございました。武運長久をお祈り申し上げます。」と申し上げる自分の目にも熱いものを催してきた。「どうぞしっかりやって下さい。」と言うやさしい言葉の勇将堀内中佐の目は、高僧の目の如く澄んで濡れていた。鼻水をハンカチでかみながら、ランチの方へ歩き出された。

勇将の目に涙あり別離の日

三日前、メナドの橋本司令に挨拶に来られた際、民政部事務所まで態々ご挨拶に寄って下さった堀内司令にお願いした書

於メナド民政部

謹啓　海軍中佐堀内豊秋

昭和十七年四月二十四日

誠の一字我に与えて何処えか　征きし司令の　まぶたにうかぶ

が、良い記念となった。大事に保存してある。

家郷を思う

文の命日

（付記）

川戸孟紀（旧姓　角田）　横浜市港北区大曽根　三一六一十一　045（531）4935

元海軍司政官　メナドに昭和十七年三月から二年の駐留。

元農林省営林局長

元中国、四国農政局長

戦前の北スラウェシ在留邦人

川井 雄二

外務省調査による昭和13年10月1日時点における蘭印の在留邦人数は、男性4,262名、女性2,207名、計6,469名である。
当時の在留邦人の主な職業は、以下の通りである。

	男 性	女 性	合 計
農耕、園芸、畜産	110人	3人	113人
漁業、製塩業	100人	1人	101人
同労働者	301人	0人	301人
小売業	599人	14人	613人
事務員(会社、銀行、商店)	1,246人	8人	1,254人
家族	1,097人	2,019人	3,116人

一方、ミナハサ半島に在住した邦人数は、昭和11年9月時点で320名である。
地方別にみると、メナード 71人。トモホン 12人。トンダノ 7人。ランゴワン 9人。ノーガン 2人。ラタハン 1人。カワンコアン 1人。ブンコル 5人。モトリン 2人。バサアン 12人。トトツク 2人。トンバアン 4人。ビートン 140人。サンギル 13人。モダヤ 39人である。

統計の年度が違っているが、概算で全蘭印の在留邦人の約5%がミナハサ半島に居住していたことになる。現在と比較すると破格の数値だが、当時の地理的状況を考慮すると至極当然の現象ともいえるだろう。

商業航空路が未発達で、一般市民にとって船舶による交通機関しか方法がなかった半世紀以上も前の時代では、蘭印に進出するルートは主に2つの経路に分けられた。

一つはシンガポール経由であり、もう一つはパラオなどの内南洋群島を経て、マナドを基点とするものである。当時のマナドは南方定期船の寄港地であり、蘭印の東の表玄関であった。
下記の定期船がマナド港に寄港した。

① 和蘭系のジャヴア・チャイナ・エンド・ジャパン汽船
(スラバヤ～マカッサル～バリクパパン～メナド～神戸)
4艘の汽船が配置され、メナドには月2回来航。

② 和蘭系のカー・ビー・エム。月2回来航。

③ 南洋海運会社の日本～ジャヴア線。月1回来航。

④ 日本郵船の南洋航路線。年6回来航。

1936年の入港隻数は308で、総トン数は2,705,505である。

現地在留邦人の団体的事業としては、メナード日本人会と日本商工会議所(昭和9年設立)の2組織があった。昭和11年時点、日本人会会長は南洋貿易株式会社メナード支店長(南洋パラオ支店長兼任)の山崎軍太氏、副会長は雑貨輸入卸売物産輸出商の双葉商会の柳井稔氏であった。

また、昭和 12 年 12 月 28 日省令第 22 号により、「メナド」駐在帝国領事館も開設された。
北スラウェシ在留邦人の主な事業は以下の通りである。

① 農耕・園芸・畜産

南太平洋貿易株式会社は、マリアナ群島、マーシャル群島などにおいてコプラ貿易で活躍した清水兄弟商会に従事していた柴田鉄四郎氏と小川寛氏がセレベス進出を前提として設立した会社である。大正5年5月にメナド支店を設立、サンギル群島タルナ、パタ、タマコシャオ、ハルマヘラ群島のテルナテ、トミニー湾のゴロタロ、ポソ、北部セレベスのケマ、アムランなどに分店を置き、コプラ買付機関とした。
英語名は Southern Pacific Trading Company で、略称は S.P.T.。

個人事業主の**上田勝造氏**は、カカスカツスンに約 150 エーカーの農園を所有し、各種野菜を栽培。昭和 11 年当時 36 歳だが、既住十数年。同氏の供給高の多寡によって市価が変動するほどで、野菜王との異名もとっているほどである

セレベス興業会社は昭和10 年5月に創設され、マンキット椰子園を経営。
他に**南洋貿易株式会社**のコプラ、**双葉商会**のコーヒー栽培等があった。

② 水 産 業

大岩漁業合名会社の社長の大岩勇氏は、かつてパラオで造船業の経営者。身長五尺そこそこの小柄な紳士だが、原地においては彼我共に定評のある存在で、蘭印官憲にも相当の信望があった。ビトウンでは鰹節工場を経営。満潮時には工場の半間位まで海水が寄せてくるので漁獲の陸揚げには至極便利であった。
他に**日蘭漁業株式会社**、**金城組**、**丹波組**などが活躍した。
水産業は邦人の独占市場であったという。

③ そ の 他

山田洋行はトモホンにある輸入販売店。経営者の山田正雄氏は、同地方の人々の間に信望厚く、息女は私塾を開いて語学や編物、刺繍などの諸芸を教授していたという。

マナド市の様子

昭和 11 年当時、マナド市の人口は約 1 万人であった。
外国人は、中国人が3000 人、欧州人が600 人、アラビア人 300 人ほどおり、それぞれが中国人街、欧州人街、アラブ人街に居住していた。

マナド港には、理事官在住の政庁税関、裁判所等があり、欧州人街には「アムステルダム」古城がメナード軍兵営になっていた。ポルトガル領有時代には「コタカステラ」と称されていたものである。

銀行や学校もあり、「レチプール」商社及び「モールマン」商会等の外国商店や和蘭石油会社支店などがあった。ホテルは蘭人経営のホテル・ウエルヘルミナ(室数 20)とホテル・エムマ(室数5)の2つが主なもので、その他に中国人経営の小さな旅館が4軒あった。

主要参考文献 ：

『東印度及豪州の點描』 小林識之助 著 統正社 昭和17年4月20日発行
『蘭印経済概観』 南洋協會 編 南洋協會 昭和15年11月20日発行

蘭領印度ニ於ケル邦人企業一覽圖

マレー
ヒリツピン
スマトラ
ボルネオ
セレベス
ハルマヘラ
セラム
ニューギニア
チモール
ジャバ

サバン
メダン
パダン
パレンバン
ビリトン
ポンチアナ
タラカン
サンクリラン
サマリンダ
バンチヤルマシン
マカツサル
ブートン
メナード
タルナテ
アンボン
マノクアリ
ナビレ
サルミ
ホーランディア
ドボ
バタビア
チエリボン
スマラン
スラバヤ
チラチャップ

護謨園

① スマトラ拓植株式會社
② ボルネオ護謨株式會社
③ 熱帶產業株式會社
④ ボルネオ護謨株式會社
⑤ 南洋護謨株式會社
⑥ スマトラ拓植株式會社
⑦ 昭和護謨株式會社
⑧ 南國ゴム株式會社
⑨ 古川合名會社
⑩ 臺灣拓植株式會社
⑪ 南和公司
⑫ 南和公司
⑬ 熱帶產業株式會社
⑭ スランジン護謨園
⑮ 蘭領印度拓植株式會社
⑯ 野村東印度拓植株式會社
⑰ 南洋興業株式會社
⑱ 東印度拓植株式會社
⑲ 南國產業株式會社
⑳ 南國產業株式會社

椰子園

1 野村東印度拓植株式會社
2 南國ゴム株式會社
3 東山農事株式會社
4 大倉スマトラ農場
5 蘭領東印度拓植株式會社
6 ニヤミール古ヤ椰子園
7 南太平洋貿易株式會社
8 南太平洋貿易株式會社
9 南太平洋貿易株式會社
10 南太平洋貿易株式會社
11 南太平洋貿易株式會社
12 南太平洋貿易株式會社
13 南太平洋貿易株式會社
14 南太平洋貿易株式會社
15 南太平洋貿易株式會社
16 臺灣銀行

規那園

1 野村東印度拓植產業
2 南國產業株式會社
3 武田長兵衛商會
4 南洋興業株式會社
5 武田長兵衛商會
6 南國產業株式會社
7 南國產業株式會社

水產園

1 玉城組
2 金城組
3 永福公司　大城公司
4 玉城組
5 大岩漁業出張所
6 大岩・日榮ビジヤツタ漁業
7 ブートン貿易株式會社
8 個人漁業
9 個人漁業

鑛業

1 石原鑛山株式會社
2 ボルネオ石油株式會社
3 バンガイ雲母採掘株式會社

林業

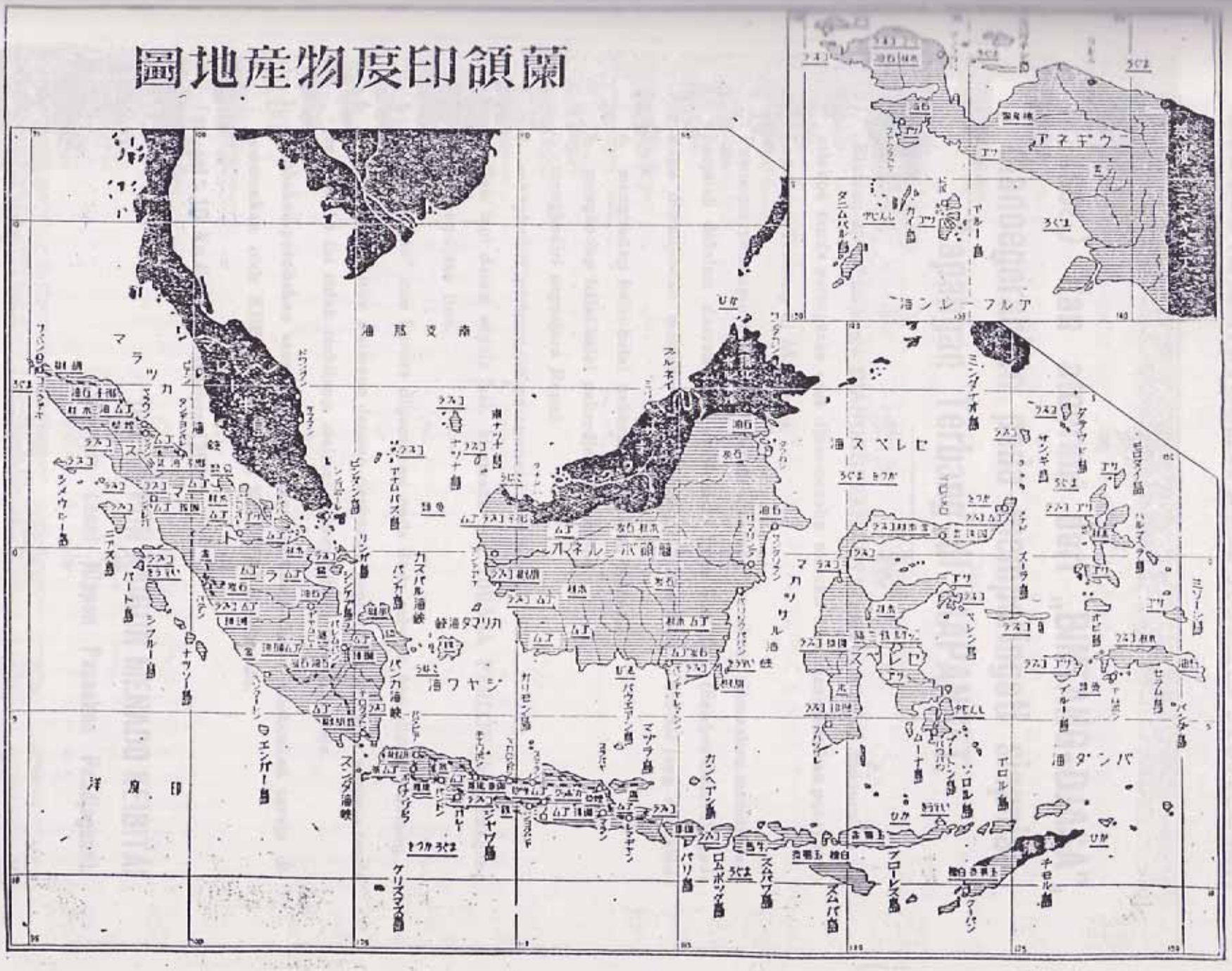
1 ボルネオ物產商會
2 南洋林業株式會社
3 ボルネオ物產商會
4 雪本商會

其他

1 佐藤農工商事會社(入植)
2 竹腰商事株式會社(ゴボウタ)
3 二葉商會(コーヒー)
4 南洋貿易株式會社(コプラ)
5 南洋興發株式會社(綿)
6 南洋興發株式會社(麻)
7 南洋興發株式會社(綿)

昭和十五年六月調

蘭領印度物産地圖


ボルネオ領
ジャワ海
スペレビ海
ダンバ海
ニューギニア海
マラッカ海峡
スンダ海峡
ジャワ島
スマトラ島
ボルネオ島
セレベス島
ニューギニア島
ティモール島
ケリスツア島
ロムボック島
スムバワ島
フローレス島
ムバ島
ケロル島
チモール島
ミンダナオ島
ジロロ島
ムーナ島
ボビ島
ゼラム島
バンダ島
ハルマヘラ島
ダラウド島
サンギ島
ベレン島
ムロタイ島
ナツナ島
ナツナ海峡
カスパル海峡
バンカ海峡
ガリモン島
マデラ島
カンペアン島
バリ島
ジャヤ島
ニアス島
パート島
シブルー島
ナブン島
エンガー島
ジンケル島
ビンタン島
ムアラ
ムアラ
ムアラ

昭和18年9月10日、大日本海軍メナド警備隊が発行した、マパンガット飛行場（サム・ラトウランギ空港の前身）建設工事《 功労章 》授与証。

（空港拡張工事で働く運転手が、私の祖父が日本軍からもらった、といってもってきたもの。）

Maksoed dan atoeran² dari „BINTANG-DJASA", dianoegerahkan pada memperingati siapnja Lapangan Terbang di MAPANGET.

1. „Bintang-djasa" ini hanja DIANOEGERAHKAN kepada pemimpin2 Indonesia sebagai selakoe tanda peringatan atas djasa-oesaha mereka itoe, menjelesaikan pekerdjaan Lapangan-Terbang di Mapanget.

2. Pemimpin-pemimpin jang dianoegerahi „bintang" terseboet, diloeaskan memakainja, hanjalah didalam daerah Kaigun Menado Syuu Tizi Tyo (Selebes Oetara), pada siapa diwadjibkan memakai tanda peringatan itoe dalam hal-hal jang demikian:

   a. menghadap balai-balai pekerdjaan Kaigun Keibitai.

   b. menghadap balai-balai pekerdjaan Minseibu.

   c. menghadiri oepatjara Resmi.

   d. menghadiri pertemoean-pertemoean oemoem.

   e. dan lagi dalam segala hal, bilamana itoe DIRASA PERLOE oleh pemegang bintang-djasa itoe.

3. „Bintang-djasa" itoe haroes digantoeng pada dada sebelah kiri diatas Kantong.

4. „Bintang-djasa" itoe disimpan dengan perhatian sepenoeh-penoehnja, soepaja tanda jang moelia ini tidak terhilang, melainkan terpelihara sebaik-baiknja.

5. Perobahan-perobahan atas atoeran-atoeran ini hanja dapat dilakoekan seraja diOemoemkan oleh KEPALA KAIGUN KEIBITAI di Menado.

Tanggal: 10 Ku-Gatu 18 Syoowa (2603).

DAI NIPPON KAIGUN MENADO KEIBITAI
(Tentara Laoet Nippon Pasoekan Pendjagaan).

ビトン―アンボン漁業開拓者―原 耕氏のこと

川口 博康

私のビトン駐在の一つのきっかけ―興味を掻き立てた事のひとつに原 耕氏の南洋漁業探検がありました。代議士でありながら１００トンたらずの鰹一本釣り船に自ら乗船し日本の遠洋漁業の先駆者としてこの地にもその足跡を残していますので岸良 精一氏の残した本から一部紹介させてもらいました。

特に南進論が盛んな当時アンボンに漁業基地の建設に人生の後半を捧げかの地で逝去されています。このビトンやアンボンでかつお節工場を建設―製造に従事した最初の日本人ではなかったでしょうか。たまたま縁有ってこの地でかつお節作りに携わるものにとりましては大先輩の足跡です。

同時に氏が二度の調査を終わりいよいよ本格的にアンボンに漁業基地を建設するに当たって関係者と従業員におくったメッセージ「漁友諸君へ」にはその意義―心構え―計画の全体を述べてあります。なかでもその国際感覚はすばらしいと思います。今回は紙面の都合で掲載できませんが何時かご紹介できると思います。

特に今回は第一回目の探検―調査(昭和二年)の記録の中にあるビトン―ケマーメナードに関係した部分のみを掲載させて頂きました。

当時のこの地の事についても面白いと思います。

原 耕 略 歴

一、明治九年二月　鹿児島県川辺郡西南方村泊　原平之進二男として生まる。生家は代々鰯網付漁業や、帆船に依る鰹漁業を経営した。

一、明治二十九年　大阪高等医学校入学

一、明治三十五年　同校卒業　此の間外国航路の船医として亜米利加方面に航行する。

一、明治三十七年　枕崎市で医院を開業する。外科医として評判も良く繁昌する。

一、明治三十八年七月　父の持船原一号船が口永部島付近で台風の為め沈没乗組員三〇人死亡。

一、明治三十九年十月　原二号船が男女群島付近で台風の為め沈没、乗組員十五人中九人死亡、令弟捨思氏は辛くも助かる。以上二度の重なる事故で漁船経営を中止する。

一、医院の経営が軌道にのると、父の持船の遺族の生活を維持する為め鰹船経営を決意し一〇屯程度の動力船を購入してカツオ漁業を経営する。

一、漁船の大型化を企て、先づ枕崎の浜の船大工では不充分な為め遠船所建設を目論見、自ら発起人の一人となり枕崎遠船株式会社を設立、枕崎築港事務所長であった檜口屯を社長に起用する。

一、大正九年　一九屯五〇馬力の動力船を建造し、千代丸と命名し鰹漁業に自ら乗船して出漁する。

一、大正十二年　船頭松之下甚之丞で八一・〇六円の水揚をなし最優勝の表彰を受くる。そして愈々船の大型化を企てる。

一、大正十四年四月　大型船進水し千代丸と命名す。九〇屯一五〇馬力の船は業界に大いに刺激を与えた。沖縄近海で一航海一万円の大漁をなし更に台湾南部迄出漁する。薩南海区・沖縄海区共勝間始め県外船の進出し、漁場狭隘を告げ海況に依りては破産経営の船も出て来て恐慌状態現れる。

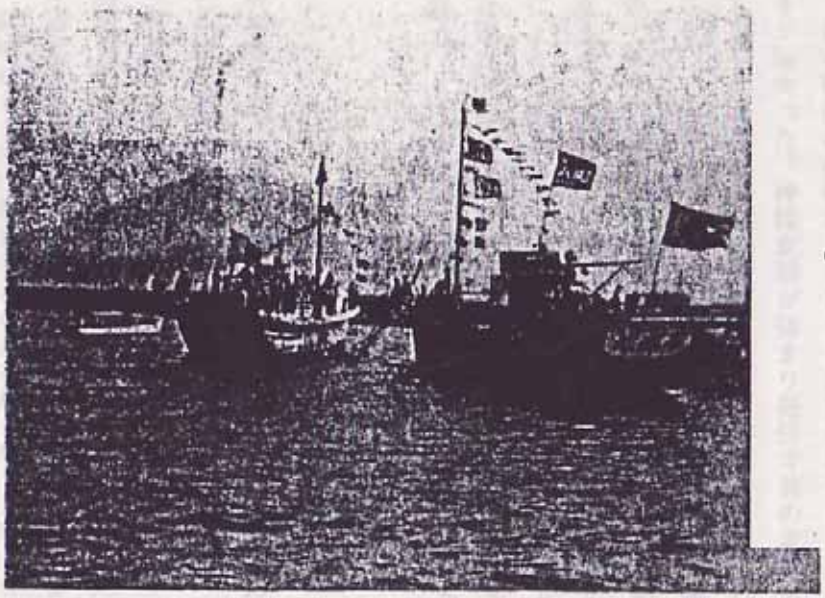
一、昭和二年　千代丸並びに共同経営であった八阪丸(川崎竜吉)を使用し、全船を第三千代丸と呼んで二隻を以て南洋探険を行い、六ヶ月を要し大成功裡に終わる。

一、第二次南洋探険は昭和四年六月から十二月迄、蘭領東印度諸島モラツカス県アンボンを根拠地として従漁し好成績を挙げ更に全方面広範囲に亘る調査を行った。

一、第三回出漁は昭和七年十二月千代丸と共に、別に中型船千代丸弐艘を伴い出漁し、アンボンに於て基地建設進捗中悪性マラリヤに罹り急逝する。享年五十八歳

一、昭和三年　代議士に当選　同五年落選　同七年一区最高点で当選。昭和八年従六位追贈。

以上で千代丸並に、八阪丸の航海日誌は終る。枕崎市史に塔載されたのは千代丸の分のみであったが、後年「南海を拓く」との原耕の献身の努力を二十四回に亘って連載記事を書いた西日本新聞の金子記者は岸良の報告は、味も素気もないタンタンたる記載であるが、県庁への報告の公文書であれば感情を交えた個人の記録は省略するも止むを得まいと結んでいる。又、千代丸の日誌丈けを枕崎市史に塔載した編集委員は次の通りしめくくっている。



鹿児島税関下に先着の第三千代丸と共に纜を結ぶ千代丸(左)

乗組員名簿に見るように、千代丸には原耕が、八阪丸には実弟の捨思が乗船している。乗組員は大部分が坊泊の出身で枕崎は千代丸二人、八阪丸七人である。探険は最初日本の委任統治下にあったパラオ群島海域から行ない、さらに南下して赤道をこえ、ボルネオ、スマトラ、セレベス、アンボン島海域を探険した。とくにセレベスおよびアンボン近海では大漁場を発見し、多大の漁獲を挙げている。だが、この探険は決して容易順調のみ進んだわけではなかった。一〇〇噸たらずの石油発動機船をもって一万浬におよぶこの探険は、先人のいまだ試みたことのない冒険事であったので、船員たちの不安もひとかたではなかった。機関の故障を起して漂流したり座礁してあやうく遭難を免れるということもあった。こんなとき船員は危害を恐れ、腕をこまぬいて傍観しているだけであった。原耕はみづから海中にもぐり、船底の状況を検視し、船員を激励して自力で離礁したこともあった。

註　(九月六・七日の項参照)航海が長期にわたると船員達の間に焦そうと不安が高じて、茫々の絶海でストライキまで起している。航海中に漁獲した鰹は、氷がないために大部分を海中に投げ捨てる始末となり無尽蔵の魚群に際会しながら、数百尾しか釣れないという辛酸もなめている。しかし、この探険は海の宝庫ともいえる数々の好漁場を発見して、まず成功裡に終った。漁船の大型化の黎明に多獲こそ重大な課題であったからである。

と結んである。

サンギ列島操業打ち切りメナードへ

六月二日鹿児島を出航してから早くも三ヵ月を経過していた。前にも記したが飛出しの沖縄海域迄の海を二隻の薩摩の優秀船二隻が一匹も逃さじと探した鰹は漁場荒廃とも云うべく漁に恵まれず、フィリッピンの東海岸で大魚群ありといえども状況は釣るを許さず、遥々パラオ島に渡り加工場を設け大々的に大漁をして沢山の鰹節を山程積んで帰ろうとしたが、情報に振り廻されて実りなき日々であった。船員達に予約されたと云う前金を渡した手当の三ヵ月は丁度期日に来ていた。

私の県庁の出張命令の期日も満期の頃であった。千代丸はいざ知らず八阪丸の船員中には怠業の動きが強かった。神経衰弱が強まり発狂寸前の老漁夫が投身し救助されたことは既に記した。前途に対する不安は漁士の間に浸透していた。然し原さんの立場はそんなものではなかった。もっと高度の所でそして全財産、全生命をなげうっての懸命の大事業であり、日本の鰹漁業の将来を策する大事業なのであり、是が成功する限り漁夫諸君の生活も亦福祉の向上もある筈であった。日本水産業発展の将来をかけて何百万漁家の福祉を求めて、今原先生の脱落は認められる事ではなかったであろう。情報によれば南進をするほどに鰹は豊富な情報は次から次に入って来て信ずるに足る話の様であった。時は既に九月に入っていた。私はこの辺から原先生をジーッと見詰めていた。繰返すようだが苦境の連続で、もうそれは三ヵ月にも及んでいた。夜は転馬船の表の三角間に身体を菜葉服と合羽に埋めて釣

糸を垂れて、秘かに釣を楽しむ人とは言え、その釣糸にさわる鰹釣の餌になる小魚の動勢を探る先生の心情を誰が想像されるだろうか？

翌朝先生が釣った魚と云って私の前に鯛が煮付て呉れる小皿の魚よりも、私は餌魚の大漁の報告を期待した。不撓と言い不屈と云う原先生であり不死身の先生であった。火船の船頭を常に勤めたのは片浦出身の中村庄太郎であって、私は常にその労をねぎらったものであった。

窮境に入る程に勇気の湧く人であった。大衆はただついて行くばかりと云う人であった。九月も二日であった。一切の陸上加工設備を徹去して本船に積込みタルナ港を出帆し三日の午前十時メナード港に入港し、政庁があるので原さんは通訳を通じ諸手続やら情報収集やら大多忙である。タルナ港の柳井氏の紹介で南洋貿易支店長の斡旋を得て大交渉が行われたが、入国税・その他で甚だ難渋であったらしい。らしいと云うが原さんはそんな苦しみを私如きに云う人ではないのであって、柳井氏や谷川支配人あたりから私は秘かにきき出すに過ぎないのである。

入国税を一人百円もとると云う話である。原さんの押の一手で船の入港税だけは納めるが漁夫は上陸しないから入国税は払わない。いざ大漁で製造人を上陸させ加工となれば占めたもので、製造人だけ入国税を払えば良いではないか。情報としてはセレベス島北端のメナード港の反対側のケマは優秀な土人の鰹漁業盛んな部落があり、焼魚としてメナード市場の重要な供給地と言うではないか、それらの交渉と情報を集める為めに九月五日迄メナード港に滞泊した。

別掲千代丸日誌の内

44

挿入写真はこのときメナードの写真館で写した私供の思い出のものである。

千代丸セレベス北端に座礁す

暗夜　原先生率先潜水　人喰鰐の海に
投じ船体の安否を探り　更に沈着
冷静に指揮を下し　危機を脱す
後世に言継がれる原耕先生の決断

九月六日午后一時半、メナード港を抜錨ケマに向ったが、此の頃になると枕崎出帆の節積込んだ食糧は殆んど底をついていた。味噌も醤油も、又パラオ港で追加した重油も長途の航海には耐へられない事態であった。一行百十三名死活の問題となりかねない事態。それは寸前であった。危難は此の中に待構えていた。午后六時将に夕闇迫らんとする頃、千代丸は暗礁に乗上げて了った。ゴソゴソと船底を何物かがコスッた様な音がした瞬間、ドシーンと暗礁に座礁して了ったのである。一同顔色を変えた。原先生の機転と勇気を振るったのはこの時で、今に伝わる有名な原耕の武勇伝みたいな有名な話である。私はそれを目撃した、強烈な感激を受けた。原先生は突嗟に、

「転馬を卸せつつ、誰か潜って見てみらんか、ランプを出して見よ」

とテキパキと下知をされた。然し人喰鰐のウヨウヨしている南海の夕闇の海に、如何に訓練された

漁夫達と雖もオイソレと飛び込めるものでもあるまい。漁夫達の遠巡の態度は原さんにもう服を脱ぎ裸体になって転馬船に飛び移り、船尾に廻り水中眼鏡を持って潜水し、くわしく調査をされ上って来て言われたことは、三ヵ所位船底が岩に乗っていてプロペラなど異状はない。船体も異状はない大丈夫と思うから後続の八阪丸に近寄るなと信号せよ。潮時を見計らって独自で離礁すると言われたのである。八阪丸に赤ランプで停船させ、その旨を告げ先発させた。それには明日の餌取りの準備があった。

誠に鮮やかな陣頭指揮であった。その勇気とその処置に船員みんなが全く物も言えぬ気持ちであったし、私などこんな指揮官又とあるだろうかと感嘆之久うしたものであった。

艦船の中での船員の行動は魚群を見たなら、幹部の動きを良く見てその指揮下に五十人の漁夫を手足の如く動かす所に船頭の手腕があるので「ヘイ、ハッチ、センカ」などと言う現代語に訳せばツーカーとでも言うか、原先生の号令も此の場合丈けは通じなかった。漁士達の頭の中に南海の人喰鰐の存在があったか、それが遠巡させたか、後世の造り話かも知れないが、船頭も私もみんなも全く先手を打たれて手も足も出なかった。穴があれば這入りたいと云う言葉があるが、そのことを考えていた。潮の満ちて離礁の努力をする時間が来るのを如何に待ち遠しかったことか。

翌七日午前二時、満潮時を期して独力で離礁して少々沖合に出し、夜間の航行は危険として仮泊し六時に始動してケマに向った。先は無事で良かったと思った。天はまだ千代丸を見捨てなかった。セレベス島北岸沖合を視察しつつレムベ水道に入り、独逸仮装巡洋艦エムデン号の仮泊や活動を想像し

つつ、十二時ケマ港に到着投錨した。休む間もなく先着の八阪丸の連中と打合せ、餌取の準備にかかる連日の強行行動であった。この頃食糧も底をつき漁夫達のホームシックは昂じて八阪丸の一部にストライキの様子を見せて来た。大体鰹釣の漁夫達ときたら、鰹群見付かる迄の見張り位が仕事で、瞬間的な釣上げ労働など短時間の仕事で、帰航途中などは交代の当直を除けば連日連夜の白河夜舟である。一時間休まず釣る機会でもあったら、船が沈む位の仕事で楽な仕事なのであるが、連夜の八田網操業と来たらねむたくてたまらないのでその労働たるや比較にならない労苦の連続であった。捨思さんも色々慰留し説得されたらしい。私にも色々と訴えがあった。特に大阪あたりの鉄工所で働いていたと云う油差の一人に強いのがいたし、一介の漁夫と虽も一角の論客もいた。私は大局的に原先生の立場を説き協力を求めていた。色んなことがあるものだと思った。

馬来語会話集の偉力

片目の山蕃人、山刀の恐怖、日本漁夫達
振るへ上り、助けを求む、会話集を携へ
飛び説得、大奪斗、

一行がケマ港に到着した頃、米も味噌も醤油も底をついていた。資金も欠乏していたであろう。青年達の仕事は薪水の補給であった。ピーツンと云う部落に良い水があり、それを汲み入れて確保できた

が欠乏していた。餌投げの虎吉君が若い連中を指揮して、山に薪木取りに出かけたが、山番人に見付かりそれが蕃刀を腰に刺した片目の凄い顔立ちで何やらまくしたてるのが言葉が通じないので、漁士連中が大変な恐怖に陥入って、一部の者を山に残して転馬船で漕ぎ帰って来て急を告げ、私に来て呉れと訴えるのである。それによると薪を切っていると山番人が来て大変喧しいがさっぱり意味が通じない。片目の男が蕃刀を持っており、切り付けるかも知れない。すぐ来て呉れと云う全く切迫した事態となった。今日始めて蘭印に来て上陸し始めて接触した土人が是だし、まだ言葉の訓練は何もできていない連中だから海の男達も顔色を変えたのも得むを得ないだろう。事態が斯うなので私は柳井氏から寄せられた会話集を後生大切に抱えて転馬に乗せられて現場に連れていかれたが、漁士連中が一人の男を向うにして顔色変えている態である。確かに一尺五寸位の蕃刀を腰にした片目の男が頑張っていた。私は直接この男に体当りで向っていた。一体どうしたのかね、吾々は日本人で鰹の漁場調査に来ているが、水や薪が欠乏したので少々貰いに来た。無断で山に入り切ったは悪かった。まだ当地に来たばかりで言葉は全然判らない。などと知った限りの言葉をおっかぶせていった。会話集を引用したこと当然である。そのうちどうした風の吹廻しか、山蕃人の顔色と態度がガラッと変って好意的に見えてきて笑顔も見せた上「良ろしい。薪は持って行って良ろしい」と言う。それを漁夫達に伝え薪を積込んで喜び勇んで帰船と云う次第であった。以後は自由に薪を切って良ろしいと云うことになった。私はこの山蕃人の手の甲をツマミ揚げて、馬来語で「サマ、サマ」（同色であると云う意）と云って親密の情を現しておいた。他の土人の酋長が私に教えた黄色人種の親密の情の表現であった。

船の中で漁夫連中の後での話に「ホー、先生は強えわい、あの片目の土人がコロッいたでや」又「先生や、身体は細どん、強えもんじゃ、平気で土人をやいこめやった」などいいおった。漁夫達を恐怖に落し込んだこの事件も会話集の御陰で無事解決したが、若し馬来語が通じずに未解決だったら、果してどうなったであろうか。この頃から便乗視察員であった私は事毎に土人との接衝に引き出され、乗組員同様の気持ちになってその経営にも口出しをする様に、心境の変化を来して努力していた。餌採の作業は休みなく続けられていた。

九月七日の出来ごとであった。

起死回生・快心の鰹大漁

千代丸一行の運命に大きな転起をもたらしたのは九月九日であった。昨八日はケマ沖十五浬沖合迄出漁したが、魚群はなく空しく帰港して、夜は餌採に従事し多少労れ気味と聊か意気消沈と云う所だったが、午前七時頃やおら甲板に立上った一人の漁夫が奇声を発した

「鳥巻じゃぁ、」　他の連中が出て来て

「鳥巻じゃ！　鳥巻じゃ！」

直ちに出動し是を追いかけた。午后一時沖合七浬位附近で鰹の大群を飼い付けた。餌付旺盛ときた。腕を賦してきた千代丸の連中が、手腕を発揮したのもこの行の圧冠であったし、私も直接此の目で見

た壮観であった。

十五分位で餌が尽きたので打ち揚げたが、帰港して見たら中鰹で七〇〇尾あって、日本の半値位ながら八〇〇ギルダーで土人が現金で買った。土人達は是を二つ割りにし、焼魚にしてメナード市場や近郊に売却する商人達であった。餌が満足にあれば五千や六千尾は釣れそうな魚群であったし、それを確認した収獲は精神的に非常に大きかったし、志気は大いに昂揚した。聊かのストライキ気分など是で完全に夢消して了った。大きな転機となった。

私は鹿児島県水産試験場長に電報でこの大漁を報告したが、後は帰国してから試験場の久保園氏が集めてあった新聞切抜の中に鹿児島朝日新聞の

「椰子の葉陰に湧く鰹」という大見出しで、千代丸大漁の記事が出ていた。新聞社が大変喜んでいた。

これをきっかけにして毎晩餌取り、昼は鰹釣り操業を続け良い鰹群が多かった。

九月　十　日	二七〇尾
九月十一日	一八〇尾
九月十四日	四〇〇尾
九月十五日	六〇〇尾

と続き十月に入ると十月二日一八一九尾八阪丸八〇〇尾の漁を挙げ土人に売れるだけは売り、残りは加工場を設置して節に加工した。

原　耕先生限りなき南進の意欲

原先生は強い人であった。決して弱音を吐かない人であった。沖縄海域迫の操業は予定の計画に大きな失敗と支障を来した。パラオ島の操業は予期に反した粗誤を来して、完全に失敗と言って過言でなかろう。それでも外領の蘭印に進出し口に言えない苦難の道をたどる千代丸一行の南洋探険であった。資金は窮乏し、積込んだ食糧は底をつき燃料も乏しく前途暗澹と云うべき頃、尚且つ南へ南へと船を進めれらた。強い信念の人であった。メナードからケマえの途中座礁事故を起し、率先潜水し善後処置を完行したその度胸と気魄は驚ろくばかりであった。その勇気を私は島津義弘に例えたことがある。ケマで起死回生の鰹漁に恵まれ、以後魚群と餌に四ヵ月目にして微笑に恵れたその転変を私はテレビ放送で人間窮らねば好運の転起はないと言い放ったのに大分からその理由をきかされたことがあるが、事実ほんとうに進退之窮るの状況であったのである。それが一転して連日大漁で現金で捌ける所に辿りついたのである。信念の勝利であり、又不屈の精神が招いた自らの幸運であると言えよう。私に限ったことではないが、百十三名の明日の米代を如何せん。日本に帰るとすれ、その燃料を如何せんやと冷汗三斗の気持か、九月九日大漁に転移するまでに一行心の中に秘かに考えつづけていたのも事実である。

アンボンへ調査行

原先生の許に集る情報にアンボンと云う所に良い漁業根拠地があり、土人の漁業もあり餌もある。蘭領一の良港との情報はゾクゾクと集りつつあった。タラカン重油の積取りは日本へ帰る燃料ではなく、アンボン行の燃料であったことは、漁士の期待とはウラハラである。その構想は練られ十月十七日、僅かに五桶の餌を持って中田船長を乗せて千代丸が出発することになり、午前八時出発したが、途中魚群に会し三一四尾を釣りケマに引返し水揚げ後午后一時再出発した。針路南々東に取り、一路アンボンへ、八阪丸は残りて餌取りや鰹を釣る。

赤道祭

昭和二年十月十八日、日本の鰹船が始めて赤道を越えて南へ進んだ記念すべき日である。中田船長の天測で午前十時が赤道通過の時間であると知らされた。原さんは番頭の谷川佐平次君に酒を出すように命ぜられ、一同に振舞われこの壮途を祝福された。沖縄から持参した泡盛酒であった。珍らしく原先生気嫌が良かった。漁士中間から歌の上手な連中がいて、次から次に汐替節やら大津會節やら、浪速節やらで賑やかな赤道祭りであった。千代丸も原さんも亦私も一行も始めてだし、鰹船として破天荒の事であり日本水産発展史に永久に記録せらるべき出来事であった。岸良一族でも此の光栄は私一人だろうし、又水産学校の卒業生の一人としても水産試験場の指導員としても誠に光栄の至りで大いなる興奮を覚えたものであった。千代丸万歳!!

十九日はスル島の北方海面で鮪の大群の飛躍するを見て、又二十日はアンボン島に近く又々鮪の大群に遭遇した。午后七時アンボン港入港し、二十一日は港務所・税関等の手続を了へ情報を集めたり餌探しに奔走し、アンボン島北岸のヒツ迠船を進めて探したが、不発におわり二十三日アンボンに引返した。二十四の早朝アンボンの本船泊地の西方に土人が餌になる鯉蜂を捕獲蓄養しているというので、早速出かけて五寸大のムロアジと鯖仔混りのものを購入して出漁九時にも魚群を発見し釣りが始ったが、、餌魚が大きいのと大鮪も混っていて喰い付が荒く、又竿が折れたり釣糸が切れたりの事故続出の悪戦苦闘であったが、四回流しで大鮪一〇二尾鰹四三八尾を釣っていた。アンボン港に帰り島民を驚かした。現金で売ったもの二八〇円と記されているが、後は市中にバラまいた。これでアンボンの漁場価値は証明されたことになった。その他の調査によれば湾奥の方には篝火で小魚を集め、海海岸におびき寄せて地曳網で囲み、浅い所に竿を立てて活餌養している所もあるし、又良いタレロ鱸や

再会を懐しがった。又日本からの御土産等貰らって、有頂天になって喜んだ風景が見られて親善を深めたことであった。

汽船便から来ると言う資本家側一行の動勢が不明なので明日はメナードに行くことになった。

六月二十二日　私と谷川佐平次（原氏の番頭兼会計係）君とメナードに行くことになり自動車で林間の美事なアスファルト装の道路を気味の悪い位の速度で飛ばして呉れるのに目を廻した。行けども尽きぬ椰子林の並木も美事であった。道路の美事に整備されているのに驚くと共に思い出されるのは或新聞か雑誌で見た記事である。それは新らしい占領地若くは殖民地に対して英国は海運王国に相応しく直ちに港湾を整備する。オランダは道路を綺麗に整備する。それに引換へ日本は先づ法律を布く、と言う一節であった。油の産地であるからかアスファルト道路はほんとうに美事であってその説にうなづかされるものがあった。

又ミナハサ米と言われる水田地帯も日本の八月頃の発育振りであった。メナード市に到着して南洋貿易の支店長と再会し一行が七月六日にメナードに到着するとの情報を得たり、魚市場に行き取引の情報等をきいたりした。沖縄県漁夫達が当地迠来て操業し、殆んど市場への供給は彼等の手中にあるの感があった。鯉の一種の川魚も沢山あった。ケマに帰る。

六月二十三日　汽船便で来る一行待合せの為暫くケマに滞在して此地で漁業することに決定を見、愈餌の採収の準備に取掛る。

六月二十四日　ケマに於て土人より餌鱸を買う予定なりしも思うように行かず之から暗夜に入るので

49

ビツン方面に餌漁業に従事することになる。九時頃のことであった。土人の一人がカヌーに乗って沖合から帰って来たので沖の模様でも聞かんとせしに驚く忽れだ。たった一人で黒皮旗魚の凡そ七、八十斤はあろうと云う代物を船一杯に積んでいるのには驚ろいた。たった一人での仕事には大奮闘であったろう。延縄で従業すれば鮪や旗魚が大漁するであろうと思った。マレー語でイカン・ライアン（獅子魚の意）と言う由。

昨日ケマにて餌を十桶位、ギリヤンで三桶位買入れたるも不足にてレムベ水道に向う。ここで昼張りで三、四回揚げ鰮を漁獲した。通称鰹鰮と言ったのが多く大羽鰮もガツンも入った。

七月六日　ビツンの大饗宴。

汽船便からの一行の到着の予定なのでビツンのカパーラ（村長）の自動車便があるとの言を信じて上陸したが、車便がなく水浴などして過し三時頃車がありそうでのんびりしていたら八田網操業に使う船を借りている親爺さん（相当村の有力者）から招待を受けることになった。トモホンと云う所に別居している伜が帰って来て新築の家に入った祝で親類中集って御馳走が出る所だから是非来いと云うのである。是も経験の為めだからと原先生と無線士、三重県からの視察員の山下市郎君と私の四人が乗り込んだ。家は相当に立派であり、控室とてないからもう料理が一杯列べてあるテーブル脇の方の椅子によって開宴を待つ。接待煙草をくゆらしながら室内を見廻すと西方の壁には和蘭女帝の写真が掲げられ反対側の壁には欧州物らしい布地を一面に貼り付け（相当高価なものであろう）其れに如何にもモンブランとでも云いそうな風景画が美事に更に金で縁取りした鏡が飾ら

れてある。まあ中流どころの土人の客間であろうか。主賓は村長、その次に我等四人向う側は婦人達で主客二十五、六人で大抵は顔見知りと云う程度の連中である。席が定まると主人の祈祷が始り手を合わせて合掌していると馬来語で立派な祈り口調で意味は判らないが仲々の出来で最後にアーメンと結んだ様です。クリスチャンであるらしく夫から支那人らしいボーイにより御飯が運ばれる。銘々適当量を自分の皿に受け、卓上に飾り並べられた豚肉らしきもの、魚の様なもの、或は白いもの、黄色いもの、骨のゴツゴツしたもの、軟かそうなもの色々あります。各々私供の名前を呼び乍ら存分に喰べよと奨めて呉れる。土人ビールと云う飲物も出る。それらの料理を御飯にブッカケて喰べる。皿の中の御飯が無くなるとボーイが持って来て更に取るように差出すと言う具合です。

始めての御馳走だから如何な味のものかと頗る興味あることと思い、先づスプーンで一杯試して見た所思わず悲鳴を挙げたその辛さです。「アッ辛ィ」と奇声を発したとき既に涙が一杯出ておる周章てビールで口を流す。その態を見て婦人達は笑っている。唯一つ美味しかったのは串に刺した肉の焼料理で大変美味しかった。我々の口に合ったと見るや自分の所のものを取って喰べよと押しつけて呉れる。村長さんも串刺を私に呉れる。婦人達もドンドンお代りをしてパクついている。ビールの代りに果実蜜の様なものを飲んで談笑している。此の肉につけるタレが又極端に辛いのです。ビールで流してもとれないのでボーイさんを呼んで水を要求しましたがその動作が又お笑いの種子になったり、馬来人の料理は辛い日本人の料理は辛くないなどやり合っているが言葉がやれぬために言いたい事も口に出ず大遣口です。我々の内の一人が余りに辛いので口に手をあててハーハーと

吹ていると婦人達や子供達迚ハーハーと云ったと真似をしながら笑い、更々喰べよ喰べよと云い且つ器用にナイフやフォークを使いこなして喰べています。子供達は皆手掴みです。

卓上の料理は半分も減らないが満腹です。未だ宴は終らぬがメナード行を急ぐと村長に話したらマア良いから座れと言う。座してバナナを喰べフインガーを使い又立とうとすると席に就けと言う。そしてダンスをやるかと云う、仲々に開けた連中です。隣村の村長だと言うトマスと言う男はメナード行きは明日に延ばし、彼の村のアエル、タンバーグに行きダンスをやろうじゃないかと誘う仕末になった。こちらはそれどころじゃないメナード行も急ぐが、ダンスなど出来る手合じゃない野暮天極る田舎者なので困っていたら主人が食後の祈りを始めたので助った。この祈りの終る迄席を立つべきではないと察した時は馴れぬこととは言へ聊か恥しい思いをした次第です。そして只の土人達など軽く考えていたのに此の文明の西洋風の生活をしている様を現実に見て、又一驚を喫した次第です。昼食代りに買っていたバナナは皆子供に進呈して、テリマカーセ、バイニヤと感謝を連発して気嫌良く見送り見送られ自動車に飛乗りメナードへ急ぎました。

七月七日　トンダノ潮畔の観光

汽船便からの来着の岸本汽船株式会社からの派遣調査員三名と枕崎からの橋口屯(枕崎造船社長)と丸谷徳兵衛氏(枕崎の人、原さんの親しい友人と承る)一行五人と吾々を加え自動車三台を列ねてトンダノ湖畔に向うことになった。当地では避暑地らしく高原に湖のあり日本で云へば箱根か軽井沢とでも云うべき所らしい話である。道路はアスファルトで自動車の乗心地は満点である。恰も日曜

にて上流連中はラケットを抱えて男女連れにてテニスに行くもあり欧人のドライブもあり、教会に行く人達も見受けた。途中で見たコンボと言う町は整然として床は高く立派であった。トンダノ湖畔に出れば一望の平原となり見渡す限りの水田で、稲の青田であり苗床もある。会憎途中豪雨となり展望十分ならず大きな瀑布は見たが遂に湖水には達せず引返した。湖畔の河流は此の地方の淡水魚の産地にて魚市場は休んでいたが子供達が二、三の川魚を売っていた。

七月八日　アンボンへ向け出帆。

午前七時半一行更に五人を加えて六十七名となりレムベ水道のビツンよりアンボンへ向け出航した。

七月九日　赤道を越ゆ。

午前九時我千代丸は赤道を越える時間である。私は船長に乞い特に舵柄を預り操船し一同は甲板に全員揃いビールで天皇陛下万歳、千代丸万歳を三唱し、乾盃してこの漁船としての稀なる遠航の壮途の成功を祈念し又喜んだ。百噸の扁舟二度目の赤道突破である。昭和四年七月五日午前九時永久に鹿児島県水産史にその記録を留むるであろう。海は清く風も凪ぎ多くの魚群を見乍らマンガロ島附近を通過。南下を続く。

七月十日　航路にて属々濃厚なる魚群に会し鮪や鰹を曳縄や角で釣り飽食せり。

七月十一日　ブル島を更に迂回して沿岸を視察し鯨の群や土人の漁業振りを見、又十二日朝アンボン南西十浬位にて大魚群を発見して一同勇気益々加わり正午アンボンに入港せり。

スール海　スール海は菲律賓諸島近海に於て最も鰹鮪の多きを認むる所にして、昭和二年度[illegible]に於て数多くの漁獲を上げたるは既に報告したる所なり、本年度往航に於ても常に流木付[illegible]又単一なる鰹群に会することと多かりき、又鮪の大型なるもの「ホロ」にて漁獲さるるを以て、鮪延縄の漁場としても価値大なるものと認むるも航行中の観察に依ることにして、今後充分なる調査研究の結果と待って次第に明かとなるべし、或はミンドロ西海面におけるものよりも好漁場となるが如しスール海に面する菲律賓諸島の沿岸には餌魚漁場の見込多かるべき所も多く、又ミンダナオ島のザンボアンガ附近は漁業上重要なる所なり。

セレベス海　セレベス海は本年度スール海と同じく僅かに往航に於て航過せるに過ぎず然れども、六月十八日午后二時五十分及三時二十分二回に亘り北緯四度四十二分東経百二十四度二十分海図に図示せる海底火山の北約四十七浬附近に於て、曳ホロ及擬餌を用ひて鰹鮪九十尾を漁獲したり、此附近は漁礁あるもの如く潮流錯綜し、島群夥しく且魚群甚濃厚なり、此の点は先年帰航の途に於て第三千代丸の同様好漁をなせる所にして有望なる漁場なり。

ボルネオ島のタワオに於ける漁業公司（鹿児島県出身折田氏経営鰹釣漁業）も本海の西部に於て漁業しつつあり、又先年セレベス島のメナード市よりボルネオ島のタラカン島に至る航路上に於て大魚群多く擬餌にて好漁をなせるも、此のセレベス海の南部にして海色の良好なるは以て有望漁区として信ずるに充分なり、此海面の何れに於ても旗魚類の回游を認むるを以て鮪及旗魚の延縄漁場として有望なりと信ず。

附ダバオ湾　菲律賓諸島の南端ミンダナオ島のセレベス海に面する所にダバオ湾あり。ダバオは従来邦人の移住し馬尼剌麻栽培地として有名にして現在約九千人の邦人あり盛に発展しつつある所なり。湾は大湾にして此のセレベス海開拓の根拠地として有望らしく考へられ陸上に如斯邦人の発展あるは魚類の需要上より見るも又諸般の交渉上にも更に近年に至りて日本郵船の南洋航路も寄港し、又馬尼剌へも汽船便ありて便利なる地位にありて日本人の此の地進出は甚有望なりと信ず。

六月十九日サンギール島タルナ港に着し諸般の入港手続を了し、先年帰国の際し倉入し置たる製造用具及伝馬船を積込二十日仝港出帆セレベス島ケマ港に二十一日着せり、爾後汽船便に依る岸本汽船会社側よりの一行を待合せる為め暫く滞在し漁業に従事せり。

六月下旬より七月上旬に於けるケマ港附近の海況及漁況。

六月二十一日より七月八日迄此附近に滞在し餌魚及鰹釣漁業に従事せり。当地は昭和二年度主要なる根拠地として好績を収めたる所なりしも当時恰も南西信風季にして海水混濁し餌魚たるべき赤鰹の漁季に入らずして漁事を見ず、漸くグサオ、キビナゴ小鰮小鰺等を漁獲し、或は土人の漁獲せるものを購入し数回出漁せり。海面に於ては前年度に劣らざる鰹群の多きと濃厚さを見る所なるも、多くは餌付不良にして此間二回に亘り四百三十三尾の漁獲を上げ土人に売却せり。

当期此近海の混濁水帯の出現に就ては、恰も南西信風季にして沿岸に於ける各河川は黄褐色の濁水を海岸に押し出し、又一には此の時季に於ける潮流は南より北に副いて流れ相当の速力を有す。此の潮流の根源地たるべきゴロンタロ方面「トミニ海湾」は浅海にして此の風波に依り惹起せらるる、

混濁水を持ち来るものの如く察せられ、此の混濁水帯の幅員は余り大ならざるが如し先年八、九、十月の頃レムベ水道に於て漁獲したる赤鰹は大群として認めず、僅かに水道中央部のセロー（鈍）に於て一寸内外のものの小群を認めたるに過ぎざりき、依て赤鰹は今期存在は認むるも大群をなして回遊する迄の成長と其の時期に達せざるものの如く察せらる其他グサオ鰯等は相当大群をなし居るも時に篝火に集ることあるも、又付かざることもあり。折角火付せるも大魚に追われ逃散する事等ありて相当困難を極めたり。

此処に最も注意を要するは此時季に於ける此附近土人の鰹漁船の行動なり。此時季に於てはケマ港を根拠として従事するものを見ず、一度びレムベ水道を北に出ずるに於て忽ちにして漁船の多きを認め、尚又メナード方面に於て鰹の好漁せられつつある事なり。果して何魚を餌として使用しつつあるやは調査の機会なかりしも主としてグサオを使用しつつあるものと察しられ、又レムベ水道内に於て良く餌魚漁獲に従事しつつあるを認めたり。セレベス島北部に於ける土民の鰹釣漁業が此の時季に於て北部及西部に集中して漁業し、然して北東信風季に代りて東部ケマ沖合に移行するのは、一に此海況に依る鰹群の餌付不良を多年の経験に依りて知り、主として此の混濁水帯を遠ざかりて漁業しつつあるものの如し、当季メナード沖合の海況に就き知る所なきも混濁水帯は及ばざるが如く、良く漁獲物を山間部落、及メナード市場に見受くるは海況良好なるを察知するに難からず即ち南西信風季の潮流はケマ沖合の漁業に不可にして、此の風向転換期より北東信風季となりて船の行動に依り、察知するを以て今後此近海に漁業せんとするものの注意すべき事柄なりと信ず。

漁業地として有望なるは昭和二年度千代丸漁業実績に就きて明らかにして論を要せざる所なり。

レムベ水道　セレベス大陸の東北端マラッカ航門に面するカラバット山「一名メナード富士」麓にレムベ島あり高さ六百呎乃至七百呎にして丘岳連立し樹木繁茂す、昭和二年度には住民なかりしも本年度に至りて沿岸の一部樹木を切開きて唐黍の栽培を為すものあり。本島とレムベ島間に狭く稍錯雑し長さ十二浬のレムベ水道を構成す中央部に礁脈を繞らせる二礁あるも両側何れも水道を為し、千噸級の汽船通航可能にして各所に土人の漁貝セロー設置せらる本水道に於ける潮流は、漲潮流は海峡を北に流れ落潮流は南に流る最狭部に於ける其速力は、大潮時二及至四節なりと云ふ（水路誌）然れども水路南方南側に於て殆んど潮流を感ぜざる所あり、主として八田網の網代として使用せり。

本水道は漁業上重要なる餌魚漁場として重要なる所に付更に其二、三を附記すべし、レムベ水道内には鰹、ソーダ鰹、平鰺、虾、鱚等大魚の回游を認むるの外餌料として適する鰯、赤鰹、鰺仔、鯖仔、グサオ（バカザコ）等の小魚族棲息するもの多く殊に八、九、十月の候此の水道内に於ける赤鰹の大群は実に濃厚なるものあり。前記せる如く本水道の南方は殆んど潮流を感ぜざる砂底の所あり、八田網の錨場とするに適し昭和二年度約五十余日本水道に於て餌魚の供給を為したるは既に報告せる所なり。対岸ビツン村に於ける砂浜は網干場として適当なるのみならず、陸上諸般の設備をなすに適し且沿岸急深にして船舶の定繋便利なり、又メナード及ケマ方面へ自動車の便開け大敷或は大謀網漁場として適する箇所多し、此種漁法に依り鰺類漁獲して延縄餌料として供給し、鰯赤鰹を漁獲して鰹餌に供給する方法も至極好績を挙げ得べきが如し。

餌用にカツオの骨抜きをするスンダ・ステラさん
（鹿児島県山川町）

いいかつお節求め

スンダ・ステラさん（インドネシア）

鹿児島県山川町にある協栄鰹節加工協同組合の工場。コンクリート張りの作業場で、五十歳前後の女性たちが、煮沸したカツオの骨抜きを黙々と続けている。近付くと、ただ一人若い女性。「デビー」の愛称でかわいがられている人気者だ。本名はスンダ・ステラさん（21）。かつお節の製造技術を習得するために平成二年十月、インドネシア・スラウェシ島のビトンからやってきた。

足に黄色の長靴、首にタオルを巻いている。「寒いから」と、せっかく着込んだウインドブレーカーのそでを、肩口までまくし上げる元気印だ。

ハリキリ娘は「インドネシアのかつお節悪い。山川のきれい、おいしい。早く作り方覚えたい」片言ながらすっかり山川弁だ。

ビトンは今、かつお節工場の建設ラッシュ。七工場がある。親類がカツオ船を持っているデビーも、小学校の用務員から転職。ビトンのかつお節工場と取引している同協同組合が、技術指導を引き受けた。

同協同組合は、インドネシアのカツオを年間四千トン輸入している。「私の国のカツオ、日本が買う。ここに来て知った。うれしい」同時に、技術の差に驚いた。「同じ魚で作るかつお節、なぜ、味違うの」

研修は、立ちっ放しで生魚切り、骨抜き、荷造りと続く。座れるのは食事、休憩の時ぐらいだが、「疲れない。仕事だから」

「山川のオバサンたち、よく仕事する。都会の日本人、日曜日も働く。かわいそう、働き過ぎね」インドネシアではそんなに働かなくても暮らしていけるという。日本人の働き過ぎが奇異に映るらしい。

技術研修に一緒に来た弟のプスン・デニーさん（20）と、寮で自炊している。和食の種類、かつお節の使い方の多さにびっくり。「インドネシアのかつお節、野菜と一緒にいためるだけ。日本、豆腐にのせ、みそ汁にも使う。みそ汁大好き。私、かつお節でラーメンのスープ作るよ」

女性らしい細やかな目で、日本人の食生活を見ている。

夏、鹿児島県開聞町のそうめん流し店に行った。「そうめん、おいしかった。でも、日本人、池の魚に投げた。あれダメ。私たち、食べ物捨てないよ。日本、ぜいたく」

先日、工場の忘年会があった。デビーは食べ残しの料理を、しっかり寮に持ち帰った。

今回の研修は平成四年二月までだった。「ビトンの工場で、山川のかつお節の作り方、皆に教える。いいかつお節作るよ」

だが、同協同組合の国沢功理事は「一人前の職人になるには、あと一回は来てもらわないといけない」と厳しい。

山川とビトンは同じ港町。人情も似ており、気に入っているよう。「山川の人、親切。町で皆、デビーと言ってくれる。たくさん友達できた。山川好き」デビーは「いいかつお節作るため、また来るよ」と、技術向上に意欲を見せた。

〈一言メッセージ〉

LAUT　PUNYAH　ALIRAN
ラウ　プニャ　アリラン

MENGALIR　JALAN
マーガレル　ジャラン

BESAR
ブサーラ

海は
世界につな
がる
大きな道

ビトン駐在を振り返って

1999／11

川口 博康

早いものでこちらに来てから四年が経とうとしています。この11月に60歳一定年一帰国ということになります。

55歳一役職定年の際、上司から三つの選択肢を与えられこれからどうするとの問いに、二一三日待って下さいと返事しておき、インドネシア行きの件で家内に一方的に了解をとるもののさすが戸惑った様子でした。

会社ではともかく私の提案した、ビトンでかつお節を作る事を了解してくれました。

どうも私にとっては役職定年ということが理解できず反発もしていたのですね。

私にとっての海外駐在とは気分転換に新しい事に夢を見たかったのです。

定年とは終身雇用を前提にした考え方で会社が定めたもの、やめる者からすれば単なる退職。しかし、多くの社長さんたちはその仕事はきついと言う、であれば社員より若い定年であって良いはず、きついきついと言いながらいつまで続けるのか楽な仕事である事の証明ではないかとついひがんだりしてしまいますね。

かつお節を食べる文化の無いところでこれを作るのですからそれも相当纏まった数量（原料ベースで10－20トン／日）をこなすことを前提に、売れる製品であることは勿論ですが、何よりも採算が合わなければなりません。

インドネシアで作った物はは安全性一衛生的に一不安があるとされどうしても二級品のレッテルを貼られているのが現状です。日本で作るものよりも良いものを作らなければマーケットは興味を示さないだろうし売れないことになってしまいます。

沢山のハンデイを持っていながらなおこの地でかつお節を作ってみたい一一何故か血が騒いだのですね。

まず「整理、整頓、後片づけ」から始まり、「時間と寸法を合わせる事」がいかに工場で物を作る時に大切かを頭をさげて理解してもらう。その為に三年かかりました。

日本人はこんなことは直ぐにできるのですが国民性なのかその工業化にむけた教育の素晴らしさなのかともかく比較になりませんでした。

出来た製品を見て「こんな真っ黒なも一堅いものを本当に日本人は食べるのですか」

魚は鮮度が勝負、早く仕事をして下さいにたいして「私たちは二食しかたべていませんそんなに怒らないで下さい」世の中は政変一社会不安一暴動が荒れ狂っている中、一瞬どきっとする返事でした。何とか三食にしてやりたいと真剣に考えました。

悪い事をしている人に対して何故怒らないのかの問いに「人を怒る事ができるのは神様だけです。私は怒る事ができません」無神論者に近い私には理解できない。神とは何か。

「上級者になれば楽をしていいんだ。」という概念、マネージメントの意味を理解してもらえない。
工場のものが限りなく盗まれてしまう。太いビニールパイプで作ったねずみ取りの器具を自分の家のトイレに使うために持って行ってしまったり、手荒い用の蛇口も数限りなく盗まれてしまう。
２００人ばかりを使った小さな工場の立ち上げでしたが思ってもみなかったハプニングの連続に正直気持ちは苛立つばかりでした。
価値観の違い、異文化の中での「技術移転」。多くの先輩が経験され教訓となっている言葉「慌てず、焦らず、諦めず」を唱える日が多くなっていました。
しかし日々のストレスの中からついでてしまう「癇癪玉」も幾度かありました。
T先輩から「ここは日本ではない。この国の中で仕事をさせてもらっている事を忘れるな」のアドバイスを頂きました。今でも有り難く思っています。
近年、すべての業界に「近代世界システム」＝欧米化ーグローバル化が叫ばれるなかで「国際化」がかっこう良く取られ勝ちであるが実際にはその異文化の中でいかに我慢して暮らしていくか、そういう中でいかに業務をこなしていくか。実際日々の生活はそんなにかっこ良いものではないと実感しました。
しかし反面こちらの皆さんから今、日本が忘れかけている事を沢山頂きました。
私の小さい時はまだ残っていた事です。懐かしかったですね。
どちらが幸せなのか。私は幸せを求めて生きていたのか。自信はありません。
仕事＝お金儲けの追求が大部分だったようです。
今日本にないものがここにはまだあります。大きなお土産を頂きました。

ＡＡ．駐在中に新しく始めた事
ａａ．まずゴルフをこちらにきて始めてやりました。今迄は単身赴任でしたので日曜日に帰って家でゆっくりが私のベストの時間であり次に最大の難関は経済的な理由。（情けない事ですが）。
ここのウエナンゴルフクラブは私のやり始めた三年前、特に日曜日は空いていました。
ここはクリスチャンが多く日曜日には教会に礼拝に行くからだとキャディ君から教えてもらいました。「あなたはもうすんだのですか」と何回も尋ねられ少々恐縮もしたりで日本の日曜日のゴルフ場とは大分違っていました。
その当時の彼らは大体素足でした。後でマネジャーから靴を履くように指示があったのですが殆どのキャディは途中で靴を脱ぎ裸足になっていました。私たちの工場でも長靴を履くように指導してから二年近くの歳月が経っています。
止まっているボールに当たらない、悩みはいよいよ最高潮に達した時、「トアン、良い女性がいる。どうか」と誘いを受けました。エッ ゴルフはジエントルマンのスポーツではなかったのか。と一瞬と惑う。「ほんとうに良い子か」「はい マニキュァしています」

こちらではマニキュァが女性の基準になり得る事をゴルフ場で教えてもらいました。
多くのお客さんと一緒にプレーさせて頂きました。今思い出してみるとご迷惑だったろうと思います。
皆さんにああしろ、こうした方が良いと沢山のアドバイスを頂きましたが分けが分からない内に帰国されたあとはまた振り出しに戻ってしまうということの繰り返しです。
どうも私の場合、スイングにしてもトップは佐藤さん、ダウンスイングは鈴木さんとギクシャクしているようです。
ここでありがたい事はプレーが非常に安くできることと、（プレー代３００円、キャデー３００円など１０００円もあれば十分です）一人でも回れる事，何時行っても直ぐにプレー出来る事、予約なんて制度はありません。私のようなど素人には有り難いところです。
６０歳以上で駐在されている方一先輩の皆さんのゴルフを通しての健康管理には勇気づけられ私のこれからの生き方に参考にさせて頂く積もりです。ほんとうに皆さん元気いいですね。本社のＫ部長から「あなたの年で始めてそんなに上達するものではありませんよ。ハンディはスタート年齢／２が良いところ」と慰められたこともありました。

ｂｂ．パソコンを購入しインターネットを始めた事。
世の中、インターネット時代といわれて久しい。なかなか通常のしごとの合間にこれをマスターするのには時間がなかったためこの機会に挑戦しようと思い持ち込みました。
一式５０万円ほど、ボーナスをつぎ込みました。セットアップからプロバイダー探し、当時は誰も横の連絡が無くほんとうに冷や汗をかきました。解説書やヘルプではピンとこなく正直えらいもの買い込んでしまったと後悔する日が続きました。何とかプロバイダーのＷＡＳＡＮＴＡＲＡを探し出し、接続一インターネットが出来た時は嬉しかったですね。
女中さんが掃除の途中にはずしてしまったプラグを間違えて２００Ｖに差込、アダプタは勿論本体の一部も損傷、これにはまいりました。しかし、たいしたものですこちらで修理ができたのです。何でも買い換える消費文化が染み付いてそれに慣れてしまった私には良い刺激になり、つい忘れてしまっていた事を思い出した感じでした。
こちらの方の技術をすっかり見直して、大いに感謝したものです。
今ではワンマンオフィスではなくてはならない道具となっています。
日本人会の皆さんとの連絡は勿論、特に忘れられないのは一昨年から始まった金融危機、それに続く政治一経済混乱 社会不安一暴動 国外退去と言葉も良く分からない片田舎に居る私にとりまして只ひとつ頼りにしていた情報源は「よろずインドネシア」のＨ．Ｐ．でした。ＮＮＡのニュースもありがたかったですね。
メールを通していろいろな方達と知り合いになり片田舎での駐在生活が違ったものとなりました。

ＢＢ．病気

最初の年に下痢で一晩中トイレにいたことがあります。生まれて始めての経験でした。凄かったですね。便器を抱えて動けなかった。それ以来お酒の飲みすぎの時だけです。最も恐かった事は今迄経験もしたことのない高熱（４０度以上）が出た時でした。医者に診てもらったらデマンブルタラという病名を頂く。白血球が少なくなっているから間違いないと。恐かったですね。意味が分からなかったのですから。何とかインターネットに噛り付いて探し出し病名の内容が分かった時はほんとうに嬉しかったですよ。此れ以来インターネットとは凄いものだと実感し本気で取り組みました。勿論ブックマークしています。

ＣＣ．仕事

今月で６０歳定年を迎えました。４０歳で途中入社。魚を獲る事にしか生きがいを感じなかった人生から二度の会社倒産を経て物を売る会社に入りました。当時の船には電話が無かったため慣れるまで昼休みにはよく電話番をしたことを懐かしく思い出します。入社の条件として「同じ社内で人かやっている事をやってはいけない」という事でした。何とか物を売る事に少しずつ面白味を覚えてきました。

日本では明治の末から大正の初めと昭和１６－１７年頃「南進論」がはやり、当時の面影を今でも各地でみる事が出来ます。私の故郷にもその面影が今に残っています。私のなかにも北よりも南に何となく血が騒ぐものがありました。海外進出というロマン的行為を美化するあまり、それがどれほど底知れぬ政治的外交的問題を伴うかは勿論の事ですがそれ以上に異文化の中での生活という実感しなければ分からない事を少し軽く考えすぎていたのではないでしょうか。これは今にまで一部には引き継がれ多くの犠牲者をだしている事実は今後の課題といえると思います。南方関与の担い手の大部分は沖縄県人であった事実、私の関係する水産もそうです。

昭和以降、東南アジア各地にどんな人たちが定着したのか。当時の記録をみるとおもしろい。シンガポールでもジャカルタでも女性が断然多い－これは娘女軍（ろうしぐん＝娼婦、芸人）であったといわれている。福沢諭吉は「人民の移住と娼婦の出稼ぎ」で娼婦の海外への出稼ぎは日本の「経世上必要なら可」といっている。「権利」と「義務」の概念を日本に持ち込んだ福沢でさえこう言っています。時代を感じますね。あれから１００年、今では「ジャパ行きさん」と反対になってしまっています。南洋各地の日本人社会は初めは先住者優位という暗黙の了解があったようでが、時代が経つに連れ（ダタン族－会社人間－上流）優位の傾向が定着し階級社会がけいせいされていったようです。在留邦人社会は、日本人の数が増えれば増えるほど「日本化」していき

在留邦人がある数に達すると「日本人会」が組織されてきたようです。
以上が戦前の傾向だったようです。

戦後、日本と東南アジアとの関わりは賠償を中心にした政府外交と大企業の進出という国策的関係だけになってしまい、在留日本人社会は下町族抜きの会社族社会になってしまっています。昭和２７年政府は東南アジア外交を国策としてスタート新しく経済外交としました。在留邦人の全てが現地に３－５年住めば日本に帰って行く大企業一会社人間ばかりになり個人企業やからゆきさんのような日本人は居なくなってしまった。これが昭和５０年頃までの構図であったと思います。
私も「北スラウェシ日本人会」の立ち上げに参加した一人として今後の会の発展を期待したいと楽しみにしております。３０人ばかりのコジンマリした楽しいクラブでした。
仕事の合間にもようされた数々の行事は良い息抜きとなりました。

特に東南アジアでビジネスを展開するなかで注意しなければならないことは、成功例は殆ど国策一大企業であることです。バックは国なのです。
これは競争のあるビジネスではありません。
国策のなかに取り組まれない民間の一中小企業がビジネスを継続するにはあまりにリスクが多すぎるように思います。また戦後から続いている国策的投資がこの国をおかしくしてしまっているのではないかとの疑問も持たざるを得ません。今回の大手各社の投資失敗も、国策としての延長線上での安易な発想での投資の失敗ではなかったか。正常な競争からの仕事ではなかったように思われます。今迄は国策と利権をうまく取り入れたところが成功していたように思いますが、これからもし、この関係がなくなったときこの国のビジネスも大きく変わるでしょう。しかし今後も国策としてこの国えの援助は続くでしょう。とすれば利権や癒着も無くならないでしょう。一部の人たちが言っている「ＯＤＡ－がこの国を駄目にしている」もうなずけます。
私の関係している水産関係だけでも極一部の方を除いて成功例を知りません。
日本人の行動パターンとして数年で帰国しています。華僑は一生です。この差は大きいと思います。事業を継続するためには現在の行動様式を見直す必要があるのではないでしょうか。

私の場合もこの４年間の駐在が終わりほっとしたと同時に里心がついてしまいました。
初期の夢は大体見終えた感じです。
心残りははたしてどこまでこちらの方達が事業継続に情熱を燃やしてくれるのでしょうか。
正直まだ確信は持てません。

７０－８０年前にこの地でかつお節を始めて作った先輩の意気に感じその真似事に挑戦してみたわけですが結果は数年後まで継続できるかどうか。
ビジネスという荒波に耐えて継続出来れば私の夢もまずまずだったかと思います。

当時の先輩は沢山の子孫をこの地に残しています。一部の方達とはお会いできました。
工場は第二次世界大戦で破壊され跡地は全部この国に摂取され継続は出来ていません。
先輩たちのように私は子孫を残せませんでしたが５－１０年後この地にかつお節工場が稼動していることを楽しみにしたいと思います。
駐在中は沢山の方達にお世話になりました。
ほんとうに有り難う御座いました。皆様のご多幸お祈りいたします。

場所が違えばものも違う

PT. PRIMA KASHINDO 伊藤 澄

私はおととしの１２月にインドネシアに来てから１年と７ヶ月くらいイリアンジャ州のソロンの方で働いていました。ビトンに来たのは今年の８月です。内田（忠）さんと大森さんにはよく世話になっています。

まず、ここに来て思ったことは売っているものの種類と値段があまりにも違うことです。話には聞いたことがありましたが、実際にスーパー等に買い物に行って実感しました。例えば、同じお菓子の値段が１．５倍～２倍くらいソロンの方が高いです。さらに、ビールの値段が同じ場合でも量がビトンの方が２倍多いと思いました。ちなみに、ビトンとマナドではお菓子とビールの値段が多少マナドの方が安い気がしました。

次に、売っているものの種類の多さに驚かされました。特に、マナドで買い物をしてハムや赤ピーマンや黄色ピーマンが売っていることには感動してしまいました。これはソロンではお目にかかったことがありませんでした。また、調味料やお菓子の種類の多さには驚かされました。イタリア製のお菓子にお目にかかるとはおもっていませんでした。日本製の調味料も売っていることがありますが、これはソロンでは見かけたことがなければ売っている話も聞いたことがありませんでした。ただし、一旦売り切れたものは次に新しく入るまでに時間がかかるのはソロンでもマナドでもあるようで、インドネシアはどこでもそういうものかなと思いました。

実は、ソロンという街はショピング街というわけでなく飲み屋の多い街です。ビトンやマナドの飲み屋のことは内田（忠）さんの方が相当詳しく、私はビトンやマナドの方はよく分かりませんが、話では飲み屋の相場はソロンの方が約２倍ということだそうです。ちなみに、ビツンの観光案内やそこに書かれているコメント等は私の名前が書かれているようですが、これはすべて内田（忠）さんのことを書いているのであってそこのところを間違えないで下さい。

私がソロンの街に行く機会があるのは２週間に１回位でした。普段はイリアンジャの先端にあるバタンタという島にいました。そこで真珠養殖をしています。バタンタという島はまわりがジャングルで小さな村が２箇所位あるだけで店などというものはありません。休日でも養殖の基地をあけるわけには行かず日本人スタッフが交代でソロンに行っています。そこでは生活に必要なものを買いに行ったり、先輩たちと夜飲み屋に行ったりしていました。私は飲むだけですが・・・。飲み屋の女の子は大きく分けてジャワ人とマナド人、ウジュンパンダン人が働いているという話でした。ソロンは物価がインドネシアで１，２位を争うくらい高いそうで、その分給料の相場も高いようでそのためにわざわざ女の子たちが働きにくるという話を先輩たちから聞きました。

私がソロンからビトンに変わった理由は、突然のことでしたが、今年の７月に日本人ス

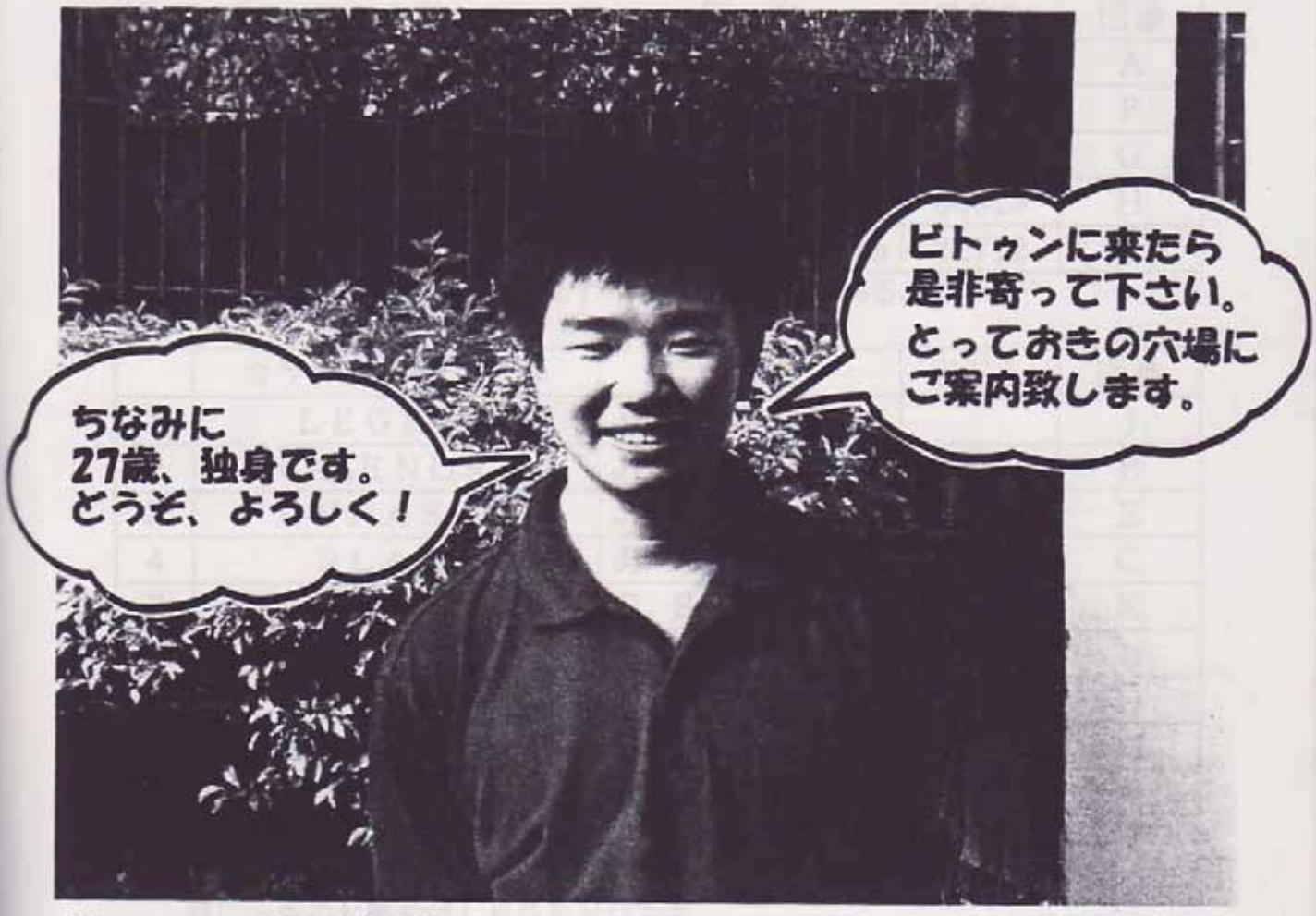
タッフが一人辞めまして急きょ私が入ることになりました。仕事も普段は海上の仕事で新しく移ったところの仕事が貝を卵から孵化させて稚貝まで育てる採苗の仕事でだいぶ変わりました。今の仕事は水槽で飼っているので目が離せず、休みもなかなか取れないけれどここビトンやマナドはものが安くてけっこうそろっているので生活するのには便利でいいと思います。

お粗末な文章でしたがこの紙面を借りて一言お礼を申し上げます。

前田会長、川口（博）さんはじめ先輩諸氏には新参者の私にいろいろ親身にサポートを頂きありがとうございます。

今後ともよろしくお願いいたします。

伊藤　澄



撮影日：1999年12月27日　　（コメントは編集部）

ビツン市内観光案内

伊藤　澄

主要店リスト　コメントは作者の私感によるものです。御参考まで…

	HOTEL（ホテル）	所　在	TEL	図番
1	KUNKUGAN RESORT	Jl. Makawiday	32504	A
2	NALENDRA HOTEL	Jl. Samuel	32071	B
3	PLAZA HOTEL	Jl. Yos Sudarso	30180	C
4	PHONIX HOTEL	Jl. Yos Sudarso	30255	D
5	DYNASTY HOTEL	Jl. Yos Sudarso	30111	E

＊KUNKUGANは、リゾートホテルであるため、市内からは少し離れた場所に位置している。

	レストラン	所　在	TEL	図番
1	KUNKUGAN RESORT	Jl. Makawiday	32504	A
2	SWADAYA	Jl. Yos Sudarso		F
3	PARENBANG	Jl. Samuel	30576	G
4	PARIS	Jl. S. Ratulangi	30028	H
5	HAWAII	Jl. Yos Sudarso	21712	I

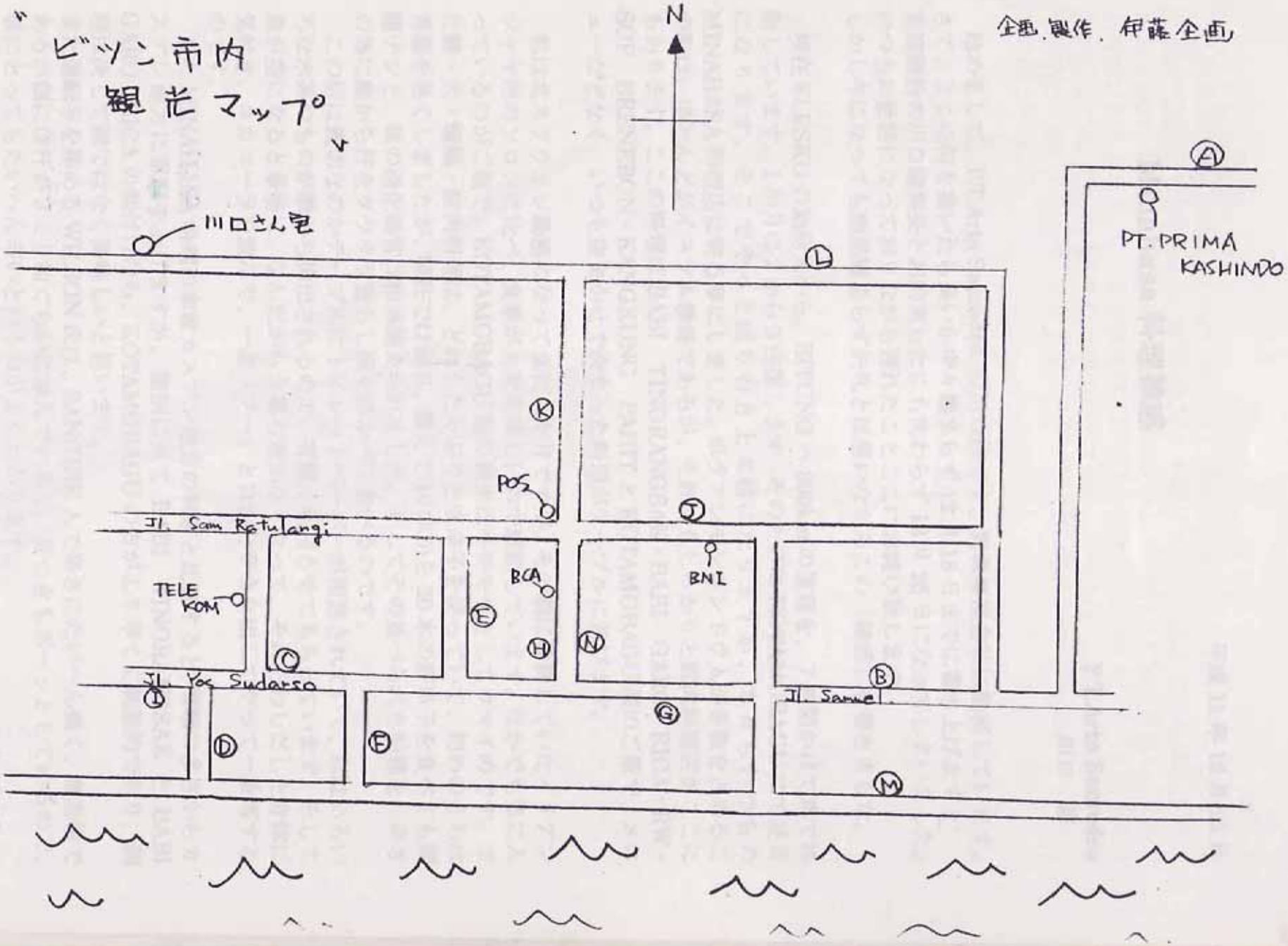
＊KUNKUGANのMENUはすべて米ドル建てである。

	カラオケ／ディスコ	所　在	TEL	図番
1	LEGEND	Jl. S. Ratulangi		J
2	NALENDRA	Jl. Samuel	32071	B
3	DYNASTY	Jl. Yos Sudarso	30111	E
4	PLAZA	Jl. Yos Sudarso	30108	C
5	KARTIKA	Jl. S. Ratulangi	30060	K
6	SITOU	Jl.		L
7	PHONIX	Jl. Yos Sudarso	30255	D
8	SEA MEN	Jl. Yos Sudarso	31665	M
9	PERAUS	Jl. S. Ratulangi		N

＊基本的に毎晩外出している小生（不肖伊藤）にとっては勝手知ったる庭のようなものです。
特に一番のお薦めはLEGENDです。
ほぼ毎日出勤しているので、会ったときには一声かけてください。
ちなみに日本での出没場所は名古屋にある“じゃんじゃん”です。
“じゃんじゃん”行こうじゃん。じゃんじゃん。

ビツン市内 観光マップ

企画.製作. 伊藤企画



平成 11 年 12 月 25 日

Minahasa 料理雑感

P.T.Arta Samudra
川口　修

始めまして、P.T.Arta Samudra の川口修です。真珠養殖会社に勤務しています。さて、ここに何を書いたら良いか中々纏まらず 12 月 18 日までに書き上げますと東海澱粉の川口編集長とお約束したにも拘わらず 12 月 25 日になってしまいました。いつもお世話になっておりながら遅れたことここにお詫び致します。
しかし今になっても結局纏まらず失礼とは思いながらこの「雑感」を書きました。

現在 FLESKO の勤務先から、BITUNG へ 300km の道程を、7 時間かけて車で移動しています。1 か月に 2 から 3 往復します。そのたびに KOTAMOBAGU にて昼食になります。そこでやっと成り行き上本題になりますが、本日もいつもの MINAHASA 料理店に寄る事にしました。ボラアンモンゴンドウ人が多数を占めるこの町は、ほとんどがイスラム教徒であるが、それでもしっかりと豚肉料理店がここにもあります。ここの料理は BABI　TINORANGSAK・BABI　GARO　RICA・RW・SOP　BRENEBON・KANGKUNG　PAHIT と KOTAMOBAGU 産のご飯で、メニューなどなく、いつも店まかせで決まった料理がテーブルに並びます。

私は北スラウェシ勤務になってまだ 7 か月ですが、その前に勤務していたイリアンジャヤ州のソロンに比べ、食事が大変美味しいので感動しています。なかでも気に入っているのがご飯で、KOTAMOBAGU 産の新米はモチモチとしてウマイのです。また鯉・犬・蝙蝠・豚肉料理は、どれもたっぷりと唐辛子を使っていて、初めのうちは胃腸を悪くしましたが、現在では毎日、数えて 10 本から 20 本の唐辛子を食べても問題ナシと。私の消化器官は相当鍛えられました。そしてその並べられた料理を、辛さの為に顔から汗をタラタラ垂らし涙を浮かべて食べるのです。

この店は親切なのかテーブルにトイレットペーパーが用意されていて、私はいろいろな水系のものが顔から排出されるので、有難く利用させてもらっています。そして皿が空になると最後に、なんだかもう落ち着かなくなって、そわそわしだした身体に気付き、コカコーラを飲んで、一息「フー」と口から辛さを出してやって一段落するのです。

また MINAHASA 料理の本家カスアン地方の料理と比較すると、種類の多さからカスアン地方に軍配を上げますが、個別に見て BABI　TINORANGSAK と BABI GARO　RICA の味付けなら、KOTAMOBAGU の方がより辛くて刺激的であり、調理は決して雑ではなく美味しいと思います。
また運転手を務める WILSON 氏は、SANGIHE 人で辛さにたいへん強く、無表情であるが額には汗が 3 ミリ粒ぐらいに滲んでいるし，目つきもボーッとしているので、彼にとってもたいへん辛いというのがよくわかります。

この北スラウェシ勤務になってから、辛い料理を今まで以上に食べるようになりました。とは言ってもほとんど MINAHASA 料理ばかりで、他の SANGIHE 料理・BOLAANG MONGONDOW 料理・GORONTALO 料理はまだ知りません。それぞれ特徴があるようですが、MINAHASA 料理ほど強烈で、はっきりとしているものはないようです。また MANADO で有名なブブールメナードは、この４種族地域の全てに共通な料理であります。よって北スラウェシ料理の代表格はブブールメナードになるのだと思います。

暑いこの地方で、私にとって地元料理での食生活は、日本食風料理よりも食が進むし、最高に気に入っています。ただし辛い料理はゆっくりと吟味しながら食べる，とは行きません。「ガツガツッ」と素早く終わってしまい、楽しみの時間が少ないので残念に思います。

ちなみに朝食の Best１は、カスピーにダブダブを付けて(ダブダブとは唐辛子とトマトとパワンメラを塩と椰子油で調理した辛いソース)、熱い KOPI KOTAMOBAGU を飲んで、朝は『カーッ』と目を覚まして仕事に入るのが、作業場での１日の始まりに、良い流れであると感じています。

コタモバグ市内にある巨大な戦士の像　（編集部）

スラウェシだより（5）

動き始めた地方分権化

松井　和久

スハルトの時代が終わって一年余が過ぎた。目に見える変化が起こっている一方、全く変わらない部分もあると感じられる。そうしたなか、中央と地方との関係に変化の兆しが現れてきた。もしかすると、中央集権という従来のインドネシアのイメージが抜本的に変わるかもしれない・・・。今年四月に成立した地方政府法（法律第二二号）及び中央地方財政均衡法（法律第二五号）はそんな期待を抱かせる。

●ウィラヤ重視からダエラ重視へ

インドネシアの地方行政における地域概念には、「ダエラ」（Daerah）と「ウィラヤ」（Wilayah）の二つがある。前者が基本的に地方自治の行なわれる地域を指すのに対し、後者は中央政府の機能を代理的に果たす行政地域として一般に認識されている。

従来の地方行政では、ダエラは第一級地方自治体（州）及び第二級地方自治体（県／市）とされる一方、ウィラヤは州、県／市、郡（Kecamatan）に該当した。しかも県・市は州に、郡は県／市にそれぞれ従属する形でウィラヤが構成されていた。

今回の地方政府法では、ダエラは従来通り州と県／市であるものの、ウィラヤと見なされるのは州のみとなり、しかも旧来のヒエラルキー構造が廃止された。すなわち、州と県／市は同格となり、州は複数の県／市にまたがる事項をもっぱら担当する。

末端の行政機構であるデサ（村）は郡に従属する傾向が近年強まっていたが、新法では自治組織としてのデサの機能が明確化された。すなわち、デサではその土地の慣習法に則った形での自治が認められた。またデサという名称はジャワ起源であるため、地方の土地にあったデサ以外の別称（ヌグリやカンポンなど）の使用が認められた。

このように、従来の中央集権というイメージはウィラヤ概念がダエラ概念より遥かに強かったことに起因するが、それが大幅に変化する可能性がうかがえる。

●権限の分散

従来の地方首長間の責任関係は下から上への垂直関係であった。すなわち、村長は郡長に、郡長は県知事／市長に、県知事／市長は州知事に、州知事は大統領（内務大臣）に対し責任を持つ関係であったが、これが事実上なくなった（図を参照）。

基本的には、地方における行政と立法の分離が明確化され、行政の長である地方首長は立法機関である地方議会に対して責任を持つことになった。ただし、ウィラヤ概念の残る州では、州知事は地方首長と中央政府の名代という二面性を持つため、州議会と大統領の双方に対し責任を持つ。

州知事（県知事／市長）の選出方法も変わった。これまでは州（県／市）議会と内務大臣（州知事）との間で予め相談したうえで候補者を三～五人挙げ、議会のなかで絞った最低二人を大統領（内務大臣）に提出、大統領（内務大臣）は、州（県／市）議会での得票結果に関係なく、最低二人の候補者のうち一人を任命していた。

それが新法では、議会内に選挙委員会を設け、同委員会が各会派から挙げられた候補者の資格審査を行なう。州知事（県知事／市長）候補は同副首長候補とのペアで候補となる。次に議会本会議にて各会派が自前の候補に関して説明演説を行なった後、各正副首長候補は議会で自らの政権構想を発表、議員との間で質疑応答を行なう。選出は協議ないし投票による。ダエラの長である県知事／市長はこの時点で決定するが、ウィラヤの長でもある州知事は、さらに大統領との同意を経て決定される。

地方首長はこれまで一度選ばれると任期五年間（再選は一回のみ）は事実上安泰だったが、新法の実施によりそれも危うくなった。たとえば、地方首長は年度末に地方議会において実施責任演説を行なうが、その内容が二回続けて地方議会に拒否され

た場合、地方議会は大統領に対して地方首長の罷免を提案できるようになった。権力の上に胡座をかく地方首長が任期途中で解職される可能性が現実化したのである。

●地方財源の強化

地方分権化を実施していくためには、行政上の分権化が進むのと同時にその裏づけとなる財政上の地方分権化も進めていく必要がある。とくに、地方における財政収入の強化が不可欠である。従来、とくに石油などの天然資源の豊かな地方には、「中央に収奪されるばかりで地方への還元が少ない」という不満が根強かった。地方政府法と時を同じくして成立した中央地方財政均衡法は、この不満の解消を狙っている。

新法では、地方政府の財源の種類を独自財源、均衡資金、借款、その他と定めた。従来は補助金を人口比などでばら撒いてきたが、それが均衡資金に代わる形になる。

均衡資金は、土地建物税や天然資源からの収入の地方分、一般配分金、特別配分金の三つに分けられる。まず、土地建物税の九割、土地建物権利取得料の八割は地方に分与され、それ以外は中央が取るが、中央分のすべてが県／市へ再配分される。次に林業、鉱業、水産業の天然資源からの収入の八割はその天然資源が産する地方に分与されるが、原油の場合は一五%、天然ガスの場合は三〇%が当該地方に分与される。

一般配分金は、中央政府による国家歳入の最低二五%を充て、そのうちの一〇%を州へ、九〇%を県／市へ配分する。どの地方に一般配分金をどれだけ配分するかは、各地域の資金需要や潜在性を数値化してウェイトをつけて勘案する。他方、特別配分金は、一般配分金では賄えない特定の需要を満たすために地方を特定して配分される。特別配分金の原資の一部は緑化基金（四割は当該地方、六割は中央へ配分）である。

新法により、資源の豊かな地方は従来以上の財源に恵まれる可能性が高まる一方、資源の乏しい地方ではこれまでよりも厳しい財政状況に直面する可能性がある。

●地方の対応

中央政府は地方分権化に関する上記二法の内容を周知させるため、地方に担当者を送って内容説明会を開いており、当地スラウェシ四州でも様々に実施されている。

地方分権化の今後の進展については、以下の諸点を注視していく必要があろう。

第一に、地方での人材の問題である。過去三〇年以上にわたり上意下達に慣らされてきた地方行政官（とくに県／市レベル）は、自前で考え行動する動機を持たなかった。任せるといわれても何をしていいのか分からない状態が現出するだろう。スリム化した中央政府から行政官が地方へ配置されることになるだろうが、地方行政官の政策立案実施能力の向上が急務である。

第二に、権限が強化された県知事／市長が各地方で政治ボス化する可能性である。自らの政治基盤を強化するため、隣県／市への配慮を欠いた地域エゴが露出し、それが相互にぶつかる恐れがある。地域間の連携や協力を強めて、こうした地域エゴを抑え、調整していくことが求められる。

そして第三に、次期新政権がハビビ政権でない場合には新法が改訂される、という観測である。現政権が新法を性急に成立させた印象が拭えないからである。しかも新法の素案は非ジャワ・グループが中心になって作成した。こうした観測が地方レベルでの新法の浸透を鈍らせる可能性がある。

このままいけば、二つの新法は、二年間の移行期間を経て、二〇〇一年四月から完全実施の予定である。地方分権化の必要性は広範に了解されているが、インドネシアが中央集権というイメージを払拭するにはまだ時間と根気強い努力が必要である。日本だって地方分権化の途上なのである。

==========
MATSUI Kazuhisa
Jl. Dg. Tompo No. 37/43, Makassar, INDONESIA
Hand Phone: +62-811-41-5761
E-Mail: matsui@upandang.wasantara.net.id
==========

スラウェシだより　（6）

古着で潤う島：東南スラウェシ州ワンギワンギ島

松井　和久

一九九九年五月初め、東南スラウェシ州ブトン島において、アンボンからのブトン人避難民の状況を視察した様子はすでに報告した（詳細は本誌七月号掲載の拙稿「スラウェシだより（三）『忘れられた避難民―アンボンからのブトン人―』」を参照）。

その際、東南スラウェシ州全体も経済危機の影響を受けたが、例外的に危機の影響を殆ど受けていない場所が二つあると聞いた。すなわち、カカオ輸出で潤うコラカ県（州西部のボネ湾沿い）と、ブトン島の東側に浮かぶワンギワンギ島である。一体ワンギワンギ島には何があるのか。それを知りたくてブトン島から船で渡ってみた。

●古着売買が経済活動の中心

ワンギワンギ島へはブトン島の中心地バウバウから乗合でブトン島東部のラサリム村まで約二時間乗合に揺られ、同村の乗合ターミナルから埠頭までオジェック（バイクの後ろに乗るタクシーの一種）に乗り、そこから乗船して約二時間で到着する。

ワンギワンギ島は、ブトン島の南東に連なる鍛冶屋列島（ワカトビ列島）の最もブトン島寄りに位置し、面積わずか四四八平方キロメートル、人口は約四万人の小さな島である。労働人口の約五一％は農業だが、所得構成では労働人口比で一六・三％の商業・サービス業の比率が最大となる。

この小さな島の中心地ワンチ地区南部の一角に巨大な中古品マーケットがあった（当地では中古品を通常RB＝エルベーと称す）。その中心は古着である。外見は普通のマーケットだが、中に入ると、ありとあらゆる種類の古着を並べてかけた小屋がどこまでもどこまでも続いている。ここで古着を商うのは一〇〇人以上の女性商人であり、彼女らは客が来るのをひたすら待つ。なかには、古着のゴムを入れ替えたり、綻びを繕ったりしている女性たちもいた。

これらの古着は、ワンギワンギ島在住のブトン人商人がシンガポールやマレーシア領のタワウ（ボルネオ島の東部）から一度に大量に買い付けてきたものである。ワンギワンギ島のブトン人は、同じブトン人でもブトン島のブトン人とは違い、航海術に秀でていると昔から評されているのだ。

ブトン人商人は、買い付けてきた古着を自宅に大量に保管しており、古着マーケットの女性商人は彼らから古着を購入している。ある女性商人によると、支払は出来高払いで、売れ残りは返品可能だという。

●古着を買いに来る人々

古着マーケットには、東南スラウェシ州の州都クンダリ、南スラウェシ州の州都ウジュンパンダン、マルク州の州都アンボン、イリアン・ジャヤ州など各地から商人が古着を買いにやってくる。ワンギワンギ島は、インドネシア東部地域で流通する古着の一大集積センターの様相を呈している。もちろん、島内の住民も、衣類はこの古着マーケットですべて調達している。

東南スラウェシ州政府やブトン県政府の役人が視察でワンギワンギ島を訪れた際には、この古着マーケットで必ず買い物をしていくという。また密輸品を取り締まるはずの警察官もまた古着を買っていく。

古着マーケットにやってくる買い付け商人は、売られている古着を全部まとめて買っていくほど大量買いしていく。古着マーケットの女性商人は、一ヶ月に一回しか買い付け商人が現れなくても、ただ客が来るのを待っているだけで十分に商売をやっていけるのである。これら女性商人の多くは以前普通の主婦であったが、収入増の機会ととらえ、古着のストックを持つブトン人商人にかけあって商売を始めたという。

これらの古着は、ラベルやデザインから見る限り韓国、日本、台湾などから流れてきた夏物である。これら諸国の古着がスラウェシをはじめとするインドネシア東部地

域で大量に流通し、経済危機に喘ぐ同地域の人々に廉価で提供されていたのである。
この古着マーケットでは、古着以外に中古オートバイ、中古家電製品なども売買されている。これらもまた、外国からブトン人商人によって運びこまれたものである。

●豊かなバジャウ族集落

一方、ワンギワンギ島のバジャウ族の集落は、他の地域、たとえばブトン島のそれに比べると遥かに裕福に見えた。ワンギワンギ島への渡航地であるラサリム村でみたバジャウ族の集落ではまだ水上生活をしており、家の作りもずっと質素であった。

筆者が訪れたワンチ地区南部・南モラ村にあるバジャウ族の集落内の通路は、狭い木で渡してあるのではなく、セメントで固められた立派な通路である。村長によると、カンプン改善プロジェクトが入ったということである。集落内にはスピードボートを何台も持つバジャウ族の商人がおり、またハジの称号を持つバジャウ族もいる。集落内を歩くと、パラボラ・アンテナを立てた立派な家が何軒もある。彼らのなかには前述の古着を買い付けている者もいる。

バジャウ族の商人は、同じバジャウ族の漁民に捕獲させたクラブやスヌなどの鮮魚を自宅近くの生簀に放し、状況を見て沖合いの船(香港や台湾から来て洋上で取引する)などに売るほか、ナマコ、フカヒレ、海がめ、ロブスターなどをブトン島のバウバウやバリ島から来る商人に売っている。

●古着好況の陰で

このように、ワンギワンギ島の経済活動が、たとえ古着などの密輸品を媒体として活発化しているとしても、その影響は地域経済の好循環を生み出している。郡政府は「ワンギワンギ島には失業者がいない」と断言していた。小さな島にもかかわらず有力銀行の支店が三店舗あることは、この島で一定の資金が回っていることを示す。

しかしその一方、ワンギワンギ島北部の漁村は、古着売買や海産物交易で潤う中心部ワンチ地区に比べると遥かに貧しい佇まいである。古着好況の陰で、島内の貧富の格差問題は内在したままになっている。また、島の中央部は森林伐採の影響で広範囲にわたって雑草が生い茂っていた。住民が薪をとるために森林を伐採したためであるが、森林の再生には相当の時間がかかりそうである。あまり目立たないが、離島でも森林伐採の問題は予想以上のスピードで進んでいるのを目の当たりにした。

●広まる古着売買

古着で潤う島、ワンギワンギ島を後にしてウジュンパンダンへ戻って数ヶ月、ウジュンパンダン市内のあちこちに古着を扱う店が急に増え出したことに気がついた。

たとえば、市中心部パワカラエン通りの中古車ディーラー横の古着屋は、今では店舗面積が三倍となり、道の向こう側にまで拡張した。自宅近くの路上にも古着を並べた小屋が現れた。口コミで知って商人にかけあい、古着を分けてもらって商売をする人が増えている様子である。古着売買の範囲はここウジュンパンダンに留まらず、スラウェシ各地に広がりを見せている。

経済危機の以前から、フィリピン南部やカリマンタン東部経由で南スラウェシ州のパレパレを通り、東南スラウェシ州のワンギワンギ島を経て、マルク州アンボンに至る古着の密輸ルートがあるといわれた。南スラウェシ沖の島々では、マカッサル海峡を渡って、古着を直接東マレーシアから買い付けることが茶飯である。こうした古着交易のなかに、国境のなかった昔からのブギス・マカッサル人やブトン人の経済活動のダイナミズムを見る思いがする。

国際的な古着の「リサイクル」が新たな事業機会を提供し、それがミクロレベルでの地域経済に活力を与えていたのである。

==========
MATSUI Kazuhisa
Jl. Dg. Tompo No. 37/43, Makassar, INDONESIA
Hand Phone: +62-811-41-5761
E-Mail: matsui@upandang.wasantara.net.id
==========

辺境に「楽園」があった・・・

サンギヘ・タラウド諸島にて（1）

松井　和久

一九九九年八月、北スラウェシ州開発企画局の誘いを受け、スラウェシ島とフィリピン領ミンダナオ島の間に浮かぶサンギヘ・タラウド諸島を約一〇日間周ってきた。
同諸島は大小一二四の島々からなり、行政上は北スラウェシ州サンギヘ・タラウド（簡略化してサタルとも称す）県を形成する。
サンギヘ・タラウドと併称されているが、サンギヘ諸島とタラウド諸島では趣がかなり異なるし、各々の独自意識も高い。
北スラウェシ州の州都マナドで学ぶタラウド出身の学生らが「タラウド分離独立」を叫んだことがあったし、近い将来、サンギヘ県とタラウド県へ分割される予定である。

●限られる交通アクセス

サンギヘ・タラウド諸島への交通アクセスは限られる。州都マナドからサンギヘ諸島へは週三便の夜行便と不定期の高速艇（一九九九年七月より運行）があり比較的頻繁だ。また、マナドからタラウド諸島へは週二便（うち直行一便、サンギヘ経由が一便）である。マナドから大サンギヘ島にある県都タフナまで夜行便で約九時間（高速艇で約四時間）、マナドからタラウド諸島のサリバブ島・リルン（タラウドの経済の中心地）まで直行で約一四時間かかる。

他方、リルンと県都タフナの間は船が週一便しかない。同じ県内のサンギヘとタラウドは、むしろ別々に州都マナドと直結している印象を受けた。かつてマナドからサンギヘを経てタラウドへ至る定期航空路があったが、採算が採れず廃止となった。このほか、より辺境の島々を不定期連絡貨客船が二週間に一回のペースで周遊する。

当然、サンギヘ・タラウド諸島への消費物資はこうした限られた交通アクセスを通じて多くは州都マナドから運ばれる。船の中は様々な運搬物資で溢れ、足の踏み場もないほどである。
サンギヘ・タラウド諸島の海域は六～九月頃を除いてかなり荒れるが、船が欠航になることはほとんどない。

交通アクセスの困難により、州都マナドの人々が持つサンギヘ・タラウド諸島の「辺境性」のイメージは増幅される。だからこそ北スラウェシ州開発企画局の友人たちも「遅れた」サンギヘ・タラウド諸島の開発を重要視したのだろう。しかし今回の見聞で得た印象はやや異なっていた。

●「楽園」と呼ばれたタラウド

サンギヘ・タラウド諸島の北東部に位置するタラウドは、以前は「ポロディサ」と呼ばれていた。ポロディサはパラダイス、すなわち「楽園」に通じる。大航海時代にこの地で西欧人が温かく迎え入れられたことから、スペインやポルトガルが平和な天国のような場所と思い、ポロディサと名づけたという説がある。

また、女神の子孫といわれる人物の名前がポロディサだったことに由来するという説、オランダ統治時代に「斬って（ポロ）やっつける（ディソ）」という意味の現地語に由来するという説、などある。ポロディサ二世は、寄港したマゼラン船隊から航海術を学んだという。

一八五九年にオランダ人ミッションがサリバブ島に到着し、オランダによる統治が開始されたが、その後この海域の領有権を巡ってアメリカとオランダが争った。一九二六年にパルマス協定（パルマスとはタラウド諸島で最もフィリピンに近い位置にあるミヤンガス島の旧名）が締結され、正式にオランダ領に入った。言語上タラウド語はオーストラロネシア語圏に属し、フィリピン領ミンダナオの言語とは区別される。

タラウド諸島はカラケラン島、サリバブ島、カバルアン島の三つの大島とその周辺に広がる小さな島々からなる。諸島内には小さな地域センターがいくつもあり、なかでも県知事補佐オフィスのあるカランケラン島のベオは行政の中心であり、サリバブ島のリルンは経済の中心である。このため新設されるタラウド県の県庁所在地をどこにするかが最大の関心事となっている。

●フィリピン漁船の侵入

タラウド諸島では、地元漁民による伝統的な零細漁業と近代的なフィリピン漁船の領域への侵入が大きな問題と捉えられていた。地元政府関係者は、口をそろえて漁業の近代化の必要性を説いた。しかし、これについては、域内経済から見た水産物への需要を考慮する必要があるだろう。

サンギヘ・タラウド県の人口はせいぜい三〇万人程度であり、都市化や集中が進んでいないことから、近代的な大型魚市場を建設するのは非効率だろう。漁民は捕獲した魚を浜に並べ、ほら貝を吹いて顧客を集め、一尾二〇〇〇ルピアぐらいで売って十分に採算が取れている。

魚は地元住民の重要な蛋白源であり、立派な冷蔵施設がなくとも、毎日浜で新鮮な魚を買えばいい。

また、フィリピン漁船の侵入によって域内経済での水産物の供給が減少したという印象は受けなかった。実際、フィリピン漁船といっても、乗組員はフィリピン在住のサンギル人（サンギヘ諸島の主住民）であったり、またフィリピン漁船がインドネシア企業と提携しているケースもあり、なかなか取り締まれないのが現実である。

●住民は怠惰か？

地元政府の関係者から常に指摘されたのは人材の問題である。ある郡長は「いくら政府のプログラムを導入しても住民は乗ってこない。彼らは怠惰だからだ」と指摘した。
政府のプログラムで農民に種子を配っても農民はそれを蒔かずに放ったらかしにしている、住民は政府のプログラムに非協力的である、という指摘である。そして昼から椰子蒸留酒を飲んで怠惰だ、と続く。

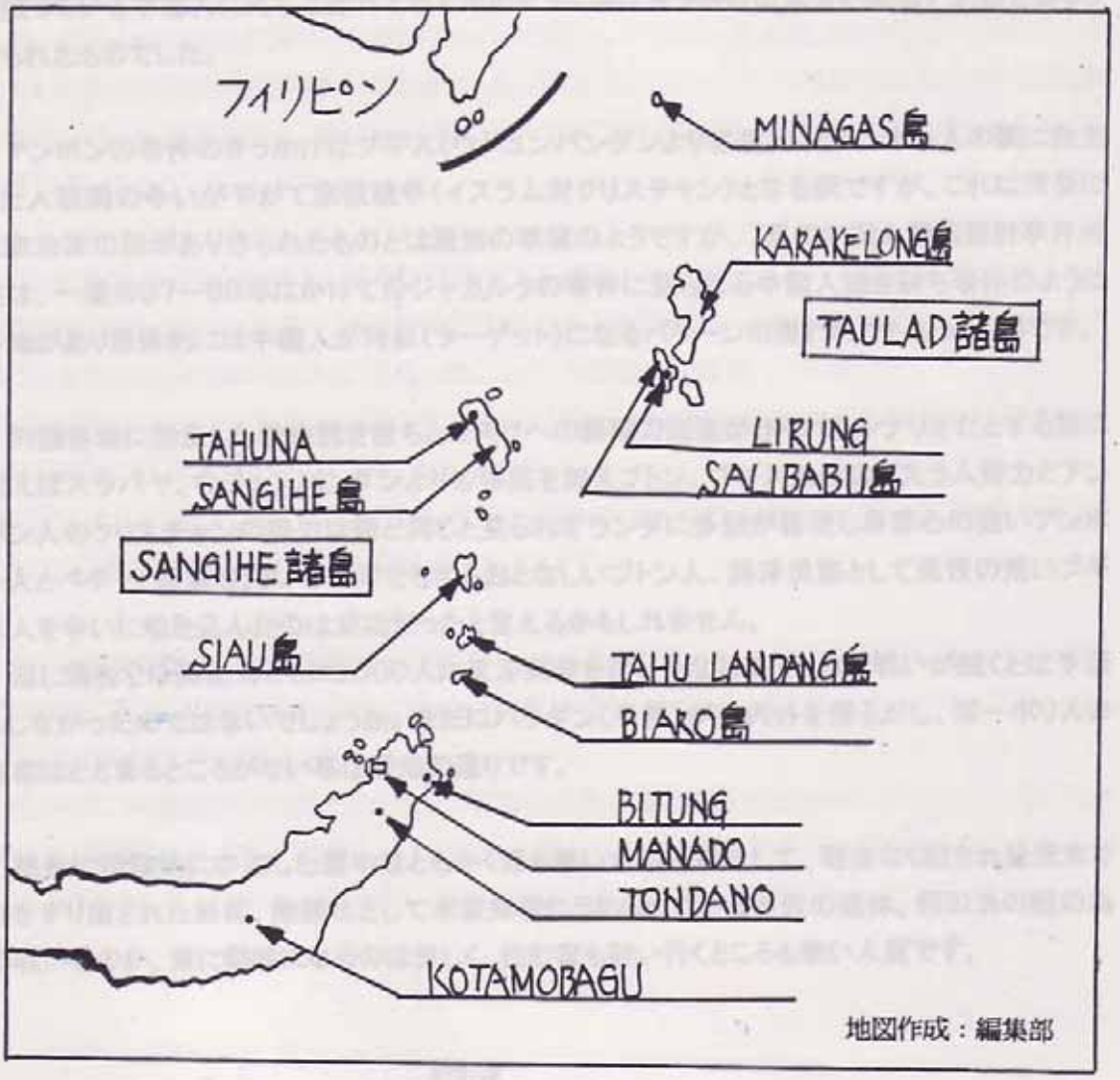
しかし周辺をよく観察すると、農家は様々な作物を植えている。単作はほとんどなく、椰子、ナツメグ、丁字、カカオなど様々な換金作物を植えている。
事実タラウドは昔、サンギヘと並んでコプラの一大産地として栄えていた（ただし、現在は病虫害が放置され、対策が遅れたため多くの椰子が再生産できなくなっている）。

タラウド諸島ではとくに調味料として使う小型のミカン（魚料理用の調味料として使われることが多いので現地ではレモン・イカンと呼ばれる）があちこちに植えられていた。このレモン・イカンはタラウド諸島の特産で、それに目をつけた実業家がマナドで栽培してジャカルタやスラバヤに出荷し、大成功しているとのことである。

このように、農民が自分なりに工夫して農作物栽培を行なっているところに、政府のプロジェクトで見慣れない種子が配布されれば、農民は戸惑うはずだ。イモ類が主食のタラウド諸島でも、カラケラン島で灌漑による水田開発が行なわれた。貧困救済のためのソーシャル・セイフティ・ネット資金も他地域と同様に入ってきていた。

マナドから船でサリバブ島・リルンに着き、リルンから船とバスでカラケラン島の中心地ペオまで行ったが、沿道の家々の庭先に水道の蛇口が設置され、住民が自由に水を利用している姿が印象的だった。南スラウェシ州の離島を歩いた経験からすると、離島では「水をいかに確保するか」が最重要課題だからである。カランケラン島の山々には水源が多く、住民は水汲みの労力から解放されている。この水の豊富さという点では、大サンギヘ島も同様であった。

タラウドの労賃は単純労働でも一日二万ルピア（食事代を除く）と他地域よりも高い。労働力不足の傾向はあるが、港に船が入れば荷役をし、それ以外は商店の荷役や農園労働に従事する、と一人の労働者が融通を効かせて働く。現在、ナツメグや丁子の輸出価格が高く、辺境であるタラウドの地域経済はその恩恵を享受していたのである。まさに「楽園」の趣があった。



地図作成：編集部

アンボン在住10年目の事件

在ビツン(BITUNG)　吉田　全志
PT. SINAR ABADI CEMERLANG社

私がインドネシア海老事業に1971年に参加してから今日まで30年になりますが、水大当時遠洋航海に政情不安で寄港できなかったインドネシアに12年間のスマラン基地をスタートに、飢餓島のようなアルー島基地、そしてアンボン駐在 10 年目に体験した宗教戦争、やむなく現在のビトンに基地を移転して9ヶ月、いつの間にか30年が経過してしまったという感じです。

スマラン当時、中部ジャワのSOLOでガールフレンドをめぐる中国人とジャワ人高校生の争いがきっかけで東はスラバヤ、ウジュンパンダンまで波及した暴動は一週間に至りスマラン市内は戒厳令が敷かれ夜間外出は禁止となり約150名の死者が出て当時としては大きな事件でした。

この体験も1970年のクアランプール、ペナンで遭遇したマレー人暴動と共に日頃おとなしく見えるジャワ人の抑圧された、何時か何かのきっかけがあれば暴発する、また90%以上の経済を握っている中国人に対する妬みと水と油のように溶け合う事の出来ない根強い反感を感じさせられたものでした。

アンボンの事件のきっかけはブギス(ウジュンパンダンより移住)人とアンボン人の間に発生した人種間の争いがやがて宗教戦争(イスラム対クリスチャン)となる訳ですが、これは背景には政治家の影があり作られたものとは周知の事実のようですが、7月の中国人商店焼討事件発生は、一連の97－98年にかけてのジャカルタの事件に見られる中国人焼き討ち事件のように下地があり最終的には中国人が対象(ターゲット)になるパターンの現われでもあったようです。

勿論各地に発生した教会焼き討ちとモスクへの襲撃の報復が作られたシナリオだとする説に従えばスラバヤ、ウジュンパンダンよりの移民を加えブトン、ブギス主体のイスラム勢力とアンボン人のクリスチャンの勢力は殆ど同じと見られオランダに多数が移民し自尊心の強いアンボン人とベチャ、農業等汚い事も何でもするおとなしいブトン人、海洋民族として気性の荒いブギス人を争いに巻き込んだのは成功だったと言えるかもしれません。

但し現在では両勢力ともに2000人に及ぶ死者を出し今なお果てしなき戦いが続くとは予想もしなかったのではないでしょうか。未だにバクダン(手製)が市内外を揺るがし、軍ーポリスの発砲はとどまるところがない事は周知の通りです。

戦争に積極的に参加した連中はともかく罪も無い女子子供そして、理由なく殺され胎児までひきずり出された妊婦、無縁仏として水産岸壁にうめられている多数の遺体。何の為の誰の為の戦いなのか、常に犠牲になるのは貧しく、住む家も無い行くところも無い人達です。

日常生活に宗教という基盤が無い私達には宗教戦争というものは一体何なのか好むと好まざるに拘わらず戦争に参加しなければならない人達の気持ちは全く理解できません。

小生の会社の船がアンボンに給油に入る時、港の入り口でクリスチャンを下船させイスラム船員だけで入港しイスラム勢力下の岸壁に接岸2－300人のイスラム戦士が船内を探し、オベットは居ないか(クリスチャン)と尋ねるのが通常、居ればなぶり殺しは確実です。

イスラムの船員でもパランを持った連中が200－300人やって来て魚を寄付しろ、クリスチャンは居ないかといってきたときには全く生きた心地がしなかったというのも無理ないことでした。

ジャカルタから貨物船に乗ってやってきたイスラムの船員が上陸して、知らずにクリスチャン地区に入り込み嬲り殺されそれを聞いたイスラム勢が報復にでる等は数限りなく、何度行われた手打ち式も全く効果が無く、戦いは果てしなく続いている現状です。

長く続いた独裁政権の崩壊そして政権交代、東チモールの独立戦争、北スマトラ－アチェ地区西イリアン地区の独立運動も難問を抱えて、他の地区よりもっと問題の根が深いとおもわれるアンボン宗教戦争がおろそかに取り扱われているようですが、それにしても国軍－ポリス地方政府が一体となっておらず軍の中でもマリニールは最も民衆には本人達は大半がジャワ派遣のイスラムであるにも拘わらずどちらにも味方しないことで評判よく、他の連中は軍の中でも宗教間の対立、ポリスと軍の対立、時には軍同士、ポリスと軍の撃ち合いも行われているとのもっぱらの噂です。

アンボン島は旧ポルトガル、オランダ時代からグローブ、ナツメグなどの香料生産地でマルク州の中心地として栄えて来　が水が奇麗で質も良く沸騰させないでそのまま飲んでいる人達も多く小生もためしに飲みましたが腹痛も起こらず下痢にもなりませんでした。
(此処MANADOとBITUNGの間にもAIRMADIDIR地区にもミネラルウオーターの工場が有るほどきれいな湧水が出ると聞いています。
道理でミナハサ地方に美人で色の白い女性が多いのは水の奇麗なのも大きな理由でしょうか。
それにしてもアンボンには黒い人が多かったようです)

海は特に南側のバンダ海側が急激に深くなっており西側のブル島との間と共に1キロ沖合いは水深2000－3000mもあるので海の透明度は素晴らしい。沿岸でシュノーケリングをしていても30Mくらいは見えます。

世界的に有名なBUNAKENのサンゴ礁はまだ見る機会に恵まれませんがアンボン周辺もきれいな珊瑚礁が沢山見られます。一部に魚を獲るのにバクダンを使用しているものですからサンゴが死んでしまって再生が送れている地域があるのは残念ですが。

アンボンは小さな島ですから殆どの村には行ってみましたがイスラムークリスチャンの村を問わず親しみやすい人達で暴動以降は市内と空港間を往復するぐらいでしたが以前は珊瑚礁のきれいな場所を心がけて歩きましたが殆どの人達が気さくに教えてくれたり案内してくれたものでした。

1998年12月末家内ともに休暇で帰国し1月末にアンボンに帰る予定が正月に始まった暴動が意外に長引き会社からの指示で3月末に再赴任まで最初の暴動は体験することができませんでした。
当初は2ー3日で終わると安易な考え方をしていたのですが以外に長くなり3月末にはアンボン周辺は沈静化しその後7月末迄は小さな事件はあったものの殆ど治まったものと見られていました。もっともアンボンは一度沈静化されたものの4月4日の日曜日にTUALに飛び火して新聞報道は30名位(実際は100名名余)の死者を出す暴動が発生。小生の会社のスタッフ4名の行方が心配されましたが4月20日昼過ぎに全員の安全が確認されほっとしました。

一ヶ月余りに亘るTUAL暴動も扇動者、政治がらみといろいろな噂が流れたが、アンボンの宗教戦争の避難者達が再びTUALで被害を受けたケースも多かったようです。

西イリアン海域(西南イリアン沿岸より真珠の島として戦前から有名なアルー島にかけてのアラフラ海)は海老の好漁場で東シナ海の北の黄海地方で漁獲される大正海老に似た通称バナナ海老、クルマ海老に似たオーストラリアンタイガー海老、そして瀬戸内海のヨシエビ類のエンディバー(通称エンデ)養殖エビの代表ブラックタイガーの天然海老が漁獲され1969年の試験操業(アンボン基地)を最初に現在に至るまで、日本大手の水産会社や商社の合弁会社もここを主体に毎年6000ー8000トンが内地向けの海老を生産しています。

又この海域はもともと1960年代なかばオーストラリアのダーウィン基地に日本の水産会社の合弁会社の船がカーペンタリア湾よりアラフラ海域までバナナエビ主体に漁業をおこなってきた(オーストラリア政府の規制が厳しくなってきて各社共やがて撤退しアンボン、ソロン地区の事業に力を入れるようになったものです。ダーウィン基地の漁船の西イリアン海域での操業は無許可の違反操業でした)

又この海域は魚の宝庫でもあり東シナ海域の殆どの魚が見られます。
従来韓国、台湾船の無許可操業船も多くアルー島南海域のヤリイカ漁場はシーズンになるとイカ釣り、トロール兼用船の約300隻操業を行ない夜は遠くから見ると大都会の街の灯かりかと錯覚するくらいでしたが殆どが違法操業船で年間3000ー5000トンが漁獲されているとのことですがデータは殆どないので良くわかりません。
もっとも最近はインドネシア海軍の取り締まりも厳しく無許可違反操業は難しくなっていますが。

魚については最も多いのはイシモチの種類、ニベ、タチ、アカマツダイ、ヒラアジ、カタクチイワシ、サワラなどで場所によっては30分も引き網すれば一杯になり揚げ網できないほど漁獲されたものでしたが乱獲により激減しまたサイズが小さくなっています。

それにしても30年も続けて6000－8000トンあまりの海老の生産が続いているアラフラ海は西イリアン沿岸の湿地帯にあるアル一島の北側の殆どがマングローブの林で稚えびの生育に適していると思われます。

今後についてはエルニーニョ、ラニャーナなど自然条件が変わり海水温度の上昇が続く傾向があり、魚を目的の船を含めトロール船が400隻以上操業しておりえびの漁獲量の非公式の数字は例年12000トン以上とされており何らかの規制取り締まりがなければ今後はもっと厳しくなるものと思います。

本題を大きく逸れてしまいましたが,小生3月末再赴任より次の暴動発生までほぼ4ヶ月小競り合いそしていろいろな噂は流れたものの至極平穏な日々が続きこのままおさまるのではないかと思われました・

3月末には空港より市内まで軍のテントがイスラムとクリスチャンの部落の境付近部落侵入阻止の要点、橋のたもとなどに約20個所に軍のテントが張られ少ない所で3－5名多い所では10名以上が警戒にあたっており特に最も多い衝突地点―BATU MERAHの上の峠から街の入り口にかけ約300Mの間に7個所のテントがありましたが6月―7月の初めにかけ徐々にテントの間引きが行われ海軍（マリニールを含め）の撤収が始まり確か7月の18日だと思いますがマリニールの大半が撤収されている日の前に各地で市民との間にお別れ会が行われたほど和やかな雰囲気でした。

私達日本人も4月中旬よりOKのでたゴルフ場で、と言っても空港に隣接した空軍基地の広場で5個所のグリーンの中の4つをワンラウンドに二回使う小さなものでゴルフ場といえるかどうか分かりませんが変則ゴルフ場で池と小川か゜各ホールに配置されたトリッキーな本格的なコースとは大違いで全く平坦な池もバンカーもないゴルフ場でした。

始めた当初はTOFCO/MAPRODIN（海老トロール会社）の駐在員の人達のゴルフ同好会で中国人の資材サプライヤー2名、日本人女性1名（TOFICO田中夫人）含む約10名で゜、コースは石も多くラフの中でプレーしているようなものだった様子です。

それでも途中参加の小生や家内には日頃の運動不足と簡単なようでなかなか纏まらぬスコアに結構楽しくプレイを続けていました。

同好会の人達は結構楽しく日頃のお互いのコミニケーション不足を補い終わった後の簡単な食事会にその日のスコアや調子を話題に喉をうるおすビールの美味さは格別でした。

ちなみにグリーンフィー2万ルピア、キャディフィー5千ルピアと格安。キャディは小学生から高校生の子供たち。現地人プレーヤーはPLN, ポリスのトップ、銀行屋などでした。

コンペも行われており暴動前には徐々に整備も行き届いてきていました。

次の暴動発生もゴルフに関係のある7月25日の日曜日で前日の打ち合わせTOFICO の人達と朝5時ころ家内と二人でゴルフ場に向けて車を走らせたが、途中NANIYAの精神病院、刑務所を過ぎた、1月の暴動で人家の焼き討ち事件の被害の大きかったWAIHELU地区に入り、家内がどうもおかしい、道路を歩いている人達の様子を見るとKATEKATEの方向に向かって小さなバックを持った人ばかり、朝の散歩ではなさそうだし昨夜どこかに避難したような様子だと話し合いながら車を進めたが日曜日の朝も早く行き会う車も無かった。

やがて車は学生の町であるPOKAの近くのPLNの発電所の前にくるとかなりの群集が集まりPOKAの山側の住宅地から煙りがあがっている。はて、ボヤでもあったかと道端の人達に何があったか聞いたがはっきりせずフェリーと空港方面への分水道までくると完全武装の兵士が20数名警戒しており、

"何処に行くのか？"　"空港まで、何があったのですか？"

"いや、通りなさい"　"この先、通れますか？"

"先に行って聞きなさい"

とのことで走り始めましたが右方山麓に真赤な火の手が上がりかなり大きな火事の様子。POKAからPERTAMINA給油所に至る橋の軍のテントにはかなりの兵士が警戒しており一般の群集もかなり集まっていた。しかしその先は異常なく、行合う車にも合わずゴルフ場に着いた。

もっとも今年の暴動以前に 1998 年 12 月に最初の暴動があったWAYAME住宅地を過ぎたHATIVE BESAR入り口のブトン人のガソリン経由類販売所や焼討事件の家の前の道路がジグザグに石を配置し車を早く走れないようにしてあったが。

ともかく無事ゴルフ場まで到着し、すぐにTOFICOの車もやって来て早速ゴルフを始めたが、POKAの事件はイスラムが仕掛けた焼討で昨夜半に始まったとの事。

取りあえずゴルフは続け10時過ぎサプライヤーの中国人のハンドホンに連絡が入りどうもアンボンに事件は飛び火しアンボン入り口のBATU MERAHイスラム地区、市内最大のモスクのあるアルハタ地区にイスラムが結集しはじめているとの連絡で早々にゴルフを中止し帰宅した。

途中POKAにはまだ燃えており赤い鉢巻の若者（クリスチャン）の乗り込んだ2台のトラックを軍とポリスが押し止めていたが小生の借家HALONG海軍基地上の住宅地まではスムースに帰ったが、市内に会社と MESS のあるTOFICO車はHALONG隣接のクリスチャン地区のGALALAが警戒に入り最大の難関BATU MERAHーイスラム地域をなんとか通過して帰ったとの事。

翌26日は変わり無く出社、車の数はガタ減りでバスを待つ出勤サラリーマンが沿道に溢れ暴動を恐れたミニバスの持主が車を出さないので車は極力少ない。

GALALA, BATU MERAHの緊張は続いているが軍のテントで安全を確認し通過する。特にイスラム地区のBATU MERAHは道路に若者がたむろし異常な雰囲気であったが車は順調に通過した。

昨日焼討事件のあったPOKAは夕方5時頃3個所から火の手が上がり2時間程で鎮火する。
27日BATU MERAH、ALFATAイスラム地区の緊張が続きパラン(山刀)を持った群集が終結を始めたとの連絡で会社は休業とする。
POKAの山際は再び火の手が上がり猛煙が上がる。噂に寄ればMALUKU東南出身者達(KM. TANIMBAR(地方)のイスラム、クリスチャンの争いらしい。
双眼鏡でPOKA, KATE KATE(NUSANTAR FISHERY―マルハ合弁のエビ会社)地区は全く車は動いておらず通行止めの様子。

昼近く、かねてからウジュンパンダンの副領事―金子さんより要請のあった日本人アンボン駐在安全確認の係(BRIMOB)に電話しアンボン市内の様子を問い合わせると市内はAY PATTYの中国人商店街に焼討始まりALFATAイスラム中枢より暴徒が中国人商店街の焼討、略奪を始め、今後の成行は予想がつかず安全の確保は難しく最も安全と思われるMANISE HOTELに逃げる様指示あり、BATU MERAHイスラム地区の交通止めと暴徒が道路封鎖を行っているとのことで、出迎えるとの連絡で待機する。
日頃静かで人通りの少ない自宅の前は何処に行くのかミニバスやピックアップに家財道具を積んで走っている。また緊張した近所の若者はパラン(山刀)を各々ぶら下げて右往左往し落ち着かない様子。状況を問合せるとここは安全だから心配ない。イスラムの攻撃を防ぐための準備だとのこと。
安全の確認は、との問いに東はPASSOまで西はGALALA、裏は崖、前は海軍基地と条件はそろっている。ただ食べ物だけは一週間ぐらいは準備した方が良い。どうも心配なのはHALON ATASとGALALA地区の間にある小さなブトンのイスラムの部落―応警戒は必要らしい。

昼過ぎBRIMOB氏と完全武装2名の護衛付きで厳戒のGALALA地区を通過、途中往来するのは軍とポリスばかりの道路を最大の難所BATU MERAH地区へ。
BRIMOB MESSの入り口でいったん止まりBATU MERAHの様子を尋ね部下1名を連れ自分が運転小生と家内は後部座席へ。
途中で会う部下に市内や他の様子を聞きながらGARRUNGUNの峠を越える。
不思議な事に途中にテントを張ったマリニール又往きかう軍の車や単車とは全く言葉を交わさずむしろ避けている様子。

市内を見下ろす峠まで来て驚いたことに市内に入る三叉路迄それ迄軍以外殆ど見なかった人影が白い鉢巻きをし腰や背中にパランを提げたイスラム集団が道路にたむろして坂の途中は石や木を並べ車はジグザグにしか進めない。その数は70―80名位か。勿論途中にマリニールのテントが3個所各々20名以上の軍が小銃を持ち警戒しているが上からの命令か全くテントから動かない。

街はAY. PATTYの中国人商店街から1個所真黒な煙が上がりあちこちに火の手が上がっている様子。勿論POKA地区は 3 箇所に広がりかなりの火勢か真黒い煙が上がり朝から鎮火の様子は見えない。

BRIMOB氏は銃を道に掛け銃口を車の窓側に向け半分程窓を開け部下の方は小銃をこれも窓から出し引き金に手をかけ，何時でも打つ体制で助手席。見たところ部下より上司の方が緊張気味。BRIMOB氏の運転のためか支障なく市内に入ったが坂を下りる途中はジグザグに緊張し切った群集というより民間武装集団（白鉢巻にパラン）で何かの切っ掛けで何時襲撃されるか分からないといった危険を感じたものでした。

日頃全く人懐っこい連中、気さくだし陽気でもある人達が他宗教の妊婦の腹を裂いて胎児を引きずり出す残任さを兼ね備えているのかと思うと未だにぞっとする。しかし小生には戦争の経験も無く他人との争いに大きな大きなケンカの経験もなしよく分からないが人間誰でもパニックになればコントロール出来ない野生をもっているのかも知れないとも考えられます。

BATU MERAHの難所を通過。厳戒のBERAKANG SOYA地区に入ると群集の姿は少なくマリニールの姿が目立ち緊張はしているがむしろほっとする雰囲気であった。
BRIMOB氏の案内したホテルMANISEは満杯殆どが中国人（市内の商店街の人たちが多かった）の家族連れで当方が案内されたのは誰も人の居ないVIPルーム（キタナイ部屋で臭く家内は死んだ方がましだから帰ろうというほどひどかったのですが）

部屋は3階で窓からはBCA銀行、官庁街、AYPATTY商店街が見え、AYPATTYの煙は益々ひどく時折真赤な炎を交え消える事無く 3 日以上燃え続きました。
屋上から見るとPOKAの3個所の煙は衰える事も無く燃え続き、市内外、近郊全域が緊張状態でした。

ホテルの西側のヌサテンギリのクリステヤンの部落をホテルの屋上から見ていると中に30－50名の若者中心の男達が　を繰り返し部落の入り口はバイクが止められ山車の侵入を防止、4－5人の男達が特に夜間は警戒を強めていました。各々パランを持ちムスリムの襲撃に備えている様子。
ホテルの前はポリス、軍が警戒し一般車の通行はあまりなく走っているのは軍の単車、ジープ、時折軍を満載したトラックが緊張状態のBATU MERAH方面に走っていきました。

BRIMOB氏の話ではアンボン市内近郊で安心できる場所はなくBRIMOB氏の宿舎は安全だが今のところは比較的安全と思われるところはこのホテルだろうという事でした。
そして自分は忙しいので失礼する。車はホテルの前にしか駐車場はなく危険であるので彼の宿舎の安全な場所におくからと配下と共にハンディTEL の番号をメモ、危ない時は何時でも連絡してくれ、助けに来るからとのことで行ってしまいました。

最も安全なはずのBRIMOB氏の宿舎が焼け危険な地区HACONG ATAS(小生の借家地区)とHOTEL MANISEが未だに無傷のままとは、今になって考えると皮肉な結果です。

満杯のホテルは中国人家族が多く1階のレストランは昼時夕食時には中国人と案内したBRIMOB氏、軍の上の階級らしい人達が目立ち、普段は食事以外は殆ど姿の見えない所ですがテーブルは満席状態でひそひそと話し合っておりウエイターやウエイトレスなども上から口止めされているのか何を聞いても自分は良く分からないととの回答で各地の状況は良く分からず駐在の人達(日本人)の安否も当時はTELの回線が満杯らしく、ハンデイ TEL も通じなくて不明でした。

折りからホテル宿泊中のマルハ駐在員NUSANTARA FISHERYの松井夫妻と会い、話を聞きましたが会社のあるKATEKATR付近は安全だがPOKAは山側の被害が大きく通行止め。市内は全面的に緊張状態で 2ー3 日は動けないかもしれないとの事。
TOFICO MAPRODINの各日本人駐在員は各々のMESSで待機しており松井さん他2名のマルハ駐在の人達もホテル近くの宿舎に居るとの事でありとりあえず安心しました。

夜に入り中国人街ーAYPATTYの火勢は益々強くなり緊張状態が続きホテル以外も殆どの人達が起きており動き回る人が多く、周辺のクリスチャンの部落は厳戒態勢。イスラム、クリスチャンの衝突地点BATU MERAH, BERAKANG SOYA地区は軍やBRIMOBのものと思われる銃声が続き手製爆弾らしい爆発音も続いた。

ホテル裏側の中国人の家を始め殆どの住宅の住民が眠れないらしく家の中を動きまわっており2階と1階を上ったり降りたり荷物を持って上ったり降りたりの緊張し切った様子が見られた。

ホテルの前のTANAH TINGGI部落入口は車の進入を防ぐ為か単車が止められバランを持った2ー3人の検問がおり中央部には20ー30人がたむろし各入口には情報係か各通りに分かれ往帰を繰り返していた。

殆ど眠れない夜を過ごした翌28日AY PATTYの火は隣りのSAM RATULAGI通りにも飛び火、LIPPO BANKの焼失の情報も入ってきた。
POKAは山側、東側と西側に煙が上がっており戦火拡大の様子。
BATU MERAHに近いホテルAMANS直ぐ前の小さなホテルが1月暴動で焼失した市場側から再び出火し焼えたがAMANSは類焼は免れた様子。(TEL 確認)

市内東地区のクリスチャンの危険部落KUDAMATIよりクリスチャン勢がTARAKI, WATHSONのイスラム部落を襲いWAYAME DOLKの倉庫、事務所の一部も焼失したとの情報入る。
14:00 マリニール500名がスラバヤから到着、各地に配属、保安強化態勢に入ったとのTELも入る。
市内外で手製爆弾と軍の発砲は限りなく続いた。

港内は取りあえず安全で入港中の日本の冷凍運搬船、MV SWANへ当方のエビトロール船2隻よりSHIP TO SHIPによる転載終了。アンボン市内の銀行、行政、一般の会社は殆どが閉鎖休業状態でMV SWANは出港許可なく緊急事態として夕方KENDARIIに向け出港した。

出港前に渡辺船長より、もしアンボンより脱出希望あれば乗船するまで待つとのありがたいTELを頂いたが今後の状況も不明なのでやがては沈静化するとの予想で丁寧にお断りした。午前中に焼け始めたBCA銀行近くの民家と郵便局近くの火事は夕方まで続いた。

その後市内外、POKAでも戦いは続きましたがマリニールの応援を得て各地の激戦も31日には沈静化してきたためBRIMOB氏に護衛されてホテルを引き揚げ家に帰りましたが 8 月9日にはAYPTTY始め市内外各地でまた戦闘は再開、激化。

当社ジャカルタ本社の決裁でBITUG移転(アンボン基地の閉鎖)が決まり8月12日海軍基地よりボートで脱出しました。アンボン脱出の中国人54名、SUPPLYER ANTENG氏、30年来の付き合いのBENY氏等と共にまた松井夫妻と空港で会い一緒にウジュンパンダン行き飛行機に乗りましたが、このフライトを最後にMANDARAは中止となったのは幸運でした。

翌 8 月13日、BITUNG着。基地設営に入ったのですがお蔭様で日本人会会長前田さん他皆様のご協力を頂き移転はほぼ完了しました。

この手記も書いてみればなかなかうまく行かず編集長川口さんの依頼を簡単にお引き受けしたのですが、何ともまとまりの無い尻切れトンボの文章で終わってしまい締め切り延長して頂きながら完成できず深くお詫びします。
又チャンスがあれば寄稿させて頂きます。

最後に何度も心配してTEL頂き情報提供、アドバイス頂いたウジュンパンダンの日本領事館の金子副領事、佐久間さん始めみなさまに感謝致します。

1999年3月24日、コンパス紙。
この一枚の風刺画が事件の本質を端的に表現している。(編集部)

ご協力ありがとうございました。

川口　博康

日本人結成当時は本当にこの国はどうなることかと思いました。
初めに安全対策連絡協議会がウジュンパンダン総領事館のご指導によりスタート
次に日本人会へと発展していったわけですが私にとりましてはこのクラブの発起人
の一人として参加できたことによって多くの皆さんと親しくお近づき頂く事が出来
私の駐在生活はより楽しいものになりました。横の連絡ー情報交換によって色々な事
を教えて頂きました。
しかしこの間、この国では色々な事が起こりました。金融危機にはじまり経済
危機ー社会不安ー独立運動ー宗教闘争にまで発展し一時はほんとうにこの国は
デフォルトしてしまうんじゃないかとインターネットにかじりついていた時も
あります。短期間に一万人近い邦人が一時帰国ー避難するという日本の外交史上
始めてのできごとにもであいました。為替による公私共々の泣き笑い、一年で三倍
になるインフレ。どれも始めての経験でした。
また１１月中旬から隣の北マルク州ーテルナテからのクリスチャン中心に一万五千
人もの避難民が私の住むビトン港に上陸しました。ジャワは安定して来たといわれ
ていますが反対に外島は不安定になってきているように思います。

このクラブに入りたくないという方もお見受けしました。
人それぞれですからと思いますが私にはいまだにこういう事が理解できません。
どうしてそんなに日本人嫌いになってしまったのでしょうか。

会報ータルシウスの編集に参加し第八号を皆さんのお手元にお届けする事が出来ました。
私の仕事は皆さんからの原稿集めでした。しかしあまり好かれる役ではないですね。
「どんなテーマでも結構ですから駐在記念に一人一編を」がお願いの趣旨でした。
スラウェシ島ーミナハサを中心にした事をおもに編集してみました。
お陰で会員の方は勿論のこと会員以外の皆さんからのご投稿もあり一年半で八号を皆さん
にお届けすることができました。川井さんが中心になっての会報ータルシウスでした。
川井さんご苦労様でした。
皆様にはほんとうにご協力ありがとうございました。
最後に皆様のご多幸をお祈りしつつこの地を離れます。

１９９９／１２　ビトンにて

《編集後記》　**新編集部長 募集中！**

川井　雄二

前７号の編集後記でも少し触れましたが、会報第１号からこの第８号まで編集を担当した川口編集長と川井編集部員が勇退することになりました。両者とも本来の職務の関係で、従来通りの編集作業を継続することができなくなったからです。

つきましては、第９号以降の会報の編集を担当して下さる方を探しています。性別、年齢、職業、国籍等一切問いません。興味のある方大歓迎です。

編集の作業を端的に言うと、会員から寄稿された原稿を纏めて、表紙と目次を作り、印刷所に発注し、できた会報を配布するだけです。

今までの会報のスタイルに縛られることは全くありません。新しい感覚で、白紙からスタートして下さい。

今までの経験から、原稿に関して一つ提案があります。

編集部員の労力を削減するために、原則として原稿はタイピングされたものとし、やむを得ず手書きになる場合は下書きではなく清書とし、そのままの状態でコピーできるようにすると規定したら如何でしょうか。数十枚の他人の手書きの原稿をタイプアウトするのはかなりの時間がかかりますので編集部の負担となります。

いずれにしても今後の編集方針は全て新編集長にお任せいたします。引き受けて下さる方がおりましたら、当方までご連絡下さい。簡単な引継ぎを行ないたいと思います。

この第８号が現編集部の最後の仕事となりましたが、いろいろな意味で出来栄えもよく、有終の美を飾ることができたと思っております。

第５号で問題提起されていた慰霊碑の件が、この号が解決編となり一件落着となったこと。同様に創刊号から今まで未知の分野であったサンギヘ・タラウド諸島の情報やクラバット山登山記、ミナハサ料理の体験談などが一挙に掲載されたこと。

そして、『一人一遍』というこの会報の趣旨通り、３名の新会員より寄稿があったこと。等々がその理由です。

また、吉田氏のアンボンでの体験記は、未だ政情不安定な当国で就労している我々にとっての警鐘とも言えると思います。此処北スラウェシはインドネシアの中で一番安全な地域だと自他共に認めるところですが、かといっていつ何が起こるか全くわかりません。

有事が発生した場合に備えて，日頃より会員相互の連絡を密にとり情報交換を行なう必要性があると強く感じます。

今まで約１年半、川口編集長と二人三脚で編集を行なってきました。

私の方は半分以上趣味でやっており、特に辛かったという事はありませんでした。

逆に、他人の原稿を誰よりも先に読めるので役得をした気分です。むしろ川口編集長の渉外活動の方が気苦労が多く大変だったことと思います。

川口編集長、長年お疲れ様でした。そして新編集長、これからよろしくお願い致します。

2000年１月１日